

## IV 瓦塚古墳の調査

### 一 遺 構

#### 墳 丘

墳丘部は昭和六三年度の第1・2トレンチ、平成元年度の第1・4トレンチで保存状態の調査を行った。また、昭和六三年度には墳丘削平部の三個所の調査区で、平成元年度にも前方部西隅角部において墳丘裾部を検出した。以下、各トレンチ及び調査区の調査結果について述べる。

#### 昭和六三年度第1トレンチ

昭和六三年度の第1トレンチは後円部の西側斜面に、長さ一五呎、幅二呎で墳頂付近から現状の墳麓まで設定した。表土の厚さは、全体に〇・五呎ほどで、その下にはほぼ水平に積まれた盛土が互層をなしていた(第29図)。墳丘部には若干の円筒埴輪の小片が認められたが、埴輪列は遺存していなかった。このことは、前方部に設定した第2トレンチより墳丘の保存状態が悪いことを示しているとみられる。墳丘盛土面の傾斜は標高一九呎から二一・六呎の間では三〇度で一定していたが、これより上方では傾斜は約二〇度と緩かった。

墳丘裾部(盛土の裾の意味でなく、周堀と接する下場を意味する。以下、同じ用法)は旧表土層及びローム基盤層を掘り込んでいるが、その下場は瓦

塚古墳の墳丘西側を南北に走る近代の溝(SD1)によって破壊されていた。旧表土層上面の標高は一八・四四呎、内堀底は一七・二呎であるから、内堀は約一・二呎掘り込まれていたことになる。

なお、第1トレンチの墳頂部付近は地表から約一・三呎掘り下げたが、土層に変化はなく、主体部を想定させる遺構は検出されなかった。

#### 昭和六三年度第2トレンチ

前方部東側斜面に設定した長さ一三・五呎、幅二呎のトレンチである。墳丘盛土面の保存状態は良好であり、中ほどより少し下がった位置(標高二〇呎付近)で円筒埴輪列が検出された。この埴輪列を追求するため、東側に一・五呎ほど拡張調査を行った。

埴輪は原位置にあり、基底部のみが残り、上半部は破片となって周囲に散乱していた(第24図)。約三呎の区間に七本が遺存していたが、西から四本目は失われているとみられたので、平均の芯々間は三八呎となろう。瓦塚古墳の円筒埴輪の口径は三〇呎を超えているので、ほとんど口縁部が接する状況で据え置かれたものと推定される。埴輪は黒色土の盛土に据えられていたため、掘り方やピットの確認は困難であった。また、特にテラス状の施設は検出されなかったが、埴輪の底部を固定するためには、わずかでも平場は不可欠なので、大走り状の狭いテラスの先端が流失した可能性も考えておくべきだろう。

墳丘の傾斜は標高二〇・六呎付近を交換点として、下部では二六度、上部では二〇度で一定していた。墳丘裾部は旧表土層及びローム基盤層を掘り込んでいたが、第1トレンチと同様に下場には近代の溝(SD1)が接していた。旧表土層上面の標高は一八・三六呎、付近の内堀底面の標高は一七・二

四層であった。

#### 平成元年度第1トレンチ

西側のくびれ部斜面に設けた長さ一二・七層、幅一・五層のトレンチで、墳頂付近から内堀に及ぶ。墳丘の傾斜は全体としては二三度であるが、一定していなかった(第31図)。斜面の中ほど標高一九・二層前後のところに幅一層前後の犬走り状のテラスが検出された。円筒埴輪は原位置のものはないが、直下から完形品(21)が出土しており、その出土状況(第27図)から、この犬走りに樹立されていた可能性がある。精査の結果、直径三〇センチほどの円形ピットが一基検出されたが、円筒埴輪の掘方の可能性が考えられる。ところで、円筒埴輪片は犬走りより上方にも分布しており、墳頂付近まで連続的に散布していた。このことは、墳頂端部にも円筒埴輪列が存在したことを示しているよう。

墳丘裾部の保存状態は良好で、約六〇度の急勾配で旧表土層及びローム基盤層を掘り込んでいる状況が明らかとなった。その下場に沿って上幅〇・一〇・二層の溝が検出された。土層の観察によれば、後世の掘り込みではなく、築造時のものと判断された。この溝は、くびれ部から造出しの北側までの延長九・五層ほどの区間で断続的に遺存していた。掘削時の湧水に対する配慮であった可能性がある。また、くびれ部の墳裾には上幅〇・七層、長さ二層の低いテラス状の掘り残しが存在していた。これは昭和六一年度に調査した東側くびれ部付近の足掛りと推定した遺構と共通するものであろう。

#### 平成元年度第4トレンチ

前方部前面の墳丘から中堤にかけて、墳丘の主軸想定線上に設けた長さ二五・五層、幅一・五層のトレンチである。表土は墳頂部付近で〇・四層、墳

麓部で約一・〇層あった。表土を剥ぐと墳丘盛土が現われたが、中段にテラスなどの施設は遺存していなかった(第三一図)。内堀内からの多量の円筒埴輪片の出土状況から、盛土とともに円筒埴輪列が完全に崩落したものと考えられた。

墳丘は約二三度の傾斜をもって立ち上がるが、墳頂部付近の標高二一・三層地点を交換点として、一度と傾斜を緩めていた。このことは平面図のコンタにもよく現れているところであるが、大幅な墳丘盛土の崩落があったとは考えにくい。

墳丘裾部には後世の溝があり、完全に破壊されていた。内堀内の円筒埴輪片の分布が南側に片寄ることから、本来の下場は三層ほど南になると推定された。内堀の中堤側立ち上がり部下場には、ローム層を掘り残した段が二箇所検出された。古墳築造時の足掛りであった可能性がある。

#### 昭和六三年度後円部東側調査区

後円部東側の墳丘削平部に設けた東西八層、南北一二層の調査区である。墳丘盛土は失われ、光沢を帯びた粘質の黒褐色土(旧表土層)以下が残存していた(第三〇図)。内堀に向かって約一度の緩い傾斜面が約四層幅で、検出されたが、天明のパミスを含む表土層に直接覆われていたので、本来の墳丘斜面でなく、改変を受けているとみられた。墳丘裾部は約五〇度の急傾斜で掘り込まれていたが、下場のラインが隣接する昭和六一年度の第一トレンチでの下場ラインと連続して弧を描く点から本来のものとみてよいであろう。

#### 昭和六三年度前方部東側調査区

前方部東側の墳丘削平部から内堀にかけて設けた東西一二層、南北九層の調査区である。墳丘現存部に隣接した部分では盛土が〇・七層ほどの厚さで

遺存していた(第三〇図)。盛土はロームブロック主体の層と褐色土主体の層とを互層として、ほぼ水平に積まれ、良く叩きしめられていた。盛土層の下には黒褐色の旧表土層が約三〇センチの厚さで確認された。層中にはF Aと推定される明灰色粒子のブロックが含まれていた。旧表土の上面の標高は一八・四四センチであった。

墳丘裾部は約五五度の急傾斜でローム基盤層を掘り込んでいた。その下場には上幅一六センチ、深さ一二センチの小溝が掘られていた。これは東西両方のくびれ部付近で確認された小溝と共通するものである。墳丘裾部は下場から〇・八センチは保存状態が良好であったが、それより上部には上幅二センチ、深さ〇・九センチの攪乱があり、破壊を受けていた。なお、内堀底面は平坦で、標高は一七・二四センチ前後であった。

#### 昭和六三年度前方部南調査区

前方部正面の墳丘削平部から内堀にかけて設けられた東西一三・五センチ、南北八・二センチの調査区で、生垣との関係で三角形となった。前方部前面の墳丘裾部は遺存状態は良好でなかったが、わずかな傾斜をもってローム基盤層を掘り込んでいたことが確認された(第三〇図)。その下場ラインは昭和五四年度の調査区での下場ラインと連続するものであり、信頼に足るものと考えられる。これらの結果から、前方部前面の墳裾は、墳丘主軸に対して直交せず、斜交することが決定的となった。

なお、同調査区南端では内堀の中堤側立上り部を検出している。内堀の幅は下場で四・一センチとなる。堀底は平坦でなく、墳丘寄りで一七・一二センチ、中堤寄りで一七・三六センチと高低差があった。内堀の中央部には墳丘裾部に平行するかたちで、上幅〇・八センチ、深さ〇・四センチの溝が走っていたが、年代は不

詳であった。

#### 平成元年度D区

前方部西側隅角部を確認する目的で墳丘削平部に設けた東西、南北共五センチの調査区である。ローム面以下で前方部隅角が残存していた(第三三図)。その位置は東側の隅角部と主軸をはさんでほぼ対称の位置となる。前方部前面の墳丘裾部は主軸方向へ向かって開く可能性が考えられたので、南側に三センチほど離れてE区を設定して、その下場ラインを追究した。E区では根切り溝によって墳丘裾部が若干削られていたものの、前述の推定を確認する結果となった。昭和五四年度及び昭和六三年度の調査結果とあわせると、前方部は所謂剣菱形のプランをもっていたと考えざるをえない。

#### くびれ部及び造出し

西側のくびれ部から造出しに及ぶ範囲の発掘調査は平成元年度に実施し、北からA・B・F・C区に区切って面的な掘り下げ調査を行った。

くびれ部はくの字状でなく、緩やかな曲線部をもった後、前方部と連結していた。くびれ部の墳丘裾部の保存状態は良好で、先に第1トレンチの調査結果で述べたように、急傾斜で旧表土層及びローム基盤層を掘り込むものであった。また、墳丘第一段のテラスは存在していなかった。

造出し部については、その中央部を南北に走る根切り溝(SD1)によって破壊されていたが、墳丘寄りの部分は保存状態が良好で、多数の土器片が造出し上とその北側の内堀から検出された(第28図)。これらの須恵器と土器は接合関係を調査した結果、本来、造出し上に据え置かれたものが、損壊して、あるものは中堤上に留まり、またあるものは内堀内に転落したもの

と考えられた。一方、円筒埴輪片についてもドット図(第27図)を作成したが、数千点に及び、特にくびれ部の埴輪部には半完形品も含めた集中が認められた。これらは主に埴丘中段の円筒埴輪列からの転落品であろう。

造出しの平面形は昭和五七年調査区とあわせると全形が知られ、幅八呎、奥行き六・五呎の長方形で、隅角は丸く調整されていた。立面的な検討では、少なくとも造出しの埴丘寄りの部分は盛土されており、旧表土層の削り出し面と連続する約一二度の緩傾斜面をなしていた(第三二図B区南壁土層)。造出し上方の未調査部分で、コンターラインの造出し方面への張り出しが観察される状況からみれば、造出しは一定の傾斜面をもち、その上端は埴頂部に達していた可能性が強い。一方、造出しの西側の部分は昭和五七年度の調査によれば、ローム基盤層を内堀底から○・二〇・三呎の比高差で掘り残したもので、盛土の有無については不明であった。この部分は、今回明らかになった傾斜面との関係で盛土の存在は考えられず、先端の一部分は平坦であった可能性がある。そう仮定した場合の平場の奥行きは二呎弱となろう。

なお、造出し調査区東端のF区とC区にまたがる部分に幅一呎、長さ二呎の浅い土壌を検出したが、円筒埴輪片を含むだけで、性格は不明であった。土層の状態から後世の掘り込みとみられた。

## 内堀

平成元年度に埴丘東側内堀の中堤側立ち上がりラインの調査を、平成二年度に前方部西南側の内堀の面的な調査を実施した。

## 平成元年度第2・3トレンチ

埴丘東側の内堀には最近まで機能していた上幅三呎程の水路が南北方向に走っており、その部分での攪乱が大規模なものであるため、中堤側の立ち上がりラインの確認に目的をしばった調査を平成元年度に実施した。

内堀の中堤側立ち上がりラインは、その南端が昭和五七年度の調査で、北端が昭和六一年度の調査で明らかとなっていたため、両者を結ぶラインに調査区を設定し、重機を用いて、幅三呎、長さ六五・四呎にわたってプラン確認調査を実施した。その結果、表土を○・六呎ほど剥ぐと、中堤と内堀の境界ラインが明瞭に現われ、一直線をなしていることが判明した。昭和五七年度に調査を行った内堀の南東隅角を基点とすると、約七六呎の区間を直行しており、後部部で曲がる徴候はまったくないので、瓦塚古墳の内堀は従来から考えられてきたように方形系統の特異なものともみてよいだろう。

プラン確認にあわせて、これと直交する二本のトレンチを設定し、内堀部分掘り下げた。前方部側に設けた第2トレンチでは中堤の上面の標高は確認面のローム層上面で一七・七八呎であったが、この上にはしまりの強いオリブ黒色土が○・三呎の厚さで乗っており、内堀内に流れ込んでいる。この状況からは中堤上には盛土の行われていた可能性もある。内堀底面の標高は一七・〇六呎であった。立ち上がり部は約四〇度の傾斜で掘り込まれていた。

後部部に設けた第3トレンチでは、後部部の埴輪から中堤側立ち上がり部までの、内堀を横断する調査が可能であった。埴輪部部に接して前述の水路が走っていたが、埴輪部の下場はかろうじて破壊をまぬがれていた。内堀の底面は平坦だが、埴丘寄りでの標高一七・〇四呎、中堤寄りでの標高一

七・三二竪で、わずかな傾斜がつけられていた。内堀の幅は下場での計測で八・四竪である。

#### 平成二年度 A・B・C 区

平成二年度の A 区では前方部西側隅角付近の内堀の一部を調査した。堀底の標高は一七・一〇一七・二竪で、中堤上面（ローム層上面）との比高差は約〇・六竪であった。中堤側の立ち上がり部は約四七度の傾斜でローム基盤層を掘り込んでいた（第三五図 A 区南壁土層の左端）。下場付近には円筒埴輪の半完形品が、中堤から転落した状態で検出された。

B 区と C 区は前方部南側の一つながりの調査区であり、プラン確認調査によって内堀の中堤側立ち上がり上場ラインを検出後、B 区（東西七・二竪、南北六・三竪）の掘り下げを実施した。その結果、内堀の隅角部が良好な状態で遺存していた。しかし、南側の立ち上がり部は若干崩落している可能性が考えられた。内堀底は中堤寄りが深く、標高は一七・一六竪であった。B・C 区の調査結果を総合すると、内堀の中堤側立ち上がりラインは、主軸を基準とした場合左右対称形でなく、西側の内堀の方が幅が広いことが明らかとなった。しかし、主軸線上に折れがあったとみられ、前方部の剣菱形の設計に対応するものと考えられる。

### 外堀

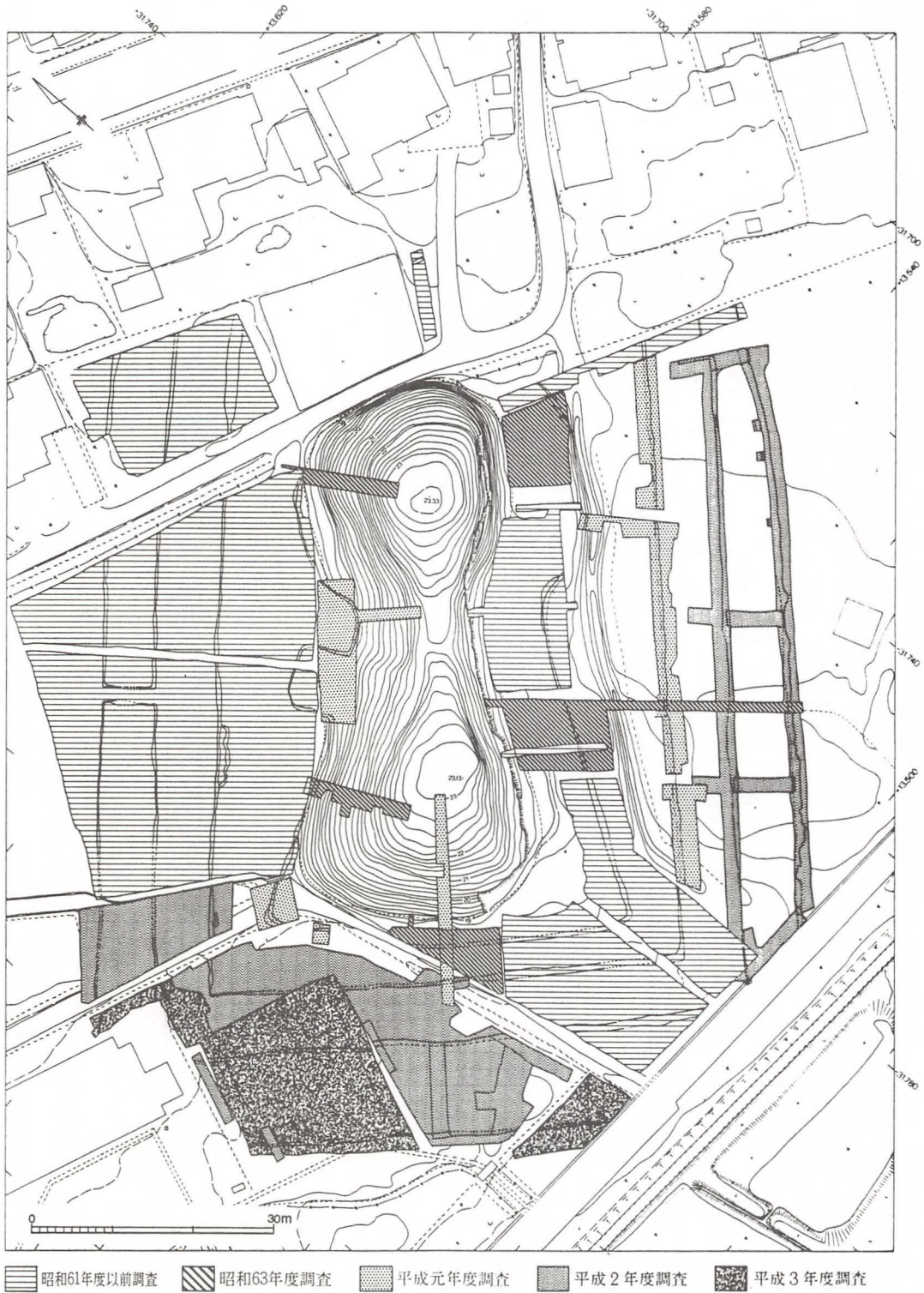
平成二年度に前方部西側（A 区）と南側（C 区）、墳丘東側（第一〜五トレンチ）の外堀の調査を行った。平成三年度には、旧山崎家の史跡外への曳家を実施した後に、その跡地を中心とした地区（A 区）と垣根の外側となる B 区で外堀の調査を行った。

#### 平成二年度 A 区

昭和五七年度に大量の形象埴輪群を出土した外堀に隣接する調査区のため、期待を抱いて調査に臨んだ。しかし、調査区の北側は外堀底面に達する大規模な攪乱を受けていた。調査区の南端は道路敷の下に当たするため、保存状態はまじで、中堤及び外堀を検出することができた。外堀は上幅約九竪（斜距離のため正距離に直すと約七・五竪）、中堤上面からの深さ〇・六竪を測り、内堀の深さとほぼ等しかった。中堤側の立ち上がり部は傾斜角一一度、法長約二・六竪の緩やかな斜面をなしていた。その下場付近には中堤から転落した状態で、人物、水鳥、犬、馬など多数の形象埴輪片が検出された（第26図）。外堀の中ほどよりやや西側には中世の薬研堀が掘り込まれていたが、この溝は昭和五七年度に総延長四二竪分が調査された S D 001 と同一のものである。

#### 平成二年度 C 区及び平成三年度 A・B 区

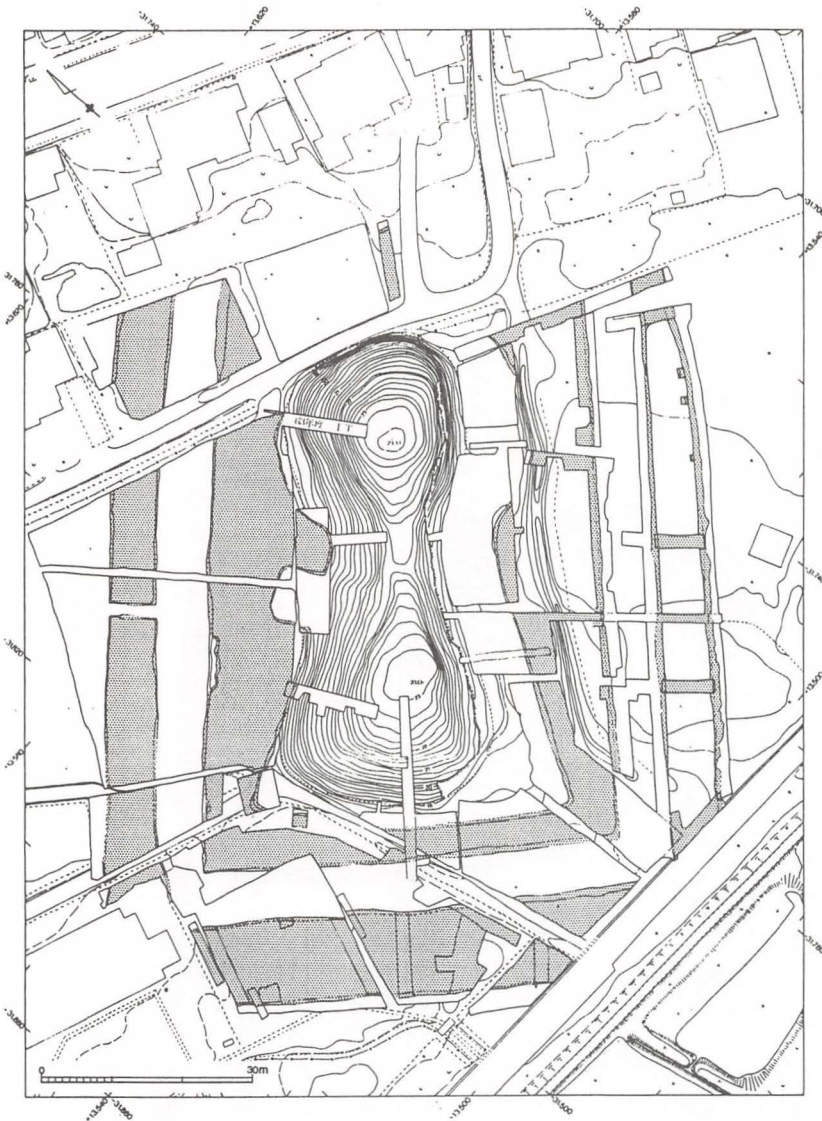
前方部前面の外堀の調査結果を一括して述べることにする。基本的には重機を用いて表土を剥いでプラン確認調査を行い、外堀の中堤側及び外堀側の立ち上がり上場ラインを検出した後に、随所にトレンチを設定し、掘り下げを行った。代表的なトレンチである平成三年度第2トレンチをみると、外堀の底面は水平でなく、中堤寄りで標高一七・四六竪、外堀よりでは標高一七・二二竪で緩やかな斜面をなしていた。外堀の幅は、直交して設定された平成二年度の第8トレンチを参考にすると上幅で一・九竪を測る。この数値は、墳丘西側及び東側の外堀の幅が平均七竪であることと比較すると極端に大きい。瓦塚古墳の外堀は前方部前面において、特に幅広く掘削されたという事実注目しておきたい。



第19図 瓦塚古墳各年度毎発掘調査位置(1/800)

ところで、平成二年度のC区東側では外堀の一部が掘り残されて低いブリッジ状を呈する個所が検出された。第9・10トレンチの調査によれば、中堤側に取り付いていることが明らかで、最も高い部分の標高は十七・六〜十七・八、周辺の外堀低部からの比高差が〇・四前後である。これは、西側外堀に設けられていたブリッジと比較すると、形態的に整っておらず、性格を異にするのではないかと思われる。古墳築造時に外堀の掘削土を墳丘に搬入するための掘り残し道が、完成時に撤去されずに残ったとも考えられる。

前方部前面の外堀の平面プランを検討する際に、平成三年度第2トレンチや平成二年度第8トレンチの外堤寄り立



第20図 瓦塚古墳の周堀と墳丘の検出状況  
(1/1000 スクリーントーンは周堀部分を示す)

ち上がり部に沿って後世の溝が走っていたことが問題となる。この溝の方向性が外堀の立ち上がり部と全く一致することを重視すれば、中世以前の周堀が完全に埋没しきらない段階での開削の可能性が強いだろう。このように考えた場合、外堀は一直線ではなく、主軸上に折れがあるとみた方が妥当であろう。内堀と同様に、外堀も剣菱形前方部に対応して折れが設けられていた可能性を考えておきたい。なお、遺物の出土状態からみて、中堤側と外堤側の両方に円筒埴輪列の存在を推定しうる。ただし、第4トレンチ出土の馬鈴は

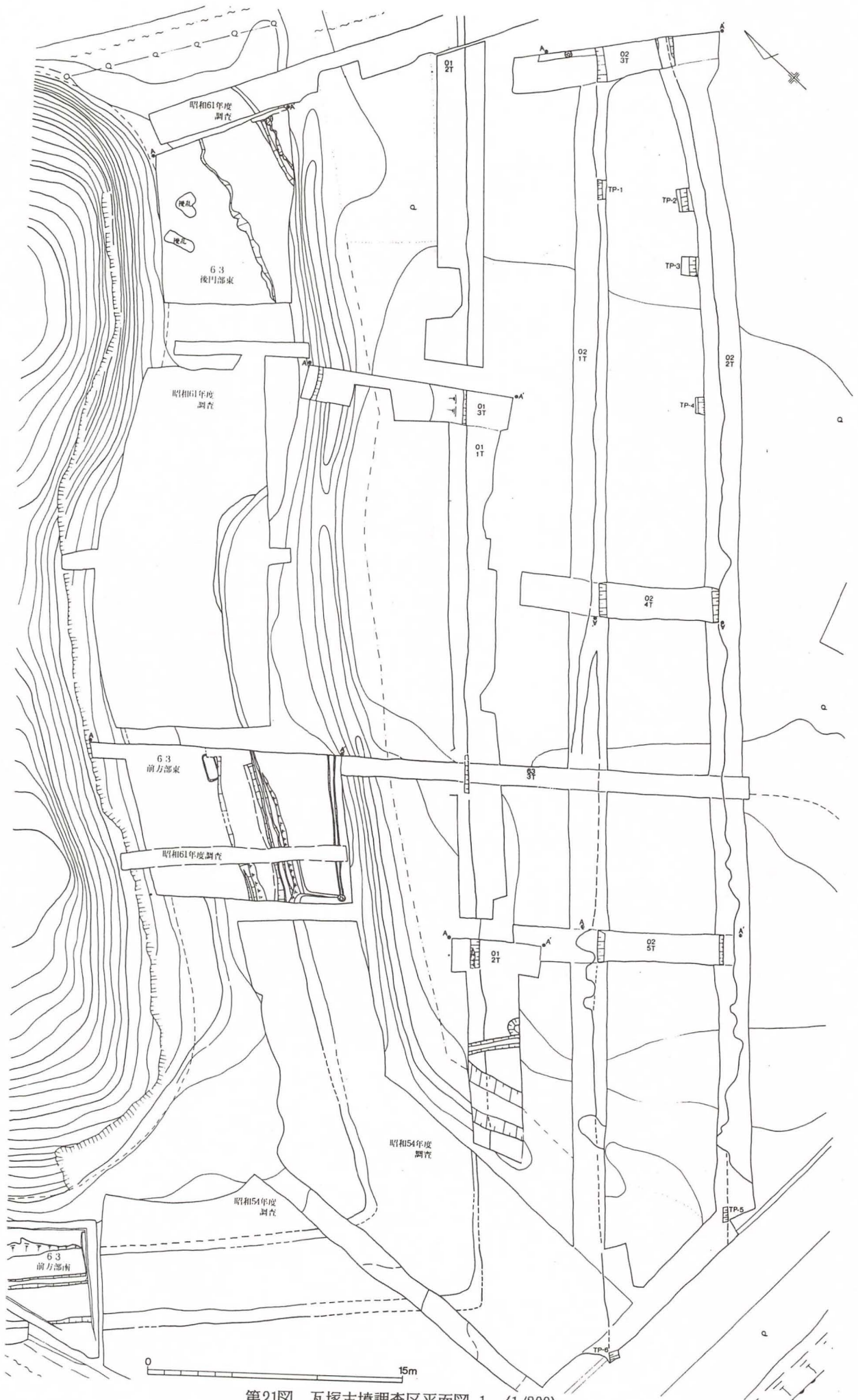
混入品としてとらえるのが妥当と考えられる。

#### 平成二年度第1～5トレンチ

墳丘東側の外堀については、中堤側と外堤側の立ち上がりラインの検出に努めた。まず外堀に直交する三本のトレンチ（第3～5トレンチ）を設定し、プラン確認を行って、外堀の方向性を把握した上で、中堤側立ち上がりラインのプラン確認を目的とする第1トレンチと外堤側のプラン確認を目的とする第2トレンチを設定して調査を進めた。

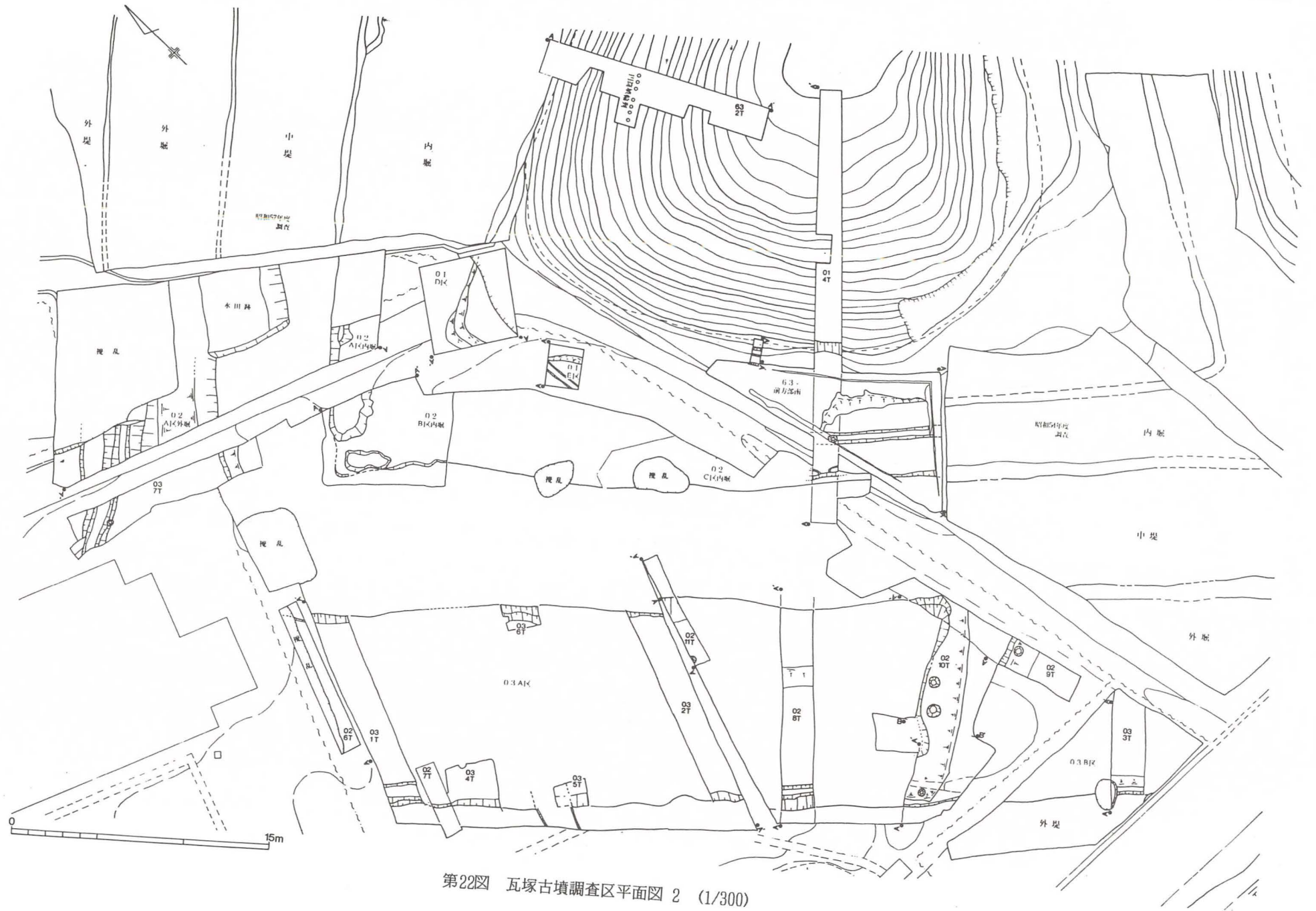
その結果、外堀は後円部付近で屈曲することが判明した。その屈曲ラインを確認するために、四個所のテストピットを設定して、立ち上がり部の掘り下げを行った。これらの結果を総合すると、外堀の中堤側の立ち上がりラインは一直線に延びて来たものが、第3トレンチ付近で、わずかに折れるのに対して、外堀の外堤側立ち上がりラインは、後円部の東側、第4テストピット付近で既に折れが始まり、北に向かって外堀幅を減じることが判明した。

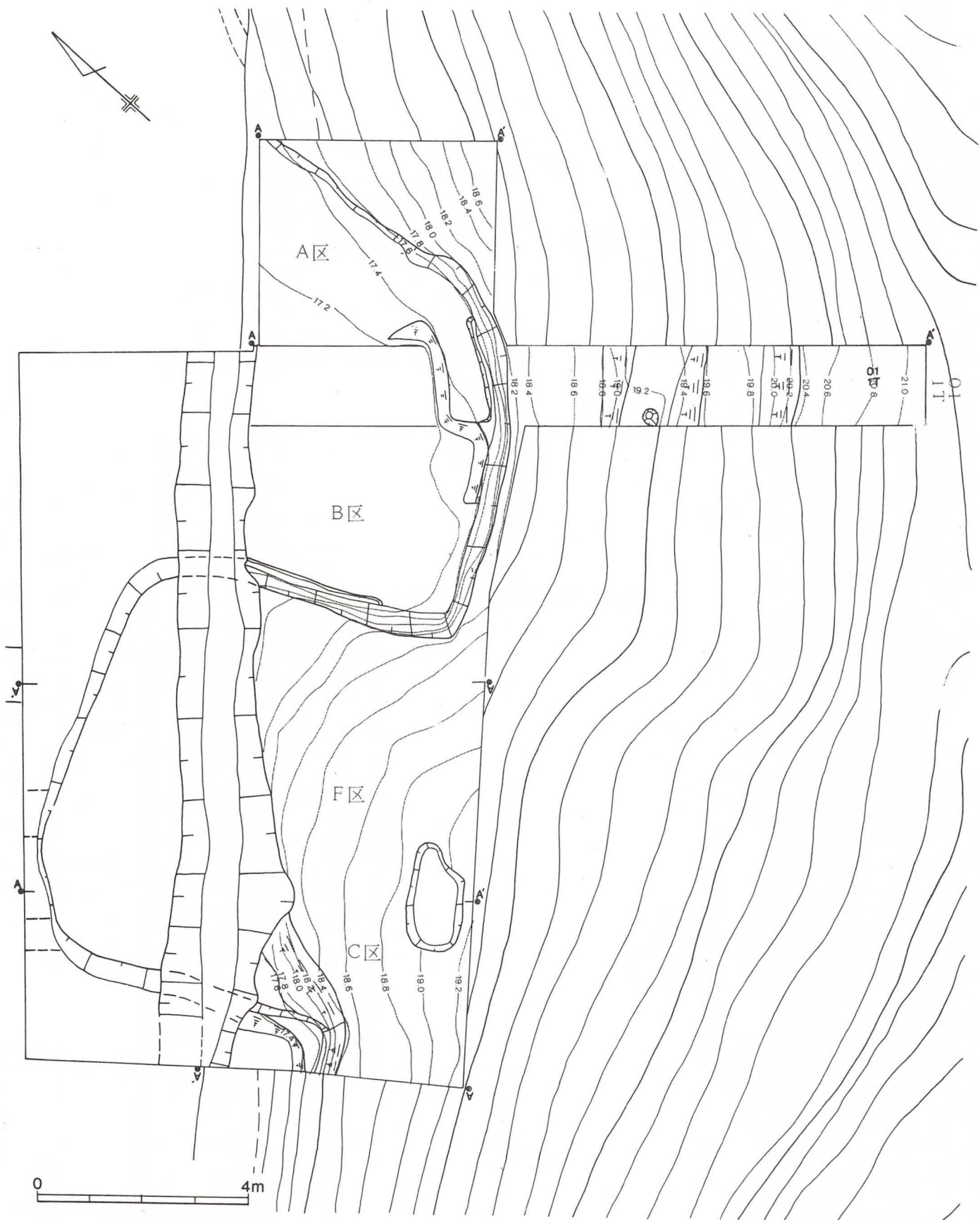
外堀の上幅は第5トレンチで七・五メートル、第四トレンチで七・二メートル、第3トレンチで四・二メートルであった。



第21図 瓦塚古墳調査区平面図 1 (1/300)







第23図 瓦塚古墳造出し部平面図(1/100)



第24図 前方部円筒埴輪出土状況図(1/30)

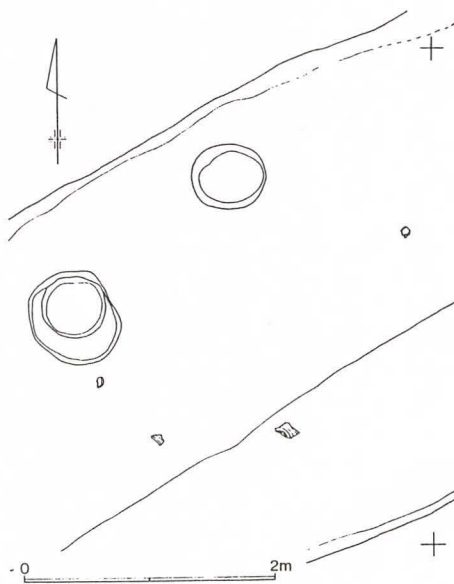
中 堤

中堤については平成二年度のA・B・C区、平成三年度のA区、昭和六十三年度の第3トレンチで調査を行った。

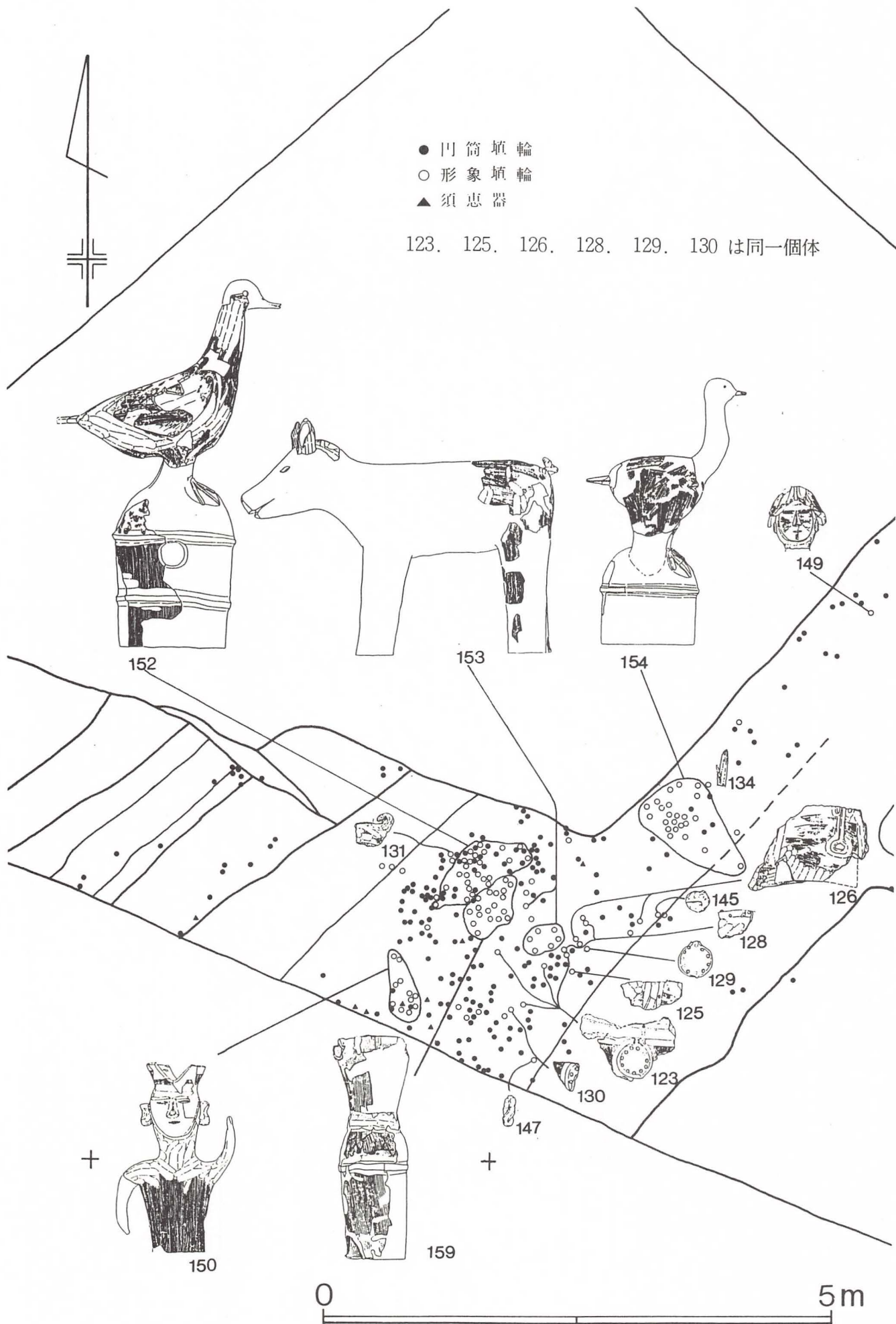
周堀と異なり、遺構面が高いため、上面の保存状態が必ずしも良好でなく、確認面はすべてローム面であった。しかし、覆土の状況から盛土を伴う可能性も考えられた。

中堤の上幅は、埴丘西側と東側で六・九〜七・五拵、前方部でも七・五拵前後で、ほぼ一定の規格があったように見受けられる。

(若松 良一)



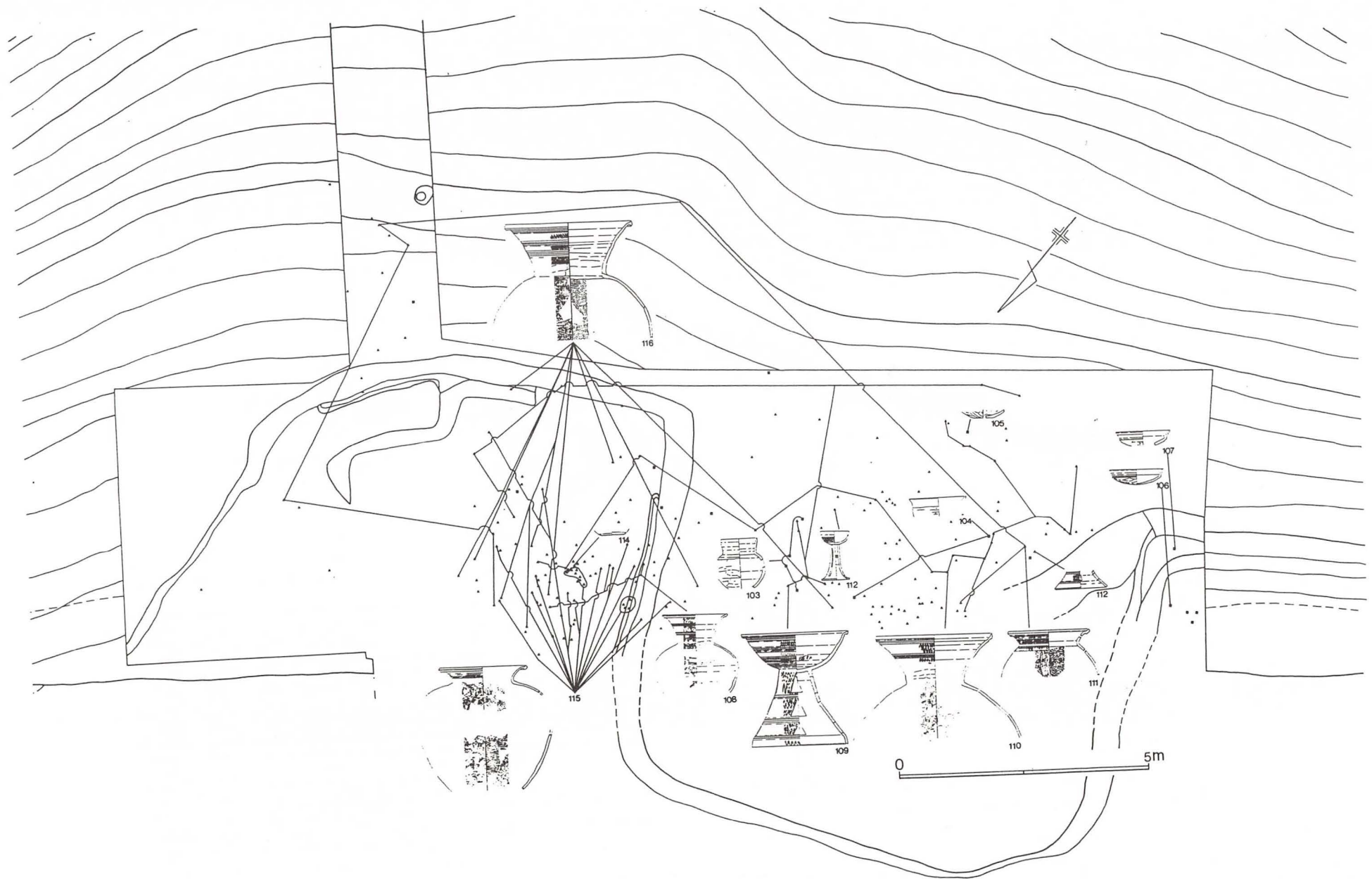
第25図 平成2年度C区須恵器出土状況図(1/60)



第26図 平成2年度A区形象埴輪出土状況図 (1/50)



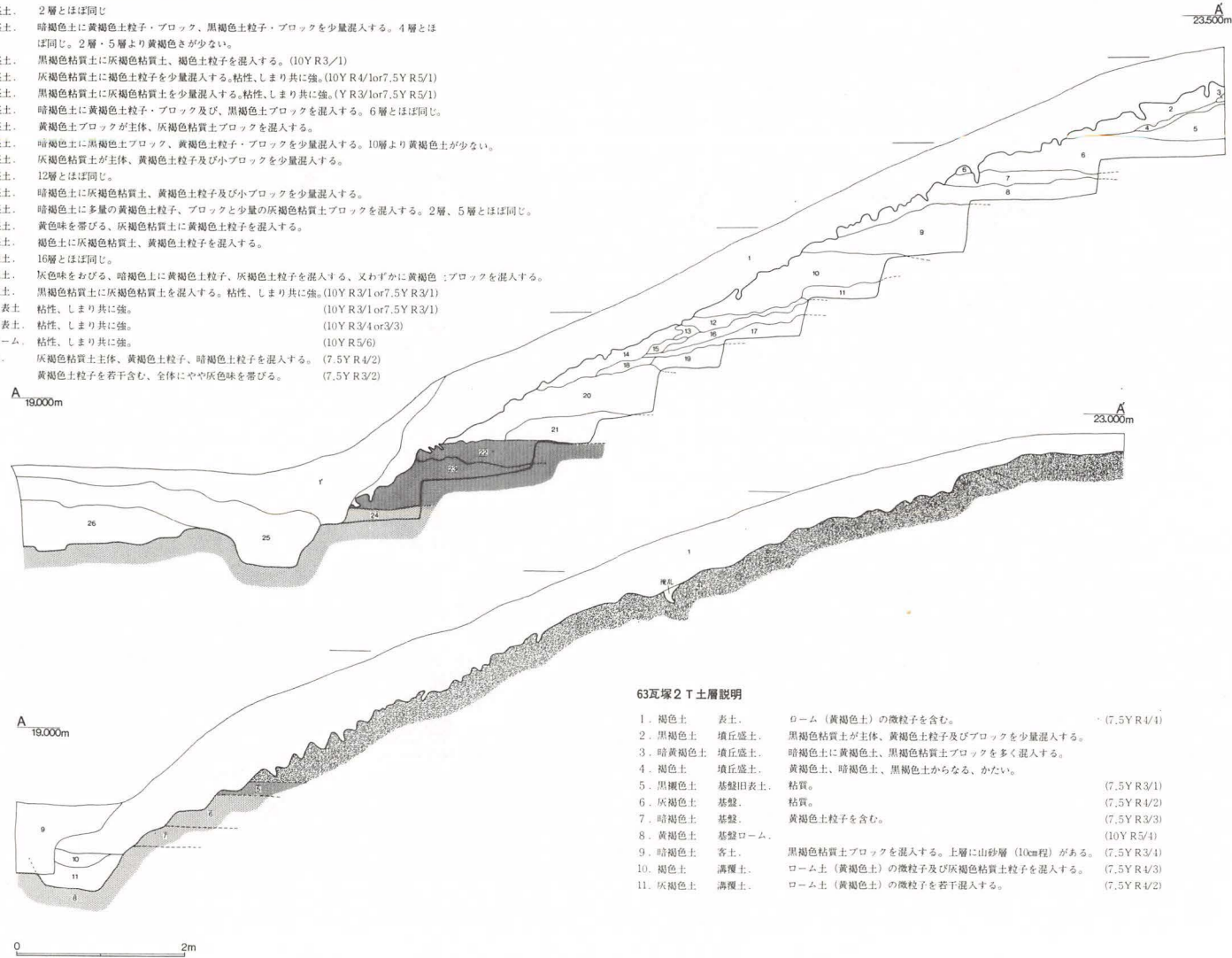
第27図 平成元年度造出し部埴輪出土状況図 (1/80)



第28図 瓦塚古墳土器出土状況図

63瓦塚1 T土層説明

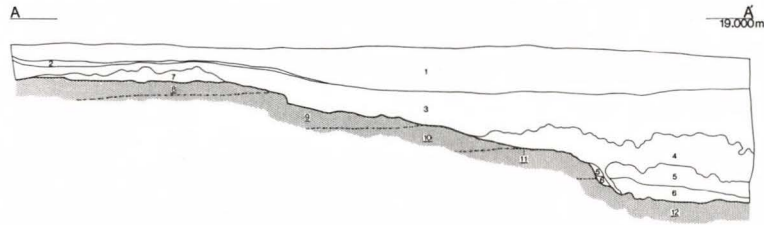
- |           |        |  |
|-----------|--------|--|
| 1. 褐色土    | 表土。    | ローム土（黄褐色土）粒子、灰褐色粘質土を混入する。                                    |
| 2. 暗褐色土   | 墳丘盛土。  | 暗褐色土に多量の黄褐色土粒子・ブロックと少量の黒褐色土ブロックを混入する。                        |
| 3. 褐色土    | 攪乱。    |  |
| 4. 暗褐色土   | 墳丘盛土。  | 暗褐色土に黄褐色土粒子・ブロック、黒褐色土粒子・ブロックを少量混入する。                         |
| 5. 暗黄褐色土  | 墳丘盛土。  | 2層とほぼ同じ。   |
| 6. 暗褐色土   | 墳丘盛土。  | 暗褐色土に黄褐色土粒子・ブロック、黒褐色土粒子・ブロックを少量混入する。4層とほぼ同じ。2層・5層より黄褐色色が少ない。 |
| 7. 黒褐色土   | 墳丘盛土。  | 黒褐色粘質土に灰褐色粘質土、褐色土粒子を混入する。(10Y R3/1)                          |
| 8. 褐灰色土   | 墳丘盛土。  | 灰褐色粘質土に褐色土粒子を少量混入する。粘性、しまり共に強。(10Y R4/1or7.5Y R5/1)          |
| 9. 黒褐色土   | 墳丘盛土。  | 黒褐色粘質土に灰褐色粘質土を少量混入する。粘性、しまり共に強。(Y R3/1or7.5Y R5/1)           |
| 10. 暗褐色土  | 墳丘盛土。  | 暗褐色土に黄褐色土粒子・ブロック及び、黒褐色土ブロックを混入する。6層とほぼ同じ。                    |
| 11. 暗黄褐色土 | 墳丘盛土。  | 黄褐色土ブロックが主体、灰褐色粘質土ブロックを混入する。                                 |
| 12. 暗褐色土  | 墳丘盛土。  | 暗褐色土に黒褐色土ブロック、黄褐色土粒子・ブロックを少量混入する。10層より黄褐色土が少ない。              |
| 13. 灰褐色土  | 墳丘盛土。  | 灰褐色粘質土が主体、黄褐色土粒子及び小ブロックを少量混入する。                              |
| 14. 暗褐色土  | 墳丘盛土。  | 12層とほぼ同じ。  |
| 15. 暗褐色土  | 墳丘盛土。  | 暗褐色土に灰褐色粘質土、黄褐色土粒子及び小ブロックを少量混入する。                            |
| 16. 暗黄褐色土 | 墳丘盛土。  | 暗褐色土に多量の黄褐色土粒子、ブロックと少量の灰褐色粘質土ブロックを混入する。2層、5層とほぼ同じ。           |
| 17. 灰褐色土  | 墳丘盛土。  | 黄色味を帯びる。灰褐色粘質土に黄褐色土粒子を混入する。                                  |
| 18. 暗褐色土  | 墳丘盛土。  | 褐色土に灰褐色粘質土、黄褐色土粒子を混入する。                                      |
| 19. 暗黄褐色土 | 墳丘盛土。  | 16層とほぼ同じ。  |
| 20. 暗褐色土  | 墳丘盛土。  | 灰色味をおびる。暗褐色土に黄褐色土粒子、灰褐色土粒子を混入する、又わずかに黄褐色土ブロックを混入する。          |
| 21. 黒褐色土  | 墳丘盛土。  | 黒褐色粘質土に灰褐色粘質土を混入する。粘性、しまり共に強。(10Y R3/1 or 7.5Y R3/1)         |
| 22. 黒褐色土  | 基盤田表土。 | 粘性、しまり共に強。(10Y R3/1 or 7.5Y R3/1)                            |
| 23. 暗褐色土  | 基盤田表土。 | 粘性、しまり共に強。(10Y R3/4 or 3/3)                                  |
| 24. 黄褐色土  | 基盤ローム。 | 粘性、しまり共に強。(10Y R5/6)   |
| 25. 灰褐色土  | 溝覆土。   | 灰褐色粘質土主体、黄褐色土粒子、暗褐色土粒子を混入する。(7.5Y R4/2)                      |
| 26. 黒褐色土  | 覆土。    | 黄褐色土粒子を若干含む、全体にやや灰色味を帯びる。(7.5Y R3/2)                         |



63瓦塚2 T土層説明

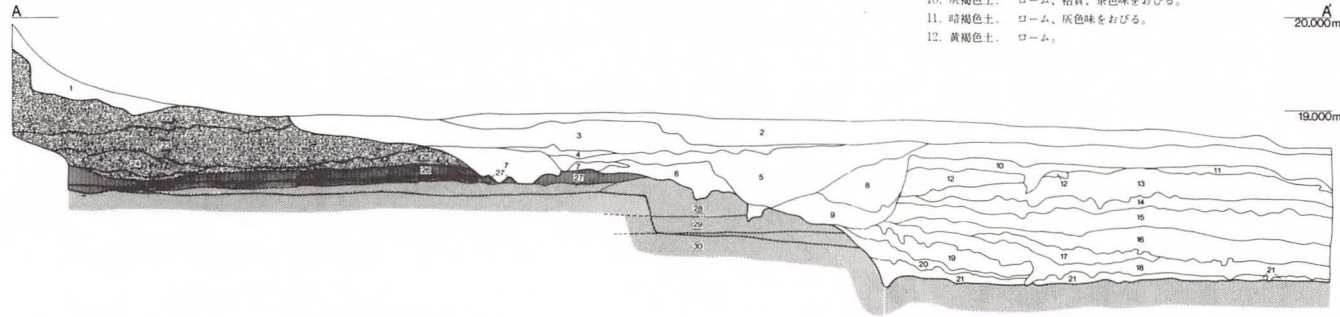
- |          |        |  |
|----------|--------|--|
| 1. 褐色土   | 表土。    | ローム（黄褐色土）の微粒子を含む。(7.5Y R4/1)                 |
| 2. 黒褐色土  | 墳丘盛土。  | 黒褐色粘質土が主体、黄褐色土粒子及びブロックを少量混入する。               |
| 3. 暗黄褐色土 | 墳丘盛土。  | 暗褐色土に黄褐色土、黒褐色粘質土ブロックを多く混入する。                 |
| 4. 褐色土   | 墳丘盛土。  | 黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土からなる、かたい。                      |
| 5. 黒褐色土  | 基盤田表土。 | 粘質。(7.5Y R3/1)                               |
| 6. 灰褐色土  | 基盤。    | 粘質。(7.5Y R4/2)                               |
| 7. 暗褐色土  | 基盤。    | 黄褐色土粒子を含む。(7.5Y R3/3)                        |
| 8. 黄褐色土  | 基盤ローム。 | (10Y R5/4)                                   |
| 9. 暗褐色土  | 寄土。    | 黒褐色粘質土ブロックを混入する。上層に山砂層（10cm程）がある。(7.5Y R3/4) |
| 10. 褐色土  | 溝覆土。   | ローム土（黄褐色土）の微粒子及び灰褐色粘質土粒子を混入する。(7.5Y R4/3)    |
| 11. 灰褐色土 | 溝覆土。   | ローム土（黄褐色土）の微粒子を若干混入する。(7.5Y R4/2)            |

第29図 瓦塚古墳土層断面図1 (1/80)



63後部東 北壁土層説明

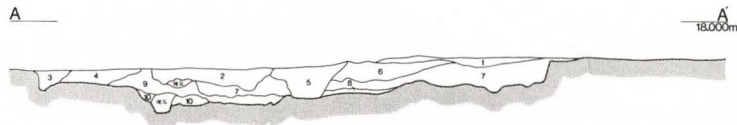
1. 褐色土. 客土、S 61年度調査時の埋め戻し土。
2. 砂層. 客土、S 61年度調査時の遺構保護用の砂。1の下層に全面にわたらずくつがる。
3. 褐色土. 表土、黄褐色土粒子及び小ブロックを混入する。一部に天明のハミスと思われる白色粒を含む。
4. 褐色土. やや暗、黄褐色土粒子を少量混入する。
5. 灰褐色土. 黄色味をおびる、黄褐色土粒子を混入する。
6. 暗黄褐色土. 黄褐色土、暗黄褐色土ブロックを混入する。かたい。
7. 暗褐色土. 灰色味をおびる、灰褐色土に黒褐色土を混入する。
8. 黒褐色土. 田表土、粘質。かたい。
9. 灰褐色土. 基盤（ローム）。
10. 灰褐色土. ローム、粘質、茶色味をおびる。
11. 暗褐色土. ローム、灰色味をおびる。
12. 黄褐色土. ローム。



63前方部東・北壁土層説明

1. 褐色土. 黄褐色土粒子を混入する。
2. 褐色土. 客土。
3. 灰褐色土. 褐色土に灰褐色粘質土を混入する。天明ハミスと思われる白色粒を含む。
4. 暗褐色土. 黄褐色土粒子、灰褐色土粒子を少量混入する。
5. 褐色土. 褐色土を主体とする。黄褐色土粒子、灰褐色土粒子を少量混入する。
6. 暗褐色土. 黄褐色土、灰褐色土の小ブロックをごく少量混入する。
7. 褐色土. 黄色味をおびる。褐色土を主体とする。黄褐色土粒子とブロックを混入する。
8. 褐色土. 褐色土を主体とする。黄褐色土粒子と小ブロック、灰褐色粘質土と小ブロックを少量混入する。
9. 暗褐色土. 黄褐色土、灰褐色土の小ブロックを少量混入する。6層とほぼ同じ。
10. 褐色土. 黄色味をおびる。褐色土に黄褐色土粒子と小ブロックを多量に混入する。
11. 暗褐色土. 黒味をおびる。黄褐色土粒子と小ブロックをごく少量混入する。
12. 暗褐色土. 黄褐色土、灰褐色粘質土の小ブロックをごく少量混入する。
13. 暗褐色土. 灰色味をおびる。黒色のブロックを少量混入する。
14. 褐色土. 灰色味をおびる。黄褐色土粒子をごく少量混入する。
15. 暗褐色土. 灰色味をおびる。黄褐色土粒子をごく少量混入する。

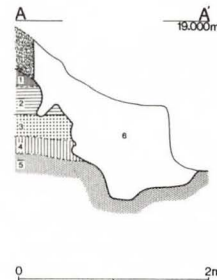
16. 暗褐色土. やや灰色味をおびる。黄褐色土粒子、灰褐色土の小ブロックを少量混入する。
17. 暗褐色土. 黒味をおびる。黄褐色土粒子を少量混入する。
18. 黒褐色土. 黄褐色土粒子を少量混入する。層の上部の一部に褐色土粒子のブロックがある(疑問?)。
19. 暗黄褐色土. 黄褐色土粒子、暗褐色土小ブロックを混入する。
20. 褐色土. 黄色味をおびる。黄褐色土、暗褐色土粒子を混入する。
21. 暗黄褐色土. 黄褐色土粒子、暗褐色土粒子を混入する。
22. 黄褐色土. 黄褐色土ブロックを主体とする。暗黄褐色土ブロックと暗褐色土を混入する。
23. 褐色土. 褐色土に黄褐色土、暗黄褐色土のブロックを混入する。
24. 暗黄褐色土. 暗黄褐色土ブロックを主体とする。黄褐色土、暗褐色土ブロックを混入する。
25. 褐色土. 褐色土に黄褐色土、黒褐色土の粒子を混入する。23層より混入するブロックが小さい。
26. 黒褐色土. 粘質。
27. 黒褐色土. 粘質、茶色味をおびる。両層中にF Aと思われる明灰色土粒子のブロックが混入する。田表土。
28. 灰褐色土. ローム、粘質、茶色味をおびる。
29. 暗褐色土. ローム、灰色味をおびる。
30. 黄褐色土. ローム。



63前方部南 東壁土層説明

1. 灰褐色土. 耕作土。天明のハミスと思われる白色粒を含む。
2. 暗褐色土. 黄褐色土粒子を少量混入する。天明のハミスと思われる白色粒を少量含む。
3. 暗褐色土. 溝覆土。黄褐色土粒子を少量混入する。
4. 暗褐色土. 第3層に比べ明るい。黄褐色土粒子を混入する。
5. 褐色土. 溝覆土。灰色味をおびる。灰褐色土を混入する。
6. 黒褐色土. 灰褐色土ブロックを混入する。天明のハミスと思われる白色粒を含む。
7. 褐色土. 灰色味をおびる。灰褐色土、黄褐色土粒子とブロックを混入する。
8. 暗黄褐色土. 黒褐色土ブロック、黄褐色土粒子を混入する。
9. 暗黄褐色土. 黄褐色土粒子を混入する。
10. 暗黄褐色土. 暗黄褐色土ブロックを主体とする。黄褐色土ブロック、暗褐色土を混入する。

溝覆覆土

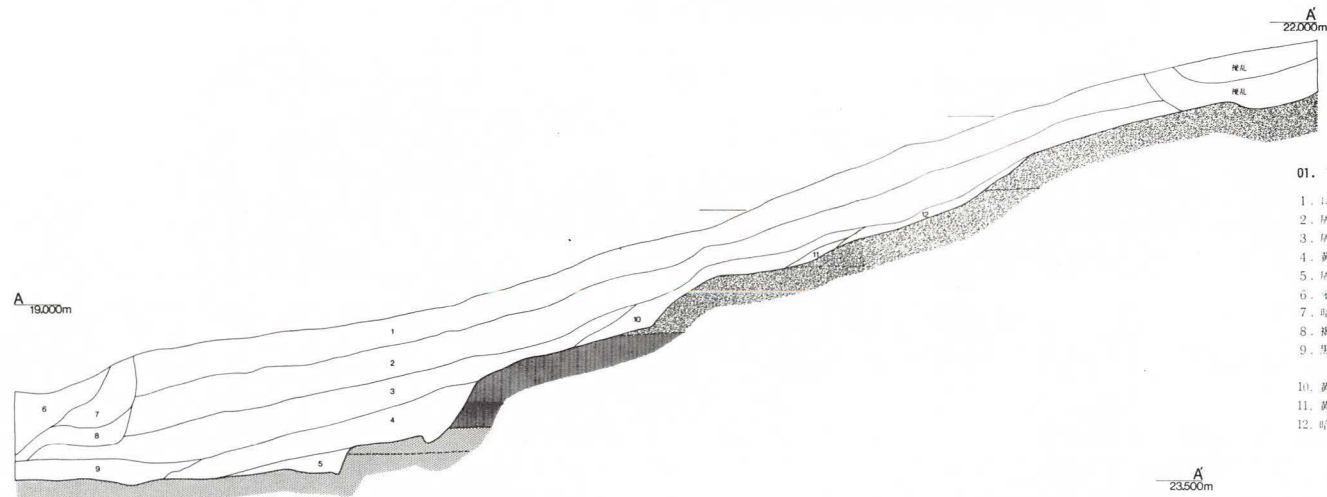


63前方部南 墳丘立ち上がり部分土層説明

1. 黒褐色土. 田表土。しまり強、粘性強。
2. 暗褐色土. しまり中。粘性強。
3. 灰褐色土. しまり中、粘性強。
4. 暗黄褐色土. しまり中、粘性強。
5. 黄褐色土. ローム。しまり強、粘性やや強。
6. 灰褐色土. しまり弱、粘性やや強(墳丘表土及び、2本の根切溝の覆土であるが、土層の相異は認め難い)。

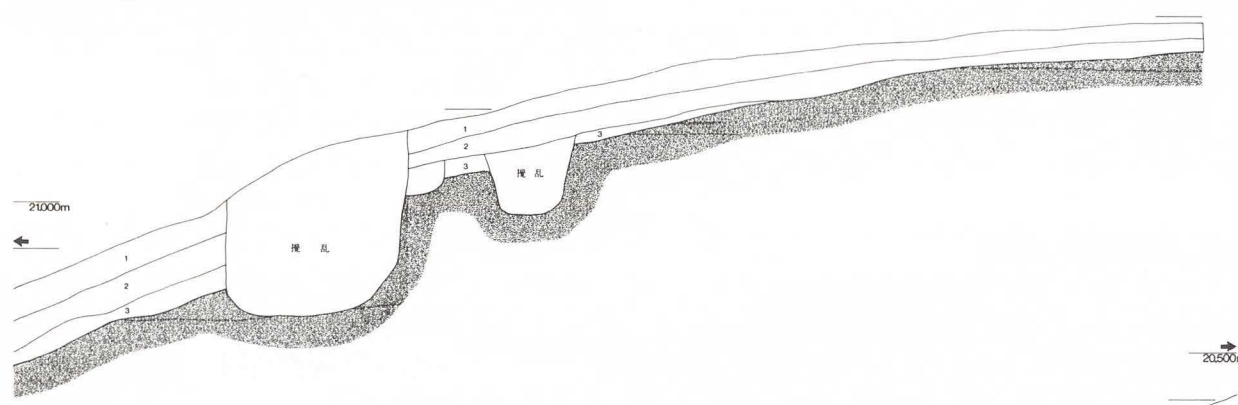
第30図 瓦塚古墳土層断面図2 (1/80)





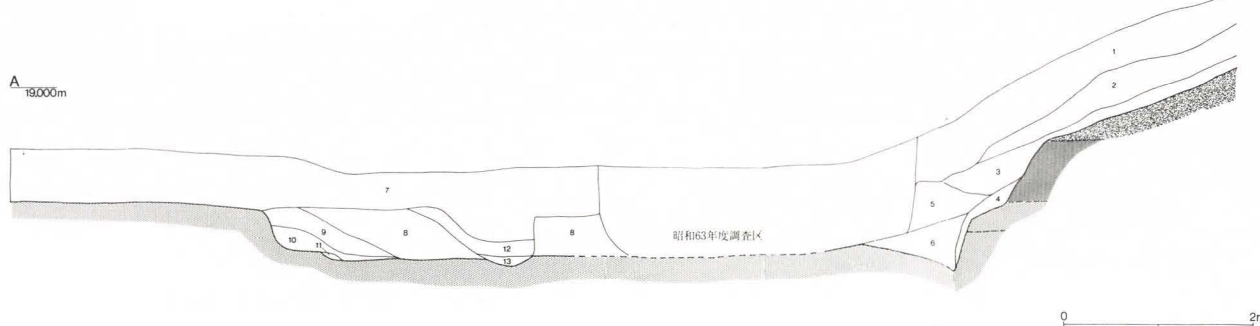
01. 1 T北壁土層説明

- 1. に近い黄色土。 表土、しまり弱。(2.5Y6/4)
- 2. 灰黄褐色土。 ロームブロックを少量混入する。(10YR4/2)
- 3. 灰黄褐色土。 ローム粒子を多量に混入する。粘性、しまり共に弱。(10YR5/2)
- 4. 黄褐色土。 盛土の崩れ土。ロームブロックを少量混入する。粘性、しまり共に強。(10YR5/8)
- 5. 灰黄褐色土。 ロームブロックを多量に混入する。粘性、しまり共に極めて強。(10YR4/2)
- 6. オリーブ褐色土。 近代の掘切溝。粘性中、しまり弱。(2.5Y4/3)
- 7. 暗褐色土。 近世の溝。粘性中、しまり弱。(陶磁器類を含む)(10YR3/4)
- 8. 褐色土。 近世の溝。粘性、しまり共に極めて強。(陶磁器類を含む)(10YR4/4)
- 9. 黒褐色土。 径約1mmのロームブロックを少量、赤色微粒子を微量混入する。粘性、しまり共に強。(7.5YR3/2)
- 10. 黄灰色土。 ローム大ブロックを混入する。しまり中。(2.5Y4/1)
- 11. 黄灰色土。 粘性あり、しまりやや弱。(2.5Y5/1)
- 12. 暗黄褐色土。 ローム小ブロックを少量混入する。しまり中。(2.5Y5/2)

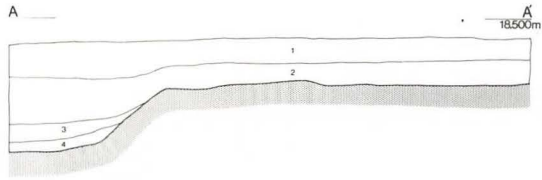


01. 4 T西壁土層説明

- 1. に近い黄色土。 表土、しまり弱。(2.5Y6/4)
- 2. に近い黄褐色土。 しまり中。(10YR5/3)
- 3. 灰黄褐色土。 ローム小ブロック、黒色粘土小ブロックを少量混入する。しまり中。(10YR4/2)
- 4. 灰黄褐色土。 ローム粒子を多量に混入する。粘性、しまり共に強。(10YR5/2)
- 5. 灰黄色粘土。 粘性、しまり共に強。(2.5YR6/2)
- 6. 灰オリーブ色粘土。 粘性、しまり共に極めて強。(5Y5/2) 高層土。
- 7. 灰黄褐色土。 白色バミスを極めて多量に混入する。ロームブロック・粒子を少量混入する。粘性弱、しまり極めて強。(10YR4/2)
- 8. オリーブ黒色土。 白色バミスを多量に、ローム粒子を微量に混入する。粘性中、しまり強。(5Y2/2)
- 9. 灰黄褐色土。 ローム粒子を少量混入する。粘性中、しまり強。(10YR4/2)
- 10. 灰黄褐色土。 ローム粒子、ハードロームブロックを少量混入する。粘性、しまり共に強。(10YR4/2)
- 11. に近い黄褐色土。 ハードロームブロックを混入する。粘性極めて強、しまり強。(10YR5/4)
- 12. 褐色土。 ローム粒子を多量に混入する。粘性中、しまり強。(10YR4/4)
- 13. に近い黄褐色土。 ローム粒子を少量混入する。粘性、しまり共に中。(10YR4/3)

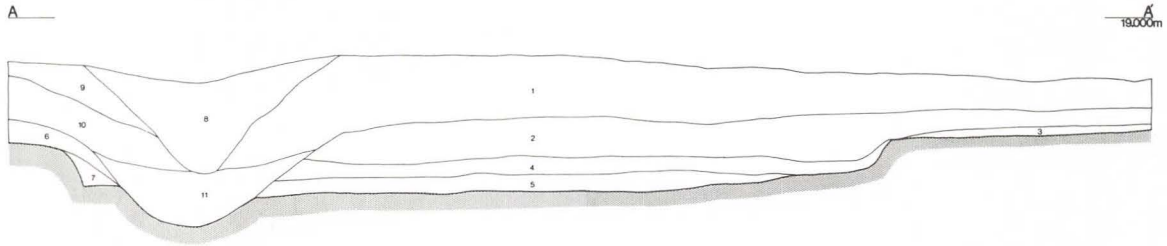


第31図 瓦塚古墳土層断面図3 (1/80)



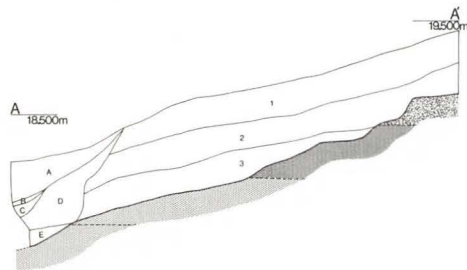
01. 2 T北壁土層説明

- 1. にぶい黄褐色土: 白色バミスを多量に、ローム粒子を微量に混入する。粘性弱、しまり極めて強。(10Y R5/3)
- 2. オリーブ黒色土: ローム粒子を少量混入する。粘性弱、しまり極めて強。(7.5Y3/1)
- 3. 暗褐色土: ローム粒子、ハードロームブロックを少量混入する。粘性強、しまり中。(10Y R3/3)
- 4. 黒褐色土: ローム粒子、ハードロームブロックを多量に混入する。粘性極めて強、しまり中。(10Y R3/1)



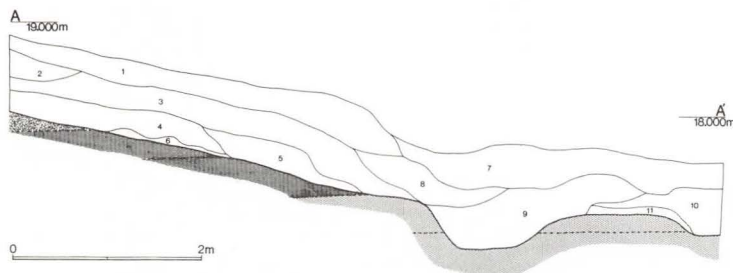
01. 3 T北壁土層説明

- 1. にぶい黄褐色土: 白色バミスを多量に、ローム粒子を微量に混入する。粘性弱、しまり極めて強。(10Y R5/3)
- 2. オリーブ黒色土: ローム粒子を少量混入する。粘性弱、しまり極めて強。(7.5Y3/1)
- 3. オリーブ黒色土: ローム粒子を2層より多く混入する。粘性弱、しまり強。(7.5Y3/1)
- 4. オリーブ褐色土: ローム粒子、白色粘土を少量混入する。粘性中、しまり強。(2.5Y4/3)
- 5. 暗オリーブ褐色土: 黒色粘土ブロックを多量に、ローム粒子、白色粘土を微量に混入する。粘性極めて強、しまり強。(2.5Y3/3)
- 6. 暗褐色土: ローム粒子を少量混入する。粘性弱、しまり中。(10Y R3/4)
- 7. 黄褐色土: ローム粒子を少量混入する。粘性、しまり共に強。(10Y R5/6)
- 8. 灰褐色土: 溝覆土。ビニール、陶磁器、ガラス片等を含む。(2.5Y6/2)
- 9. 黄灰色土: ローム粒子を多量に混入する。粘性弱、しまり強。(2.5Y4/1)
- 10. 暗黄灰色土: ローム粒子を少量混入する。粘性弱、しまり中。(2.5Y4/2)
- 11. 灰黄色土: 溝覆土。ローム粒子を微量に混入する。粘性強、しまり弱。(2.5Y6/2)



01. A区北壁土層説明

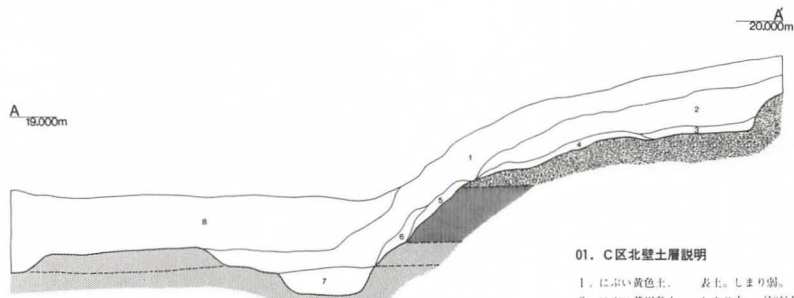
- 1. にぶい黄色土
- 2. にぶい黄褐色土: 墳丘覆土。
- 3. にぶい黄褐色土
- A. 灰黄褐色土: 埋め戻し土。粘性、しまり共に強。(10Y R5/2)
- B. オリーブ灰色粘土: 鉄斑あり。しまり強。(5GY6/1)
- C. 灰オリーブ色粘土: しまり弱。(5Y6/2)
- D. 灰オリーブ色粘土: 粘性、しまり共に極めて強。(5Y5/2)
- E. 灰オリーブ色粘土: 粘性、しまり共に極めて強。ハードロームブロックを混入する。(5Y5/2)



01. B区南壁土層説明

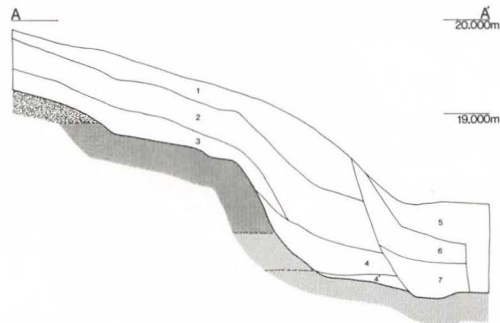
- 1. にぶい黄色土: 表土。しまり弱。(2.5Y6/4)
- 2. にぶい黄褐色土: 白色バミスを多量に混入する。しまりやや強。(10Y R5/3)
- 3. にぶい黄褐色土: しまり中。(10Y R5/3)
- 4. にぶい黄褐色土: ロームブロック黒色粘土ブロックを多量に混入する。しまりやや強。(10Y R5/4)
- 5. 灰黄褐色土: 4層より小さいブロックを少量混入する。しまり中。(10Y R4/2)
- 6. 黒褐色粘土: 旧表土層の崩れ土。粘性強、しまり中。(10Y R3/1)
- 7. 灰黄褐色土: 埋め戻し土。粘性、しまり共に強。(10Y R5/2)
- 8. 灰黄色粘土: 粘性、しまり共に強。ビニール、陶磁器、ガラス片等を含む。(2.5Y6/2)
- 9. 灰オリーブ色粘土: 粘性、しまり共に極めて強。
- 10. 灰黄褐色土: 内堀覆土。粘性中、しまり強。(10Y R5/2)
- 11. 灰黄褐色土: ツフトロームとの混在土。耕作による中堤面視乱層。粘性中、しまり強。(10Y R5/2)

第32図 瓦塚古墳土層断面図4 (1/80)



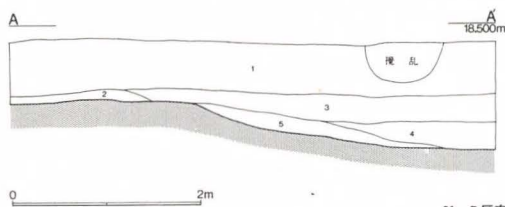
01. C区北壁土層説明

- 1. に近い黄色土。 表土。しまり弱。(2.5Y6/4)
- 2. に近い黄褐色土。 しまり中。(10Y R5/3)
- 3. 暗褐色土。 ロームブロックを少量混入する。粘性弱、しまり中。(10Y R3/4)
- 4. 黄褐色土。 盛土の崩れ土。粘性、しまり共に中。(10Y R5/6)
- 5. 黒褐色粘土。 旧表土解の崩れ土。粘性強、しまり中。(10Y R3/1)
- 6. 灰黄色粘土。 溝覆土、粘性、しまり共に強。ビニール、陶磁器、ガラス片等を含む。(2.5Y6/2)
- 7. 灰オリーブ色粘土。 溝覆土。粘性、しまり共に極めて強。(5Y5/2)
- 8. 灰黄褐色土。 埋め戻し土。粘性、しまり共に強。(10Y R5/2)



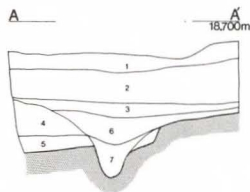
01. C区南壁土層説明

- 1. に近い黄色土。 表土。しまり弱。(2.5Y6/4)
- 2. に近い黄褐色土。 しまり中。(10Y R5/3)
- 3. 灰黄褐色土。 ローム小ブロック、黒色粘土小ブロックを少量混入する。しまり中。(10Y R4/2)
- 4. 灰黄褐色土。 ローム粒子を多量に混入する。しまり強。(10Y R5/2)
- 4. 灰黄褐色土。 4層よりやや黄色味が強く、ハードロームブロックを混入する。粘性、しまり共に強。(10Y R5/2)
- 5. 灰黄褐色土。 埋め戻し土。粘性、しまり共に強。(10Y R5/2)
- 6. 灰黄色粘土。 溝覆土。粘性、しまり共に強。ビニール、陶磁器、ガラス片等を含む。(2.5Y6/2)
- 7. 灰オリーブ色粘土。 溝覆土。粘性、しまり共に極めて強。(5Y5/2)



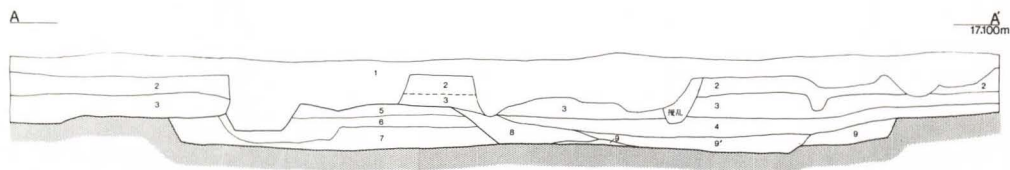
01. D区南壁土層説明

- 1. 灰黄褐色土。 白色バミスを極めて多量に、ロームブロック、ローム粒子を少量混入する。粘性弱、しまり極めて強。(10Y R4/2)
- 2. 明黄褐色土。 ローム粒子を多量に混入する。粘性強、しまり中。(10Y R6/8)
- 3. 暗褐色土。 白色バミス、赤色粒子を微量に混入する。粘性弱、しまり強。(10Y R3/3)
- 4. 黒褐色土。 ハードロームブロックを少量混入する。粘性中、しまり強。(7.5Y R3/2)
- 5. 黄褐色土。 ローム粘土を少量混入する。粘性極めて強、しまり強。(10Y R5/6)



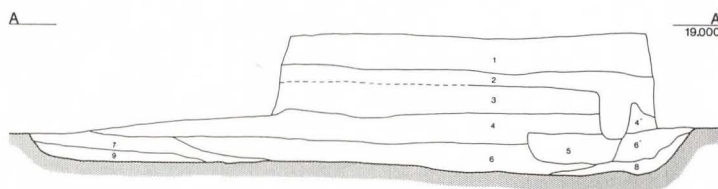
01. E区西壁土層説明

- 1. 暗黄褐色土。 白色バミスを多量に、赤色粒子を少量混入する。粘性弱、しまり極めて強。(2.5Y4/2)
- 2. 灰黄褐色土。 白色バミスを極めて多量に、ロームブロック、ローム粒子を少量混入する。粘性弱、しまり極めて強。(10Y R4/2)
- 3. 暗オリーブ褐色土。 ローム粘土を多量に混入する。粘性弱、しまり強。(2.5Y3/3)
- 4. 黒褐色土。 ローム粒子を多量に混入する。粘性中、しまり強。(10Y R2/2)
- 5. 暗褐色土。 ローム粒子を4層より多く混入する。粘性強、しまり中。(10Y R3/3)
- 6. 褐色土。 ローム粒子を多量に混入する。粘性中、しまり強。(10Y R4/4)
- 7. に近い黄褐色土。 ローム粘土を少量混入する。粘性、しまり共に中。(10Y R4/3)



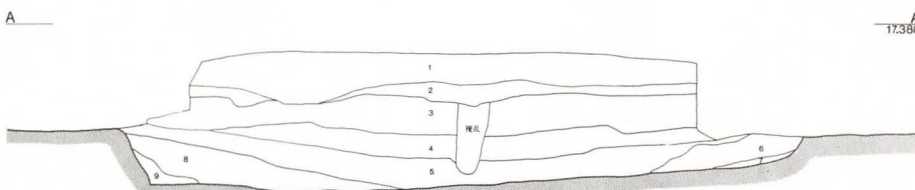
02. 3 T北壁土層説明

1. 客土。
2. 褐色土。 1mm程度の火山灰を多量に、1mm程度の赤色スコリアを若干混入する。粘性弱、しまり中。
3. 茶褐色土。 1mm程度の火山灰及び赤色スコリアを若干混入する。カーボン粒を少量混入する。粘性、しまり共に中。
4. 茶褐色土。 3層に比べ、やや暗。火山灰、カーボンを若干混入する。1~3mm程度の赤色スコリアを若干混入する。単輪細片有り。
5. 暗褐色土。 種作によって白色バミスが入り込んでいる。ロームブロックを混入する。粘性、しまり共に強。
6. 暗褐色土。 5層に比べ、暗い。砂質みで、ややザラつく。粘性、しまり共に強。
7. 暗褐色土。 6層に比べ、暗い。砂質みで、ややザラつく。粘性、しまり共に強。
8. 暗褐色土。 ロームブロックを多量に混入する。粘性、しまり共に強。
9. 茶褐色土。 粘性極めて強、しまり強。
- 9'. 茶褐色土。 粘性極めて強、しまりやや弱。ロームブロックを混入する。



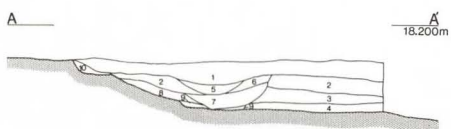
02. 4 T南壁土層説明

1. 客土。
2. 褐色土。 1mm程度の火山灰を多量に、1mm程度の赤色スコリアを若干混入する。粘性弱、しまり中。
3. 茶褐色土。 1mm程度の火山灰及び赤色スコリアを若干混入する。カーボン粒を少量混入する。粘性、しまり共に中。
4. 茶褐色土。 3層に比べ、やや暗。火山灰、カーボンを若干混入する。1~3mm程度の赤色スコリアを若干混入する。
- 4'. 暗褐色土。 4層に比べ、粘性、しまり共に弱。
5. 暗褐色土。 4層に比べ、粘性、しまり共に弱。粒子もやや粗。0.1mm程度の白色スコリアを若干混入する。1~2mm程度のカーボン粒を若干混入する。
6. 暗褐色土。 5層に比べ、やや明。0.1mm程度の赤色スコリア、白色スコリアを若干混入する。粘性、しまり共にやや強。
- 6'. 暗褐色土。 6層に比べ、やや暗。粒子もやや粗。ローム粒、カーボン粒を若干混入する。粘性、しまり共に中。
7. 暗褐色土。 1~2mm程度の赤色スコリアを若干混入する。ロームブロックを若干混入する。粘性、しまり共に強。
8. 暗褐色土。 6層に比べ、やや明、粘性、しまり共に弱。1cm程度のロームブロックを若干混入する。
9. 暗褐色土。 7層に比べ、粘性しまり共に弱。0.1mm程度のローム粒を多量に、5~6mm程度のロームブロックを若干混入する。



02. 5 T北壁土層説明

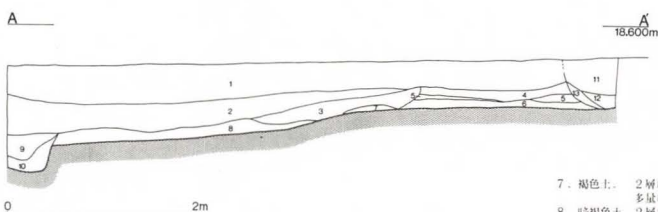
1. 客土。
2. 褐色土。 1mm程度の火山灰を多量に、1mm程度の赤色スコリアを若干混入する。粘性弱、しまり中。
3. 茶褐色土。 1mm程度の火山灰及び赤色スコリアを若干混入する。カーボン粒を少量混入する。粘性、しまり共に中。
4. 茶褐色土。 3層に比べ、やや暗。火山灰、カーボンを若干混入する。1~3mm程度の赤色スコリアを若干混入する。
5. 暗褐色土。 0.1mm程度の赤色スコリア、白色スコリアを若干混入する。粘性、しまり共にやや強。
6. 暗褐色土。 1~2mm程度の赤色スコリアを若干混入する。ロームブロックを若干混入する。粘性、しまり共に強。
7. 暗褐色土。 6層に比べ、粘性しまり共に弱。0.1mm程度のローム粒を多量に、5~6mm程度のロームブロックを若干混入する。
8. 暗褐色土。 5層に比べ、やや明、粘性、しまり共に弱。1cm程度のロームブロックを若干混入する。
9. 暗褐色土。 1cm程度のロームブロックを多量に混入する。粘性強、しまり弱。



02. C区10 T外堤寄り土層説明

1. 暗褐色土。 粒子密。0.1~1mm程度の白色バミス多量に、0.1mm程度のスコリア、カーボン若干混入する。粘性弱、しまり強。(10Y R3/3)
2. 暗褐色土。 1層に比べ、粘性強、しまり同じ。0.1mm程度の白色バミス、スコリアを混入する。1mm程度のローム粒子、4mm程度のロームブロックを斑状に混入する。カーボンを若干混入する。(7.5Y R3/2)
3. 黒褐色土。 2層に比べ、粘性強、しまりやや弱。0.1mm程度の白色バミス少量、ローム粒を若干混入する。(10Y R2/3)
4. 黒褐色土。 3層に比べ、粘性、しまり共に強。粒子密。1mm程度のローム粒を若干混入する。(10Y R3/2)
5. 暗褐色土。 粒子密。1層に比べ、白色バミス、スコリアを少量混入する。粘性弱、しまり強。(10Y R3/3)

6. 褐色土。 5層に比べ、1mm程度の白色バミス多く混入する。1mm程度のローム粒子、赤色スコリアを混入する。粒子やや粗。粘性弱、しまり強。(7.5Y R4/3)
7. 黒褐色土。 6層に比べ、粘性強、しまり弱。粒子粗。0.1mm程度の白色バミス、ローム粒、カーボンを若干混入する。(10Y R3/2)
8. 黒褐色土。 7層に比べ、粘性、しまり共に弱。粒子粗。0.1mm程度の白色バミスごく少量、カーボンを若干混入する。(10Y R3/2)
9. 黄褐色土。 粒子密。ローム粒を多量に混入する。粘性、しまり共に強。(10Y R4/4)
10. 暗褐色土。 粒子密。1層に比べ、白色バミス少量混入する。0.1mm程度のローム粒を多量に混入する。(10Y R3/3)

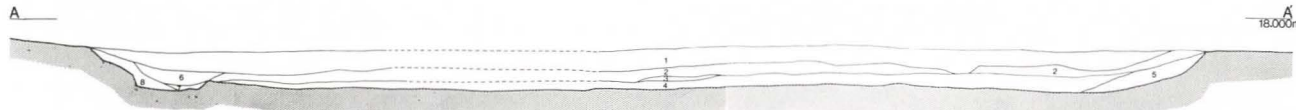


02. C区11 T西壁土層説明

1. 客土。
2. 暗褐色土。 粒子密。0.1mm程度の白色バミス、1mm程度のスコリアを若干混入する。粘性、しまり共に中。(10Y R3/3)
3. 暗褐色土。 2層に比べ、粘性、しまり共にやや弱。粒子密。0.1mm程度の白色バミス少量、1~2mm程度のローム粒を多量に混入する。(10Y R3/4)
4. 褐色土。 2層に比べ、粘性、しまり共にやや弱。粒子やや粗。0.1mm程度の白色バミス、カーボン粒子、赤色スコリア、ローム粒を若干混入する。(10Y R4/4)
5. 褐色土。 粒子粗。0.1mm程度の白色バミス極めて少量混入する。1~2mm程度のローム粒を斑状に混入する。粘性、しまり共に弱。(10Y R4/6)
6. 黄褐色土。 5層に比べ、粘性やや強、しまりやや弱。粒子密。1~2mm程度のロームブロックを斑状に、カーボンを若干混入する。(10Y R5/6)

7. 褐色土。 2層に比べ、粘性やや強、しまりやや弱。粒子やや粗。ロームブロックを多量に、0.2~0.3mmの赤色スコリアを若干混入する。(10Y R4/3)
8. 暗褐色土。 2層に比べ、粒子密。2mm程度のローム粒子、白色バミス、カーボン、単輪片を若干混入する。粘性、しまり共に強。(10Y R3/3)
9. 黒褐色土。 2層に比べ、粘性、しまり共にやや弱。粒子粗。5mm程度のローム粒を斑状に混入する。白色バミス、1cm程度のカーボン。1mm程度の赤色スコリアを若干混入する。(10Y R3/2)
10. 黒褐色土。 7層に比べ、粘性、しまり共に強。粒子密。2mm程度のローム粒を若干混入する。(7.5Y R3/2)
11. 鈍い黄褐色土。 粒子粗。0.1mm程度の白色バミス若干。1mm程度のローム粒を多量に、0.1mm程度の赤色スコリア、1~5mm程度のカーボンを極めて少量混入する。粘性、しまり共に弱。(10Y R4/3)
12. 褐色土。 11層に比べ、粘性強、しまり弱。粒子粗。0.1mm程度の白色バミス、2mm程度のカーボンを若干混入する。1~2mm程度のローム粒を斑状に混入する。(10Y R4/6)
13. 褐色土。 11層に比べ、粘性強、しまり弱。粒子やや密。1mm程度のローム粒を斑状に混入する。0.1mm程度の白色バミス、カーボンを若干混入する。(10Y R4/4)

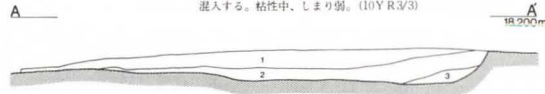
第34図 瓦塚古墳土層断面図6 (1/80)



**02. C区B T西壁土層説明**

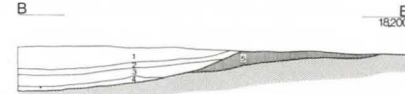
1. 暗褐色土. 粒子密, 0.1mm程度のバミス, 1mm程度のスコリアを少量混入する。カーボンを比較的多く混入する。粘性弱, しまり中。(10Y R3/3)
2. 黒褐色土. 1層に比べ, 粘性強, しまり中。粒子密, 0.1mm程度のバミス, 1mm程度のスコリアを極めて少量混入する。カーボンを混入する。(10Y R2/3)
3. 灰褐色土. 粒子密。灰色粘土をブロック状に混入する。カーボンを少量混入する。粘性, しまり共に強。(10Y R5/1)
4. 暗褐色土. 粒子やや粗, 1~2mm程度のローム粒子を多量に混入する。カーボンを少量混入する。粘性中, しまり弱。(10Y R3/3)

5. 褐色土. 粒子やや粗, 1~2mm程度のローム粒子を少量混入する。粘性中, しまり弱。(10Y R4/6)
6. 暗褐色土. 粒子やや粗, 2~5mm程度のローム粒子を若干, 0.1mm程度の赤色スコリアを極少量混入する。カーボンを若干混入する。粘性, しまり共に弱。(10Y R3/3)
7. 褐色土. 6層に比べ, 粘性, しまり共に強。粒子やや粗, 2mm程度のローム粒子, 1mm程度の白色粘土粒子を若干混入する。(7.5Y R4/3)
8. 褐色土. 粒子密, 2~5mm程度のローム粒子を多量に, 5~10mm程度のロームブロックを混入する。粘性弱, しまり中。(7.5Y R4/3)



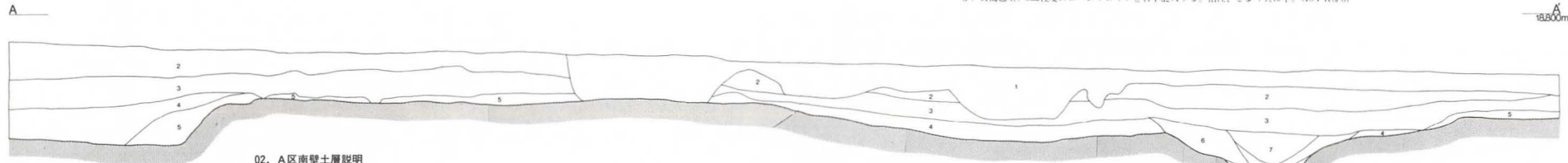
**02. C区Q T南壁土層説明**

1. 暗褐色土. 0.1~0.2mm程度のバミス, 0.1~2mm程度の焼土を多量に, カーボン粒を若干混入する。粘性, しまり共に中。(10Y R3/3)
2. 黄褐色土. ローム粒子, ロームブロックを若干混入する。粘性, しまり共に中。(10Y R3/4)
3. 褐色土. 2層に比べ, しまりやや弱, 粘性中。ローム粒子を若干混入する。(10Y R4/6)



**02. C区10 T東西ベルト土層説明**

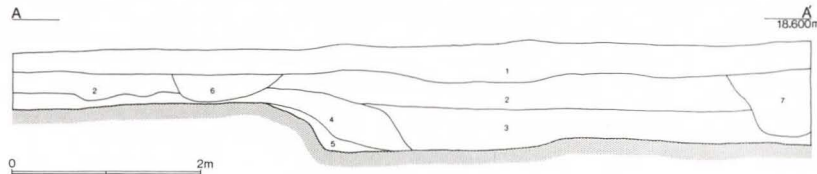
1. 暗褐色土. 粒子やや粗, 0.2mm程度のスコリア, 0.1mm程度のバミスを若干混入する。粘性, しまり共に中。(10Y R3/3)
2. 白色粘質土. 0.1~0.3mm程度のローム粒子, 0.1mm程度の赤色スコリアを若干混入する。粘性, しまり共に強。(10Y R5/2)
3. 黒褐色土. 粒子やや粗, 2~3mm程度のローム粒子を若干混入する。粘性, しまり共に弱。(10Y R2/3)
4. 暗褐色土. 1層に比べ, 粒子やや密, 0.1~0.2mm程度のバミスを多量に, カーボン, 1~2mm程度のローム粒子を若干混入する。粘性, しまり共に中。
5. 黄褐色土. 3mm程度のロームブロックを若干混入する。粘性, しまり共に中。(10Y R5/6)



**02. A区南壁土層説明**

1. 客土.
2. 褐色土. 粒子やや粗, 0.1mm程度の白色バミスを多量に, 0.1mm程度の赤色スコリアを若干混入する。粘性中, しまりやや弱。
3. 暗褐色土. 粒子密, 0.1mm程度の白色バミス, カーボンを少量混入する。粘性, しまり共に中。
4. 黒褐色土. 粒子密, 0.1mm程度の白色バミスを若干, 0.1~1mm程度のローム粒子を多量に混入する。
5. 暗褐色土. 4層より粒子密, 0.1mm程度のバミスを極めて少量, 1~3mm程度のローム粒子を多量に混入する。粘性, しまり共に中。

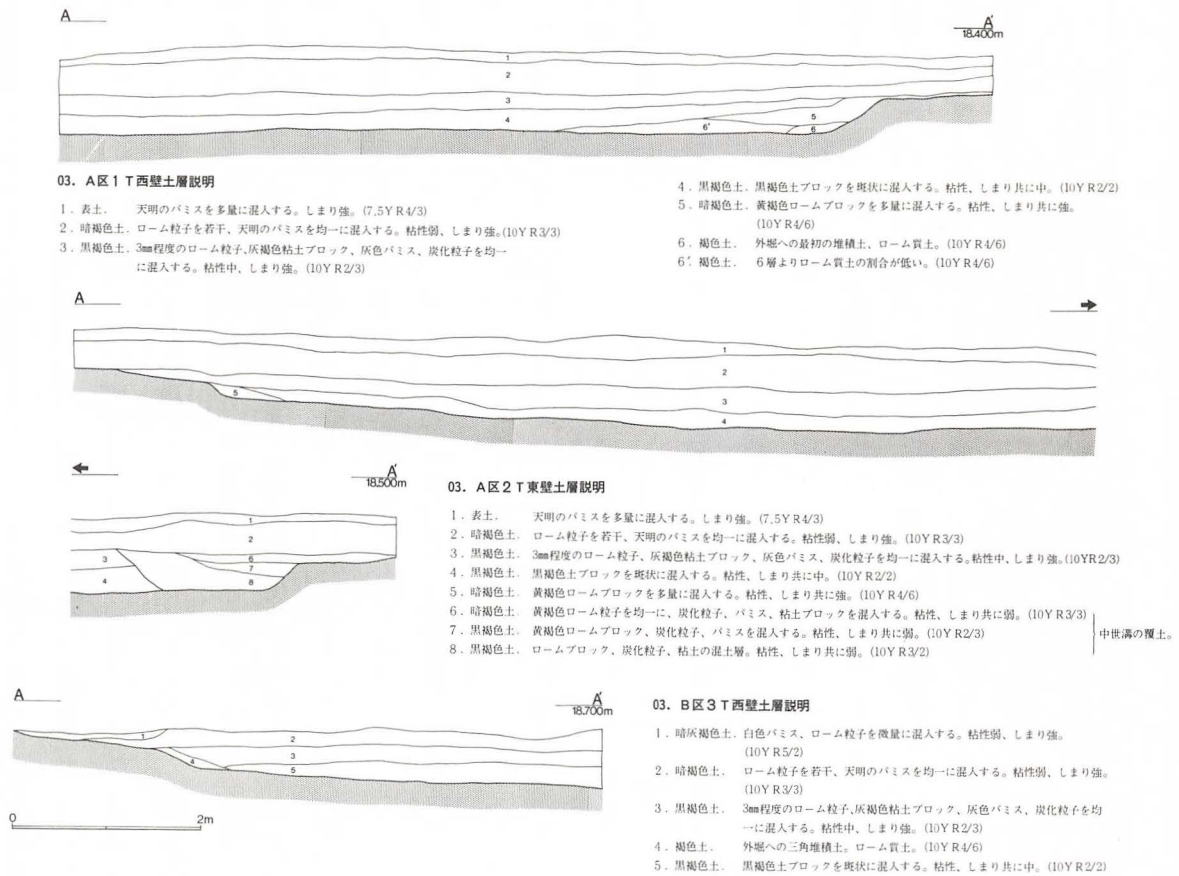
6. 灰白色粘土. 部分的に褐色土を混入する。
7. 灰白色粘土. ローム粒子を混入し, やや黄色味を帯びる。
8. 灰白色粘土. ローム粒子を混入し, やや青味を帯びる。
9. 灰白色粘土. 多量のロームブロックを含む。



**02. B区内堀北壁土層説明**

1. 褐色土. 粒子やや粗, 0.1mm程度の白色バミスを多量に, 0.1mm程度の赤色スコリアを若干混入する。粘性中, しまりやや弱。(10Y R4/4)
2. 暗褐色土. 粒子密, 0.1mm程度の白色バミス, カーボンを少量混入する。粘性, しまり共に中。(10Y R3/4)
3. 黒褐色土. 粒子密, 0.1mm程度の白色バミスを若干, 0.1~1mm程度のローム粒子を多量に混入する。(10Y R2/3)
4. 暗褐色土. 3層より粒子密, 0.1mm程度のバミスを極めて少量, 1~3mm程度のローム粒子を多量に混入する。粘性, しまり共に中。(10Y R3/4)
5. 褐色土. 粒子やや密, 5mm程度のローム粒子を多量に, カーボンを少量混入する。粘性中, しまり弱。(7.5Y R4/6)
6. 褐色土. 1層より粒子密, 0.2mm程度の赤色スコリアを若干, 2~3mm程度のローム粒子を少量, カーボンを極めて少量混入する。粘性中, しまりやや弱。(10Y R4/4)
7. 暗褐色土. 粒子密, 0.1~1mm程度の黄色スコリアを少量, カーボンを混入する。粘性, しまり共に中。(7.5Y R3/3)

第35図 瓦塚古墳土層断面図7 (1/80)



第36図 瓦塚古墳土層断面図8 (1/80)

## 一一遺物

昭和六三年度から平成三年度までの出土遺物には、円筒埴輪片、形象埴輪片、須恵器片などがある。各年度ごとの調査区からは多数の遺物が出土しているが、相互に接合するものもあり、まとめて報告することにする。大半を占めるのは円筒埴輪片であり、総重量は一一〇一・五一鎰である。昭和六三年度2Tにおいて確認された円筒埴輪片を除き、すべてが周堀からの出土であり、原位置での検出はない。

以下、種類別に遺物の概要を述べるが、形象埴輪を除く一点ごとの詳細については、観察表を作成してある。なお、各出土位置図及び写真図版の遺物に付した番号は、実測図の番号と共通である。

### (一) 円筒埴輪 (第37、47、50、55図)

胎土の特徴、焼成の程度、色調の差及び器形や内外面の調整技法、凸帯の形状等の観察結果をもとに分類し、説明を進める。分類は埼玉古墳群発掘調査報告書第七集の瓦塚古墳のものに準じるが、今回の観察により新たな特徴も確認しえたことを予め断っておく。

#### A<sub>1</sub>類

極めて鮮やかな赤色を呈し、ほとんどが土色帖の赤色(10R4/8・5/8が主体で、他に10R4/6・5/6など)に対応している。小礫が多く、白色バミスを相当量含んでおり、全体として酸化鉄粒の含有率が低い。焼成は極めて良く、堅緻に焼き上がっており、表面に光沢をもつものが多い。比較的厚手の製作である。

外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケを施す。31は四条凸帯五段構成の大型品であり、復原口径三八<sup>マ</sup>、底部二六・五<sup>マ</sup>、復原器高七〇・五<sup>マ</sup>を測る。寸胴な器形を呈し、口縁部は上方でやや外反する。凸帯はM字形を呈し、その間隔は第一・二段と口縁部が長く、透孔のある第三・四段が短い。外面はタテハケであり、成形後縦方向の亀裂が生じたために、その部分をユビナデによってナデ消した跡が観察される。内面調整はやや緩いナナメハケを施し、凸帯の内面側には指頭圧痕が付く。透孔は円形を第三段と第四段にやや不正確であるが、九〇度ずらして二個穿たれている。

器形は寸胴で大型のものが多くと推察される。内面調整にナデを施すものも存在するが、全体として少ない。凸帯はM字形を呈するものが多く、荒いハケメを用いる個体が比較的多く存在し、全体的にやや粗雑な印象をうける。

## A<sub>2</sub>類

色調は橙色 (2.5 Y R 6 / 8 ないし 5 Y R 7 / 6・6 / 8・2.5 Y R 6 / 6・7 / 6) を基調としており、一部赤色や明赤褐色を呈するものもある。比較的丁寧なつくりであるが、やや小礫を含む。焼成は良好であるが、やや軟質なものも存在する。A<sub>1</sub>類に比べ薄手の製作であるものが多い。

外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケ及びヨコハケを施す。21は四条凸帯五段構成の中型品であり、復原口径三四・五<sup>マ</sup>、底径二一・八<sup>マ</sup>、復原器高六二<sup>マ</sup>を測る。底部から口縁部にかけて徐々に広がっていく器形を呈する。凸帯はややつぶれた台形を呈し、その間隔は第一段と口縁部が長く、第二・三段が短い。外面はタテハケ、内面は第一段目までがナナメハケであり、その上はヨコハケを施し、いずれもやや荒いハケメである。凸帯の内面側にはヨコナデを施す。透孔は円形を第三段と第四段にほぼ九〇度ずらして

二個穿たれている。

器形は上方へ外反していくもの (5・7・46など) と、A<sub>1</sub>類と同様に寸胴なもの (2・6・33など) と両方が存在する。第一段の内面調整にナデを施すものが、A<sub>1</sub>類より多く存在する。凸帯は台形を呈するものが多く、ハケメは中間的なものが主体である。

## B類

色調は浅黄橙色 (7.5 Y R 8 / 4・10 Y R 8 / 3 ないし 7.5 Y R 8 / 6・10 Y R 8 / 4) を基調としており、橙色、にぶい黄橙色を呈するものもある。全体として丁寧な作りであり、砂粒は小さくきめが細かい。焼成は良好であり、半須恵質のものも存在する。特に注目されるのは、胎土中にいわゆる白色針状物質を含む点である。また、酸化鉄粒を多く含む。A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>類に比べつくりが丁寧であり、薄手の製作である。

外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケ、口縁部などはヨコハケを施す。全体の器形を知り得る資料がないが、ほぼ上方へ外反していくもの (3・13・17・119など) と、寸胴なもの (1・26・30・54・121など) と両方が存在する。以下、部位ごとに説明を進めていく。

17は口縁部であるが、上方へ外反する形態をもち、口縁部径は三四<sup>マ</sup>である。外面調整はタテハケ、内面調整は口縁端部付近がヨコハケ、その他がナナメハケを施す。口縁端部はヨコナデによって浅い凹線を生じている。凸帯は台形である。1・30は同じく口縁部であるが、やや寸胴な形態をもち、口縁部径は1で三七<sup>マ</sup>、30で三三・八<sup>マ</sup>を測る。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケ・ナナメハケを施す。30の口縁下部の外面は幅二<sup>マ</sup>のヨコナデによってハケメが消されている。透孔は円形を対向して二個穿っている。凸

帯は1がM字形、30が台形である。注目されるのは内面にヘラ先で×字状のいわゆる窯印を陰刻している点である。89にも同様の陰刻があり、B類にのみ確認される特徴である。

胴部は外面調整タテハケ、内面調整ナメハケ及び縦位のナデを施す。凸帯はM字形を呈するもの(3・9・10など)も存在するが、ほとんどが台形を呈するものである。復原胴部径は二〇センチから三〇センチまでとやや幅があるが、全体としては小振りなものが多い。

底部は薄手であり、著しく厚くなるA<sub>1</sub>類とは歴然たる差異がある。外面調整はタテハケ、内面調整は縦位及び斜位のナデを施すものが多い。復原底部径は二二センチ内外の中型品と三〇センチ内外の大型品に分けられる。

## (二) 朝顔形円筒埴輪(第23・24・27・29・32・37・67・69図)

円筒埴輪と同様にA<sub>1</sub>類、A<sub>2</sub>類、B類に分類できる。全体を復原し得る資料はないが、径が小さく小づくりなものである。以下、類別ごとに説明を進める。

### A<sub>1</sub>類 (23・69)

23は肩部から体部にかけての資料である。鮮やかな赤色(10R5/8)を呈し、堅緻に焼き上がっている。体部径二六センチ、残存高三〇センチを測る。まっすぐに立ち上がる器形であり、凸帯は台形を呈する。外面調整はタテハケであり、成形後縦方向の亀裂が生じたために、その部分をユビナデによってナデを施す。透孔は円形を現状での二段目と三段目に、九〇度ずらして二個穿たれている。

### A<sub>2</sub>類 (27・29・32・37・67・75・76)

29は口縁部の破片であるが口縁端部で急に外傾する器形をとる。橙色(2.5YR6/8)を呈し、焼き上がりは普通である。復原口縁部径は五六センチであり、中間に貼られた台形の凸帯によって上段と下段に分けられる。外面調整はタテハケ、内面調整はナメハケ及び口縁端部付近はヨコハケである。凸帯の内面側には指頭圧痕が付く。

32のくびれ部の内面側は丁寧なヨコナデを施す。復原くびれ部径は一六センチである。

### B類 (24・28)

28は肩部から体部にかけての資料である。浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈し、焼き上がりは普通である。体部径二五センチ、残存高五〇センチを測る。外面調整は円筒部がタテハケ、肩部ナメハケ、内面調整はくびれ部までが斜位のナデ、くびれ部がヨコナデ、それより上はナメハケを施す。まっすぐに立ち上がる器形であり、凸帯はM字形を呈する。透孔は円形を現状での一段目と三段目に、九〇度ずらして二個穿たれている。

## (三) 形象埴輪(第48・50・55図)

各形象埴輪は主として平成二年度のA区から出土した。以下、種類ごとに説明を進めていく。

### 人物埴輪 (101・146・150・160)

101は下げ美豆良の破片である。橙色(5YR6/6)を呈し、チャート、長石、角閃石、火山ガラス、白色パミス、白色針状物質を含む。焼成は良好である。粘土棒を絞りながら成形しユビナデを施す。赤彩を一条に塗布している。



146は振り分け髪 of 破片である。明赤褐色 (2.5 Y R 5 / 8) を呈し、チャート、長石、角閃石、火山ガラス、白色パミス、酸化鉄粒の粗い砂粒を多く含む。焼成は極めて良好である。外面はハケ (一・四マシ / 一〇本) 及びユビナデ、内面はユビナデである。149も振り分け髪 of 人物であるが、146とは焼成などが異なるため別個体の振り分け髪 of 人物があったと考えられる。

147は組み紐部分であり、人物埴輪 of 腰部に付けられたものである。明赤褐色 (2.5 Y R 5 / 8) を呈し、長石、角閃石、白色パミス、頁岩などを多く含む。焼成は極めて良好であり、粘土紐をより曲げて成形している。上端部は本体へユビナデによって圧着している。

148は上げ美豆良 of 破片である。明赤褐色 (2.5 Y R 5 / 6) を呈し、チャート、角閃石、白色パミス、酸化鉄粒 of 粗い砂粒を多く含む。焼成は極めて良好であり、粘土棒をユビナデで成形している。

149は振り分け髪男子 of 頭部である。橙色 (5 Y R 7 / 4) を呈し、石英、チャート、長石、黒色砂粒を含み、白色パミス、酸化鉄粒を若干含む。焼成は良好であり、赤彩を頭頂部から髪 of 前面、眉から頬・鼻、口下部から顎・首筋にかけて焼成前に塗布されている。顔面は半円形 of 粘土板を貼り付けて製作しており、ほぼ水平に細い目と口が開けられている。耳は粘土環を接着して表現しており、その下部には剝離痕がある。あるいは耳環などが欠落したのもかもしれない。頭髪はハケ (一・六マシ / 一〇本) によって、後頭部及び振り分け髪部に表現されている。鼻は稜線がはっきりとした整ったつくりであり、細い工具で縦に浅く鼻孔を表現している。なお、頭頂部には用途不明の孔が貫通している。内外面ともにナデ調整である。残存高は一三・七マシである。

150は踊る男子である。調査では頭部のみが出土していたが、昭和三二年に出土していた体部と接合した。腰から上の部分が残存し、高さは四四マシある。明赤褐色 (2.5 Y R 5 / 8) を呈し、チャート、長石、角閃石、白色パミス、酸化鉄粒 of 粗い砂粒を多く含む。焼成は良好である。胴部及び後頭部下半、被り物部分はタテハケ (一・五マシ / 一〇本)、その他は丁寧なナデを施す。胴部側面には円形 of 透孔が開けられている。顔面は半円形 of 粘土板を貼り付けて製作しており、ほぼ水平に細い目と口が開けられている。上げ美豆良であり、耳は円孔を穿つ。鼻は筋の通った整ったつくりであり、浅く円形に鼻孔を表現している。腕は左手を上げ、右手を下げる姿勢をとっており、指は表現されておらず、服の表現もない。

被り物は、従来冠と帽があったことが明らかになっているが、149の場合、姿態や、服装などからみて、冠ではなく前と後ろが二又に分かれた帽であると考えた方がよいだろう。その性格は踊っている姿態を表現したものである。う。

160は性別不明 of 人物埴輪である。半身像で、首の部分までが残存している。残存高は五一マシであり、顔及び両腕を欠損する。赤色 (10 Y R 5 / 8) を呈し、石英、チャート、長石、角閃石、火山ガラス、白色パミス of やや粗い砂粒を含む。焼成は良好である。外面は全体にタテハケ (二マシ / 一〇本) を施し、内面はナデである。両手を前に突き出す姿態を表現する。背面に粘土で円形浮文が一つ付けられているが用途不明である。

馬形埴輪 (98・99・100・102・123・129・132・133・139・145・162・163・168) 色調、焼成、馬具の表現などから大きく三タイプにわけられ、他にいずれともつかない破片がある。以下、タイプごとに説明を進める。

馬1 (123・125・126・128・130)

にぶい黄橙色 (10 Y R 7 / 4) を呈し、石英、チャート、長石、角閃石、火山ガラス、白色パミスの粗い砂粒を多く含む。焼成は良好であり、堅く焼き上がっている。

123は胸繫の部分である。粘土の凸帯にやや先端の尖った円形の杏葉を貼り付け、杏葉には粘土の円形浮文を周縁に貼り巡らすことによって、鋳を表現している。外面はタテハケ (一・五マ / 一〇本)、内面は斜位のユビナデを施す。凸帯上面から内側に向かって、直径六ミリ程の小孔が二個確認できる。一個は完全に貫通しているが、一個は貫通せずに粘土の中で止まっている。

他の部分の破片には見られないこと、この部分が馬頭部の下に位置することなどから、馬の頭部を乾燥するまで押さえるために棒を用いた痕跡であると思われる。

125・128は鞍橋の破片である。円形浮文が片側に付けられており、128は鞍橋の上面にも円形浮文を付ける。全体にナデ調整によって成形している。

126は障泥の部分である。胴部中ほどから粘土板を貼り付けて障泥を作り、粘土紐を貼り付けて輪籠と、それを留める絞具を表現している。外面はヨコハケ (一・五マ / 一〇本) 及びユビナデを施す。内面はユビナデによって成形している。

129・130は杏葉である。123と同じつくりであり、胸繫に付いていたと考えられる。円形浮文を周縁に貼り巡らしている。

馬2 (124・133)

にぶい橙色 (7.5 Y R 7 / 4) を呈し、石英、チャート、長石、角閃石、白色パミス、頁岩の粗い砂粒を多く含む。焼成は良好であり、堅く焼き上がっている。

124は胸繫の部分である。粘土の剝離痕から、馬鐸が付くタイプの馬形埴輪

であり、馬1とは別個体であると判断した。胸繫は鋸歯文状に赤彩が焼成前に塗布されている。正面と考えられる位置に円形の透孔が開けられている。

外面はナナメハケ (一・五マ / 一〇本) であり、馬鐸接合部は丁寧なナデ、内面は斜位のナデを施す。凸帯上面の小孔は馬1と同一技法である。

133は馬鐸の破片である。124と接合はしないものの、諸特徴から同一個体と判断した。外面はヘラ工具で\*印を線刻し、対向する二ヶ所に赤彩を施している。

馬3 (132・139・145・162)

橙色 (5 Y R 6 / 8・7 / 6・7.5 Y R 6 / 6・7 / 6) 及び、にぶい橙色 (7.5 Y R 7 / 4) を呈し、チャート、長石、白色パミス、酸化鉄粒、輝石などの粗い砂粒をやや多く含む。焼成は良好である。

132は立て髪破片である。ユビナデによって成形しており、かなり薄手のつくりである。馬1・2に比べ薄手であり、あまり大型ではない馬になると思われる。

139・145・162は馬鈴である。全体をユビナデによって成形しており、本体との接着方法によって二種に分けられる。すなわち、鈴の先端を粘土で接着するもの (140・141・143・145) と、鈴そのものを直接に、接着するもの (139・142・144・162) である。鈴口はヘラ工具で切り目を入れている。繫に付けられていたものであろう。

他に馬1と同一個体かどうか不明の破片がある。

98は鞍橋から鞍褥にかけての破片である。橙色 (7.5 Y R 7 / 6) を呈し、石英、チャート、長石、白色パミス、酸化鉄粒、金雲母の粗い砂粒を多く含む。

む。焼成は良好である。鞍橋部分は欠損しているが、前輪の左側の付け根部分である。鞍橋部分には、針状の刺突が前輪と平行して施されている。粘土紐によって絞具を表現している。外面はハケ調整後ナデ、内面はナデ調整である。126とは別個体になる。

99は馬鐸の破片である。赤色(10 Y R 5/8)を呈し、石英、白色パミス、酸化鉄粒、黒色砂粒を含む。焼成は極めて良好である。破片となっているが、類例(菅蒲町東浦古墳など)により凶のように復原した。馬鐸本体を粘土紐によって縦に四分割し、その部分にヘラ工具で線刻を入れている。上端部は粘土を絞り込んで成形し、全体に丁寧なナデを施している。昭和六一年報告では天冠状埴輪と報告したものであるが、今回の接合結果により馬鐸となることが判明した。訂正しておく。

100・102は馬鈴である。諸特徴は馬2のものとはほぼ同一であるが、出土した地点が造出し付近であり、一応不明としておく。

127は鞍橋の破片である。淡黄色(2.5 Y R 8/3)を呈し、長石、白色パミス、角閃石を含む。焼成は良好である。表裏両面にやや大きい円形浮文を付ける。125・128とは別個体である。

163は鞍橋の破片であり、鞍橋は欠損している。浅黄橙色(7.5 Y R 8/4)を呈し、石英、チャート、長石、白色パミスの粗い砂粒を多く含む。焼成は普通である。鞍橋と直交する方向の断面が、下がりぎみになっていることから、馬の尻部につながっていく部分と考えられ、後輪付近の破片と判断した。鞍橋部には、針状刺突が鞍橋と直交して施されている。

168は鞍橋から居木にかけての破片であり、鞍橋は欠損している。橙色(5 Y R 7/4)を呈し、石英、チャート、長石、火山ガラス、酸化鉄粒、黒色

砂粒の粗い砂粒を多く含む。焼成は普通である。居木は、粘土塊を貼り付けて表現している。鞍橋の表現として、円形刺突を七〜八ミリ間隔で施している。

134は鹿形埴輪の角部分の破片である。浅黄橙色(7.5 Y R 8/3)の地に一部明赤褐色(5 Y R 5/6)を呈し、チャート、長石、酸化鉄粒の粗い砂粒を少量含む。焼成は良好である。角の枝分かれの部分は粘土を貼り足しており、全体として縦位のユビナデを施している。

131・153は犬形埴輪の破片である。いずれも橙色(5 Y R 6/6)を呈し、石英、チャート、長石、白色パミス、火山ガラス、酸化鉄粒、角閃石をやや多く含む。焼成は極めて良好であるが、部分的にもろくなっているところもある。極めて残存状況が悪く、131は尻尾のみ、153も尻部分(高さ四三釐)と頭頂部分のみである。尻尾は粘土棒を差し込んで成形している。反時計回りに巻いており、巻き尾を呈する。尻尾の下部には円形の透孔を穿つ。脚部は粘土紐を輪積みし、外面をタテハケ(一・八〜二・〇釐/一〇本)、内面は縦位のナデを施している。胴部は粘土板を上へ積み上げて成形している。外面は尻尾付近は丁寧なユビナデ、その他はハケ、内面はナデを施している。耳は成形後、頭部に差し込む。頭頂部は内外面ともに丁寧なユビナデを施している。尻尾の破片から、二体の犬が存在したことが分かる。

152は大型の水鳥埴輪である。橙色(2.5 Y R 6/6)を呈し、チャート、長石、白色パミスの粗い砂粒をやや多く含む。焼成は良好である。足部及び頭部は欠損しているが、復原高は八二釐である。二条凸帯のドーム天井の台部に双脚で立ち上がる。ヒレは復原であるが、左足にその一部が残存するので、ほぼ誤りないと考えられる。両翼は粘土板を貼り付けて成形している。尾羽

根は粘土板を差し込み、粘土を足して固定している。足部及び首部は、粘土紐を輪積みして製作している。台部の外面はタテハケ（一・八<sup>サ</sup>／一〇本）、内面はナナメハケである。本体の外面、首部及び尻部、体部の一部、足部は丁寧なユビナデ、その他はハケを、内面はユビナデを施す。

注目すべきことは、両翼部や首部の一部に、白泥塗布が確認される点である。

154は小型の水鳥埴輪である。浅黄橙色（10YR8/3）を呈し、石英、チャート、酸化鉄粒、黒色砂粒を少量含み、全体としては胎土は密である。焼成は普通である。首から頭部及び台部の大半を欠損するが、復原高は五九<sup>サ</sup>である。一条凸帯のドーム天井の台部に双脚で立ち上がる。ヒレ部は三本の指に水かきを表現している。尾羽根は、粘土板を差し込んで製作しており、下部には円形の透孔を穿つ。足部は粘土紐を輪積みしている。嘴は細長い平らなものであり、鼻孔は刺突によって、口はヘラ工具で切り込んで表現されている。内面及び嘴、足部の外面はナデ調整であり、その他はハケ（一・五<sup>サ</sup>／一〇本）を施している。両翼の表現はない。152に比べ、かなり小型であり、つくりも稚拙な感じを受ける。

135～138はいずれも共通した形態を示すが、現状では何に伴うものか不明である。にぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、チャート、長石、白色パミス、輝石の粗い砂粒を多く含む。焼成は極めて良好である。すべて三角形状を呈し、ナデによって成形しており、赤彩が確認される。

164は軻または盾形埴輪の破片になると思われる。暗赤色（7.5YR3/6）を呈し、長石、白色パミス、酸化鉄粒を多く含む。焼成は良好であり、外面ナデ、内面ハケ（二<sup>サ</sup>／一〇本）及びナデを施す。円筒に突出部が付く形態であり、幅四<sup>サ</sup>の凸帯を貼り付ける。

（日高 慎）

#### （四）土師器及び須恵器（第48～49・51・54～55図）

瓦塚古墳に直接関係する土器類は平成元年度に調査した造出し部とその周囲の内堀から集中的に出土した。このほかでは、平成二年度A区外堀、平成二年度C区などから少量の出土があったが、年代的に下降するものが多い。

ここでは、これらの土器の特徴について、種類別に説明するが、胎土、色調などの細かいデータについては、観察表を作成してあるので、参照されたい。

##### 1 土師器

いずれも、造出し上面または、その下場からの出土である（第28図参照）。胎土に砂粒をほとんど含まず、精製の土器である点で共通している。

##### 埴

103は体部が球形に近く、口縁部の直立する埴形土器である。復原口径一一・八<sup>サ</sup>、同高一七<sup>サ</sup>前後である。外面調整はヘラケズリである。

##### 鉢

104・105は鉢である。色調や外面のヘラケズリは共通しているが、別個体の可能性もある。104の復原口径は一八・八<sup>サ</sup>、105の復原口径は六・〇<sup>サ</sup>である。口縁部に若干の煤が付着しており、煮沸器であったとみられる。

##### 坏

106・107は模倣坏である。口縁部は外反気味に開く。107の端部には浅い凹線が巡る。口径は一八<sup>サ</sup>前後と大型品で、淡い色調を呈する精製品である。

##### 2 須恵器

大半は造出しからの出土品である（第28図参照）。造出し出土品については出土位置を省略し、その他からの出土品のみ明記することとしたい。

## 器台

109 は三段の透孔をもつ高杯形器台である。復原口径三四・八センチ、同高三六・三センチを計る。受部底面には使用痕が残る。脚部は三角形透しが直列式で四方に開く。裾部を含めてすべての段に波状文が施される。受部は内面に当て具痕が残ることから別体製作とみられる。外面は黒色を呈する。

## 高杯

112 は長脚一段透しの無蓋高杯である。器高一五・七センチ、復原口径九・六センチを計る。杯部は丸底で小型のものだが、口唇部が薄く、丁寧に製作されている。外面には二条の凹線と櫛歯刺突文が巡る。脚部には幅〇・五センチ前後の細長い長方形透しが三方に穿孔されている。

113 は有蓋高杯の脚部と推定した。凸帯間には均整のとれた波状文が巡り、小さな台形状の透孔が穿れている。短脚二段透しの脚部の蓋然性が高い。

## 甕

造出し出土の甕には器形、法量にバラエティーがある。口縁部の短いものはカキメ調整のみで波状文を伴わず、口縁部の長いものは二〜三段にわたって波状文が施されている。いずれも胎土が精選されており、焼成が極めて良好であり、外面に黒色のガラス質の釉出するものが多い点や器肉の芯の部分がアズキ色を呈する点など共通項が多く、同一窯の製品の可能性が高い。

108 は小型の甕で、復原口径二一・二センチ、高さは三〇センチ前後となろう。薄手の作りであるが、叩き整形が明らかである。口頸部は外反しながら開く長手のもので、端部には段がある。二条一組の凹線によって三段に区画され、上の二段には波状文が施されるが、ピッチの急な雑な施文である。

110 は復原口径三七・六センチを計る大型の甕である。口頸部は長手のもので、外反しながら開き、端部は垂直につみ上げられ、鋭く尖る。鋭い凸帯によっ

て文様帯を区画し、二段に波状文を施す。上段はピッチの緩い波状文を二組、下段にはN字形の波状文を施す。体部は木目に直交した刻目をもつ平行叩きで整形している。内面には無文当て具を用いている。

111 は口頸部の短いタイプの甕で、復原口径は二六・四センチを計る。体部は平行叩きの後、カキメを加える。内面の同心円当て具痕は半スリケシである。115 も口頸部の短いタイプの甕である。口頸部は強く外反して開き、端部は上方につまみ上げられて段をなす。体部は肩が強く張る無花果形を呈する。復原口径二八・八センチ、高さは五〇センチ弱となろう。

116 は復原口径四一センチを計る大型の甕である。口頸部は三条一組の凹線によって三段に区画され、波状文が巡る。波状文は段ごとにピッチや振幅を違えて施文され、装飾性を高めている。端部は上下に拡張され鋭く尖る。体部は平行叩き整形で、内面の同心円当て具痕をそのまま残す。

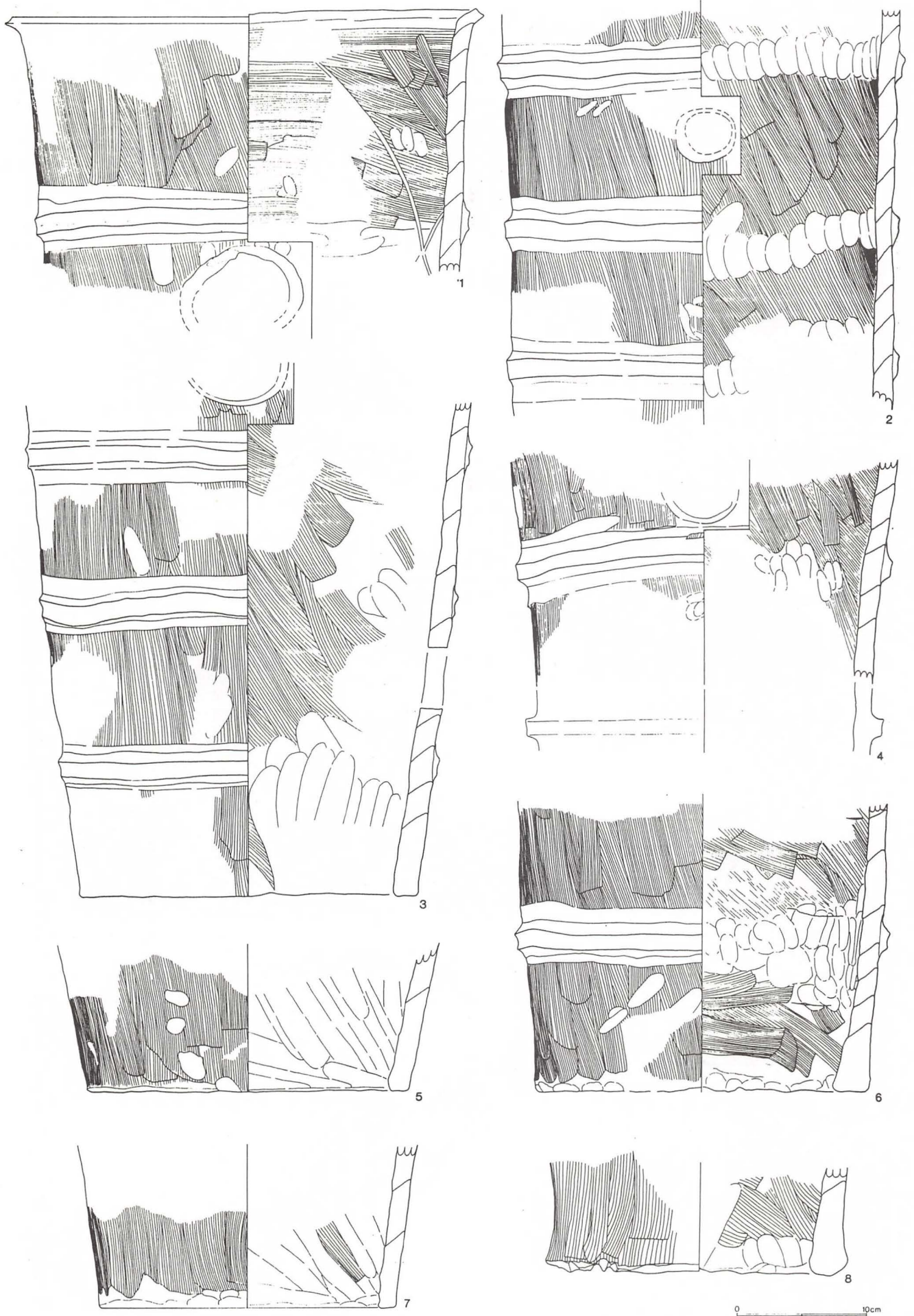
115 と117 は平成二年度A・B区の出土品で同一個体とみられる。平底であり、口縁部の形や厚い自然釉などからみて年代の下降するものである。

159 は平成二年度A区外堀出土である。大粒の砂礫を多量に含む。166 は平成三年度71出土品で、三本歯の粗い原体で波状文が施されている。共に雑な製作であり、同一個体の可能性が高い。

## 壺

151 は平成二年度C区の外堀掘り残し状遺構から出土した。蛇の目状の付け高台を伴い、長頸瓶かと思われる。底部は内側から穿孔されている。

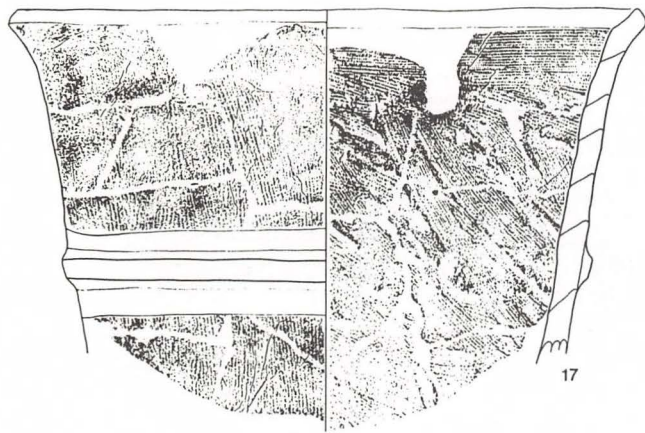
(若松 良一)



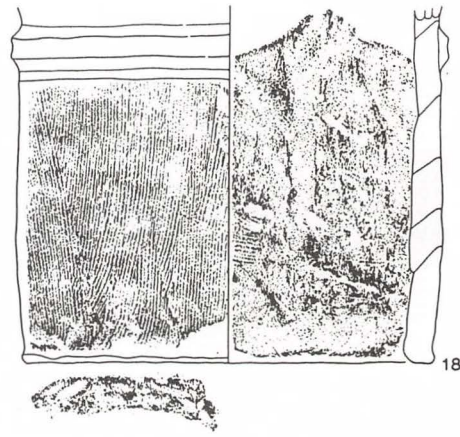
第37図 瓦塚古墳出土遺物1 (昭和63年度) 実測図



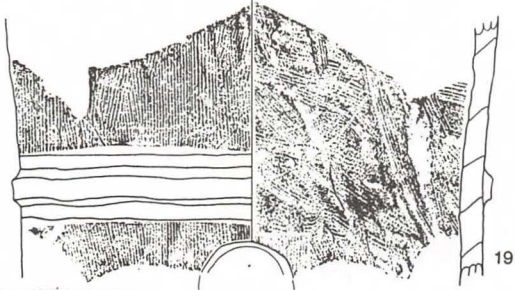
第38図 瓦塚古墳出土遺物2（昭和63年度）実測図・復原図



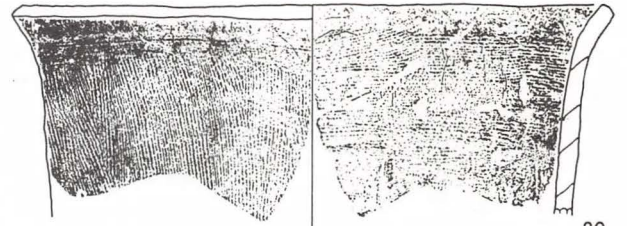
17



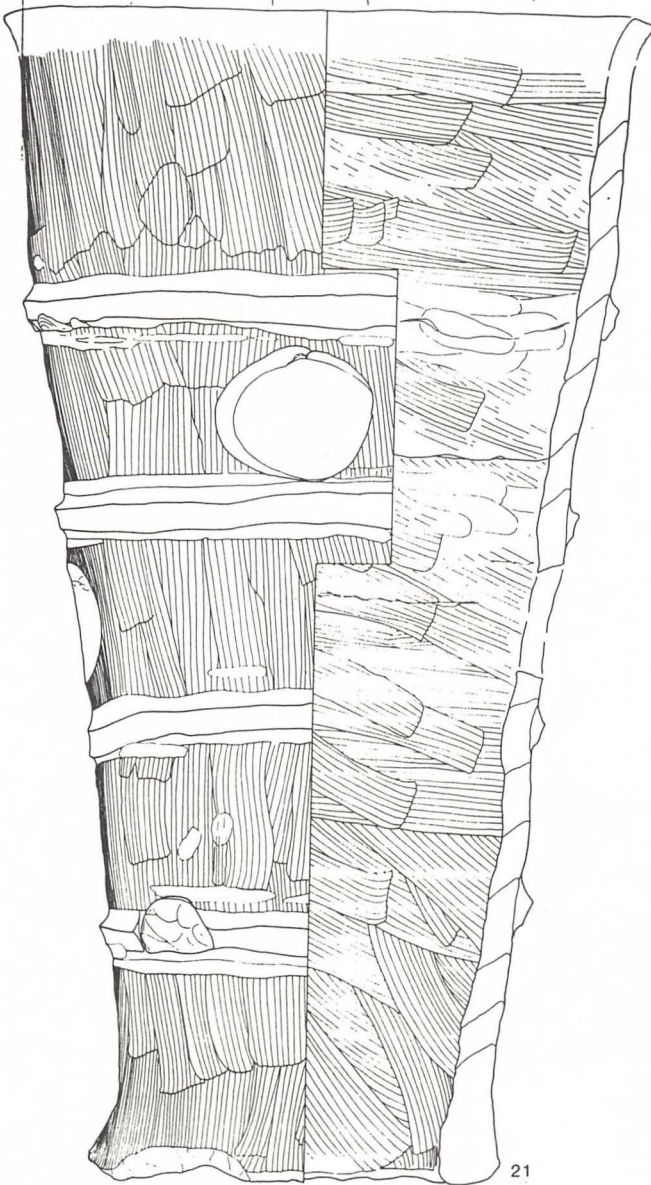
18



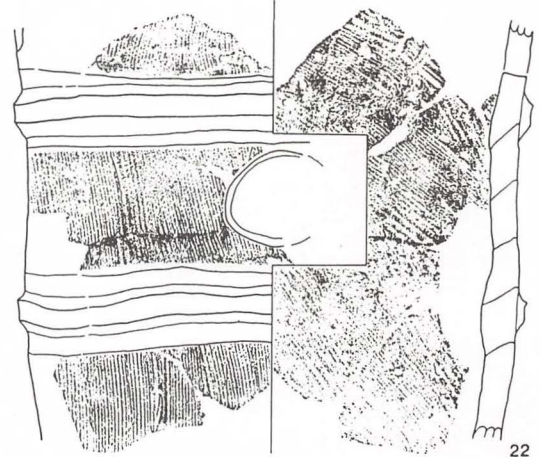
19



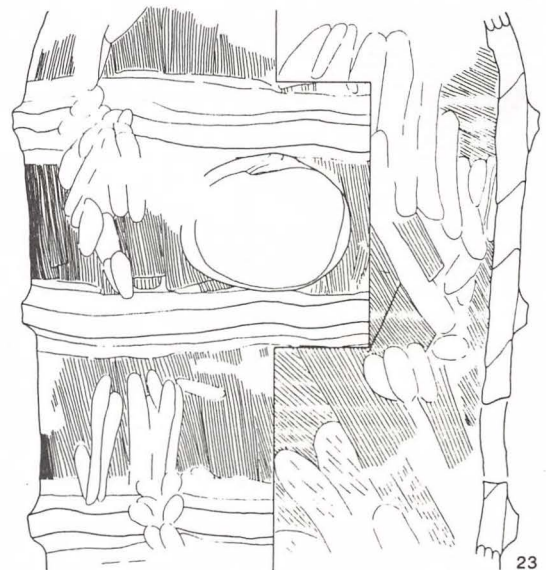
20



21



22

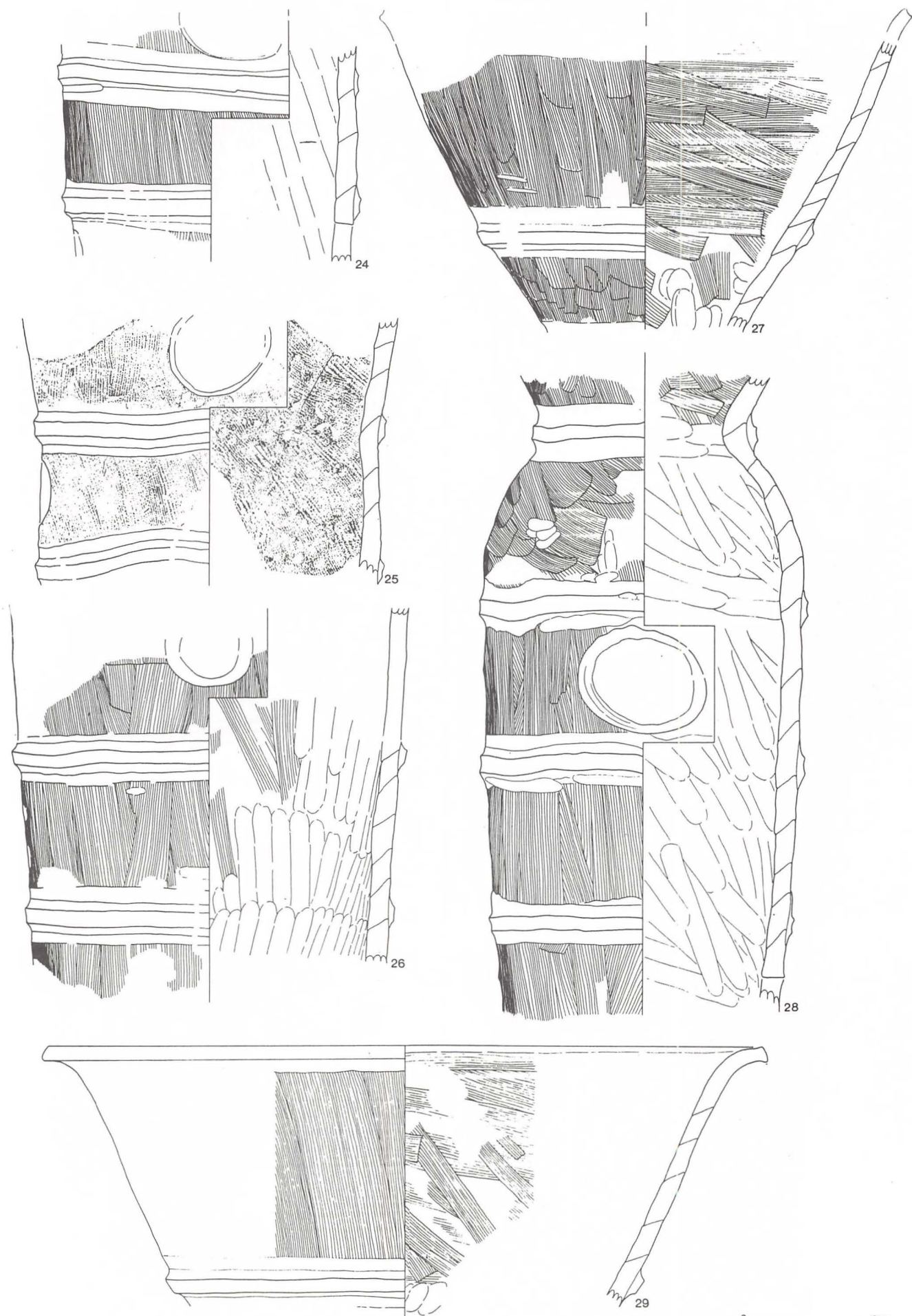


23

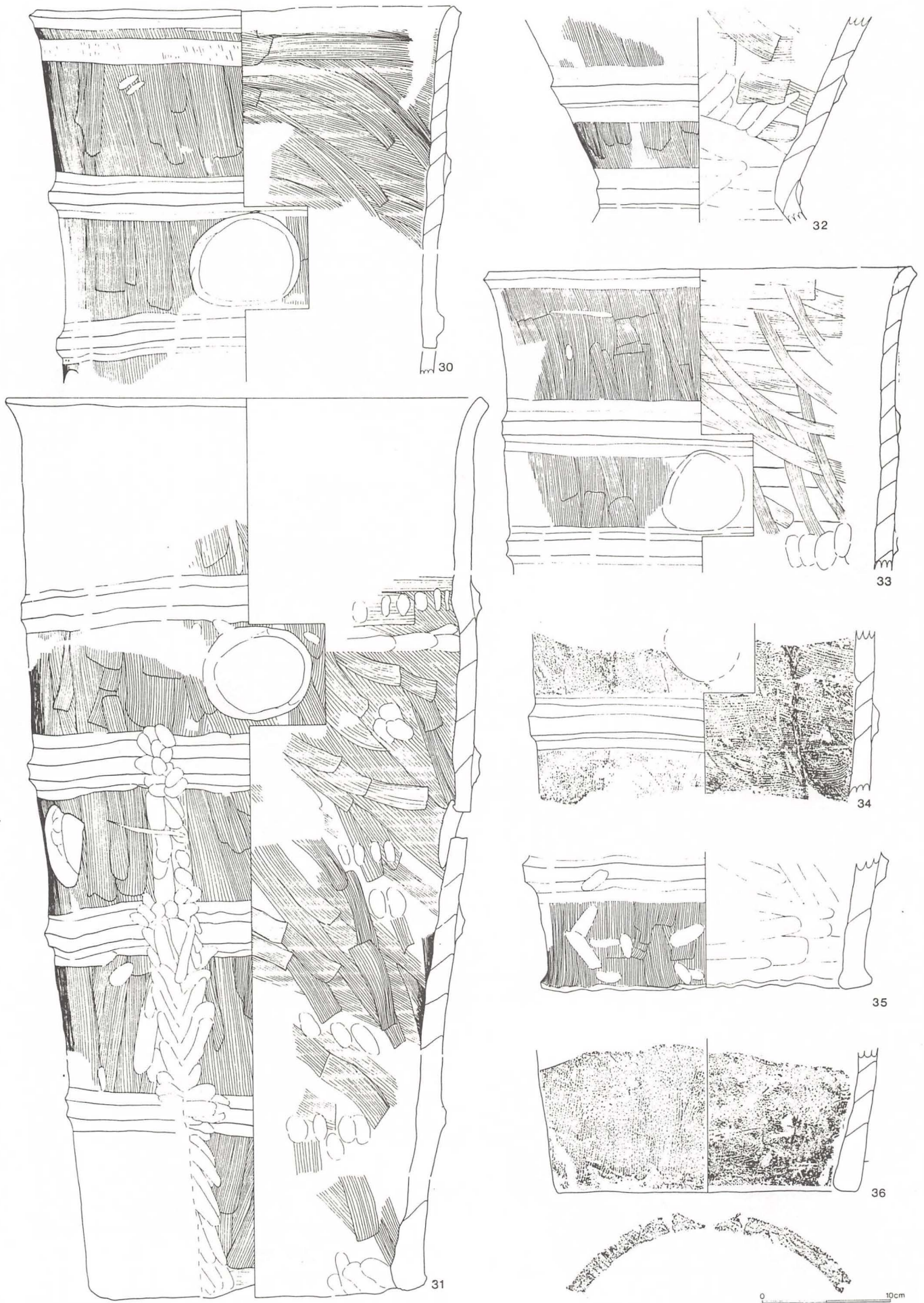
0 10cm

第39图 瓦塚古墳出土遺物3 (平成元年度A区) 実測図・復原図

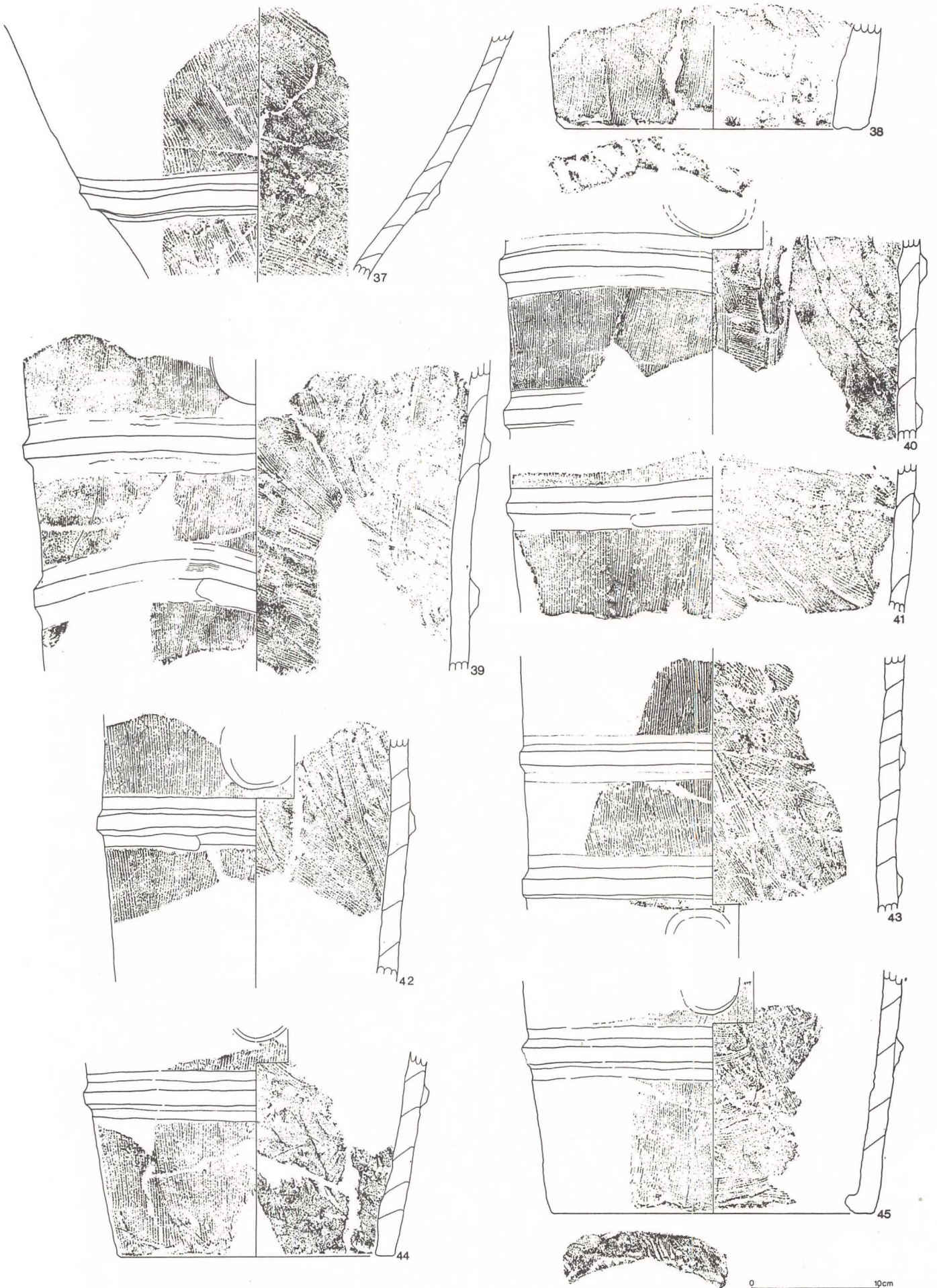




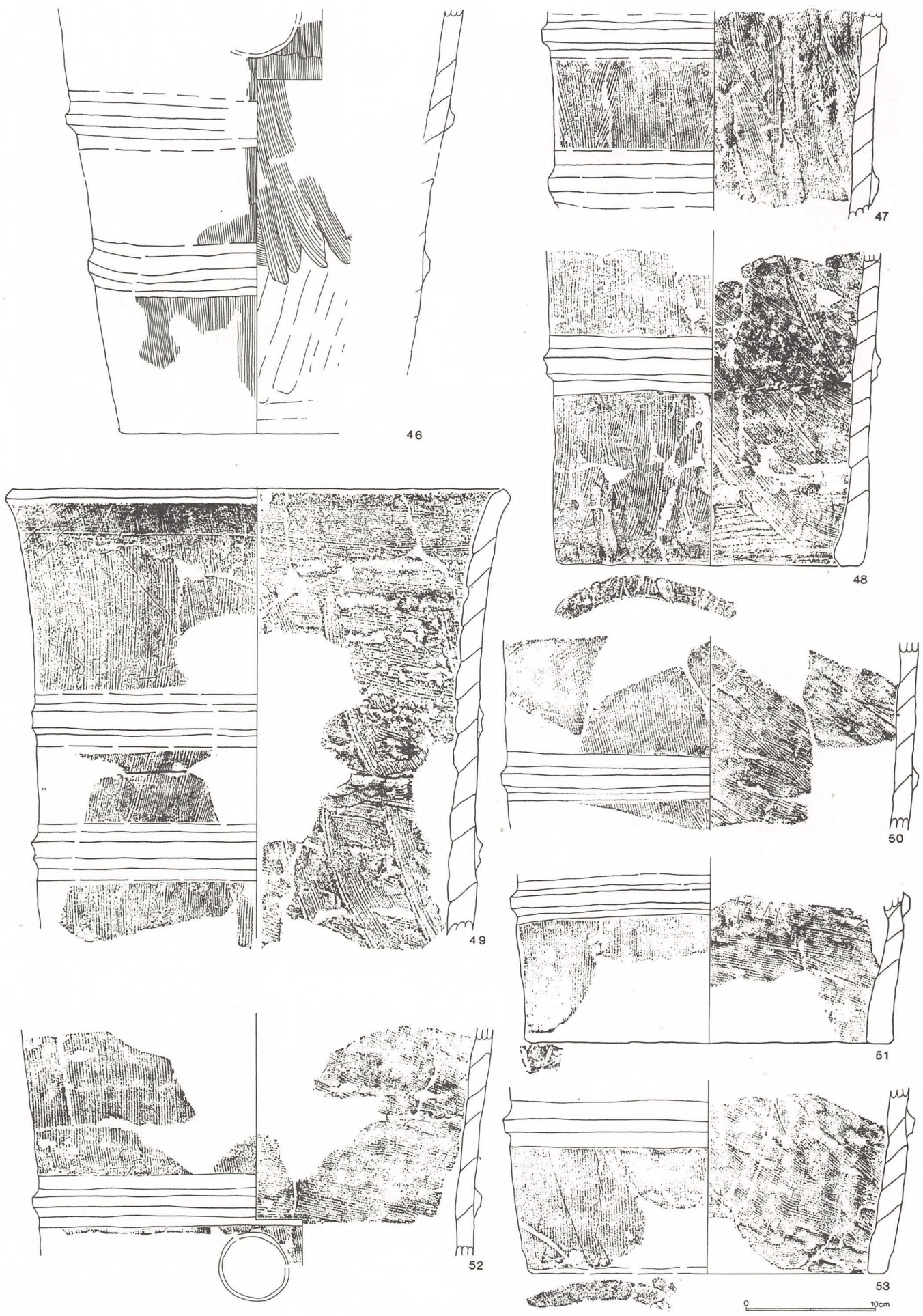
第40図 瓦塚古墳出土遺物4 (平成元年度1T・A区) 実測図・復原図



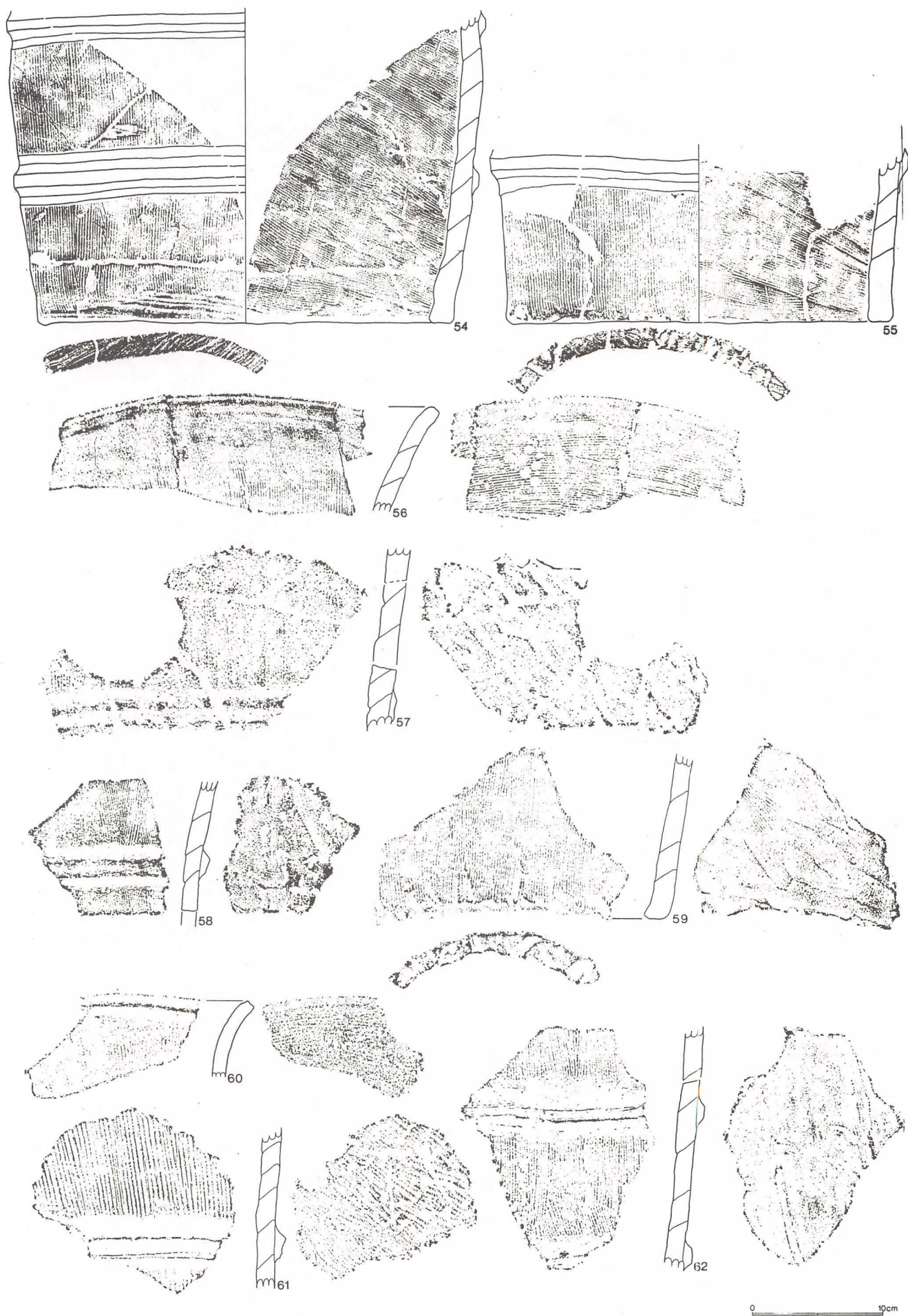
第41図 瓦塚古墳出土遺物5（平成元年度B区）実測図・復原図



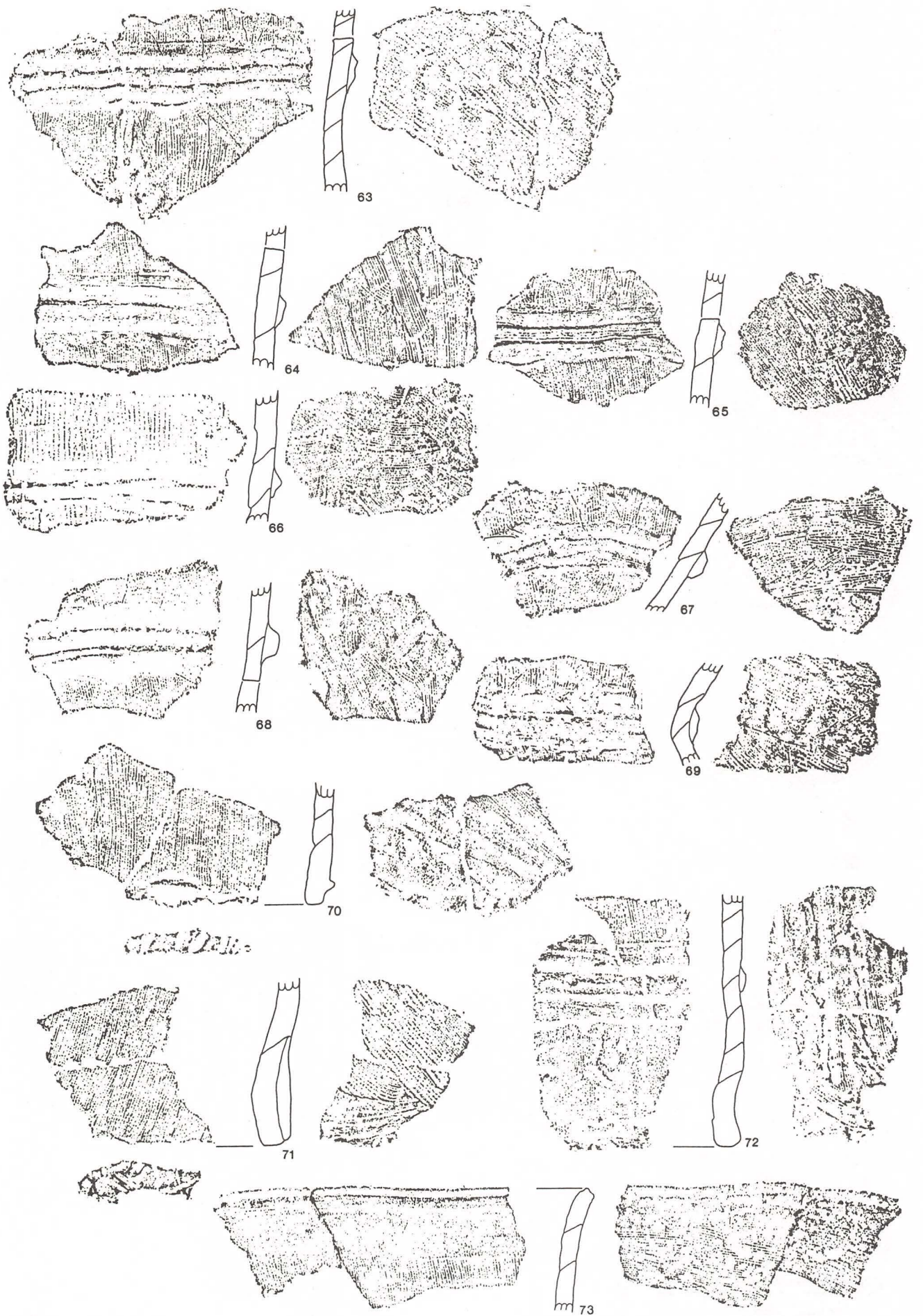
第42图 瓦塚古墳出土遺物6 (平成元年度B・F区) 復原図



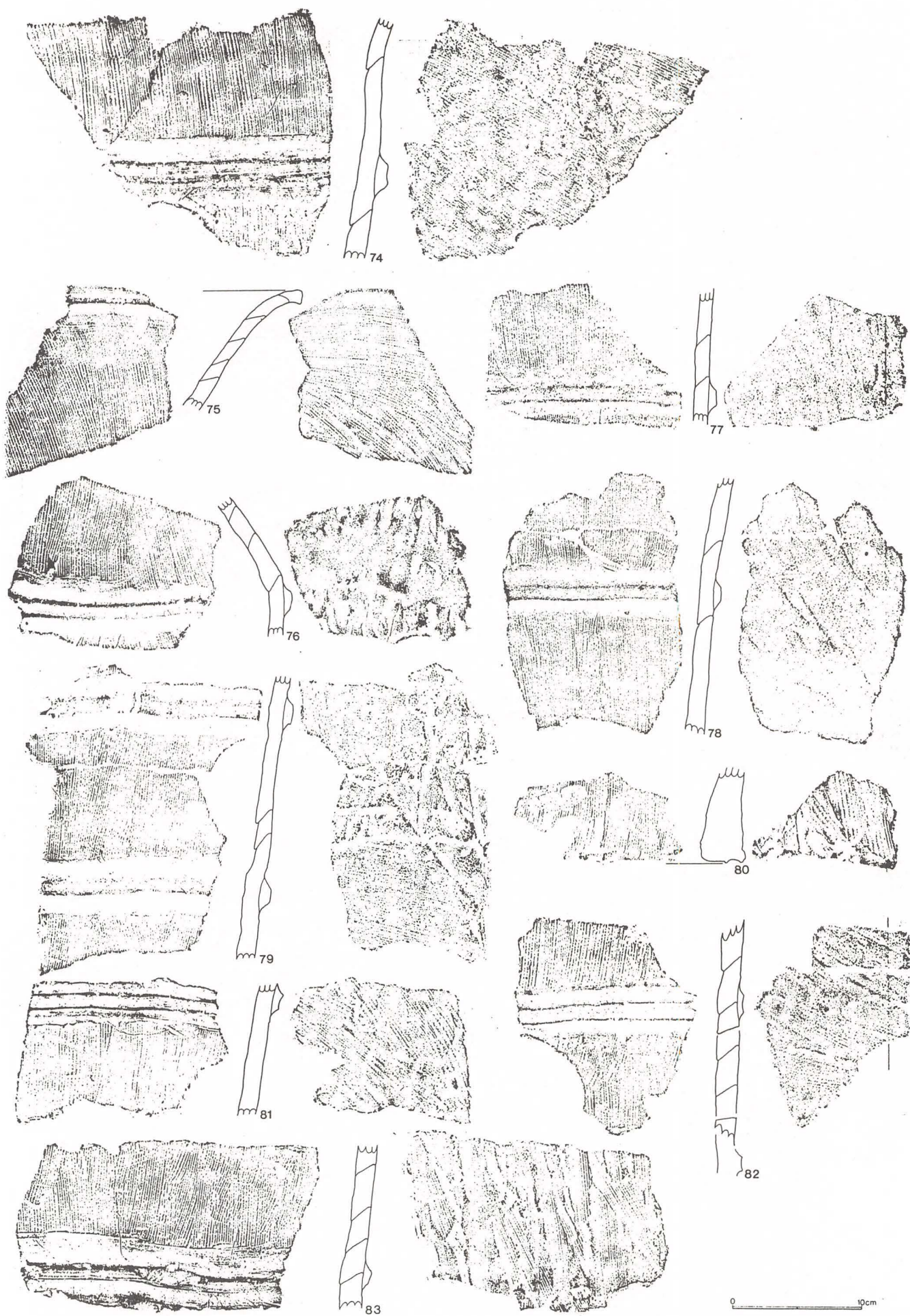
第43図 瓦塚古墳出土遺物7 (平成元年度B・C区・4T) 復原図



第44図 瓦塚古墳出土遺物 8 (平成元年度 4 T 復原図, A 区・1 T 拓影図)



第45图 瓦塚古墳出土遺物9 (平成元年度1T・B区) 拓影图

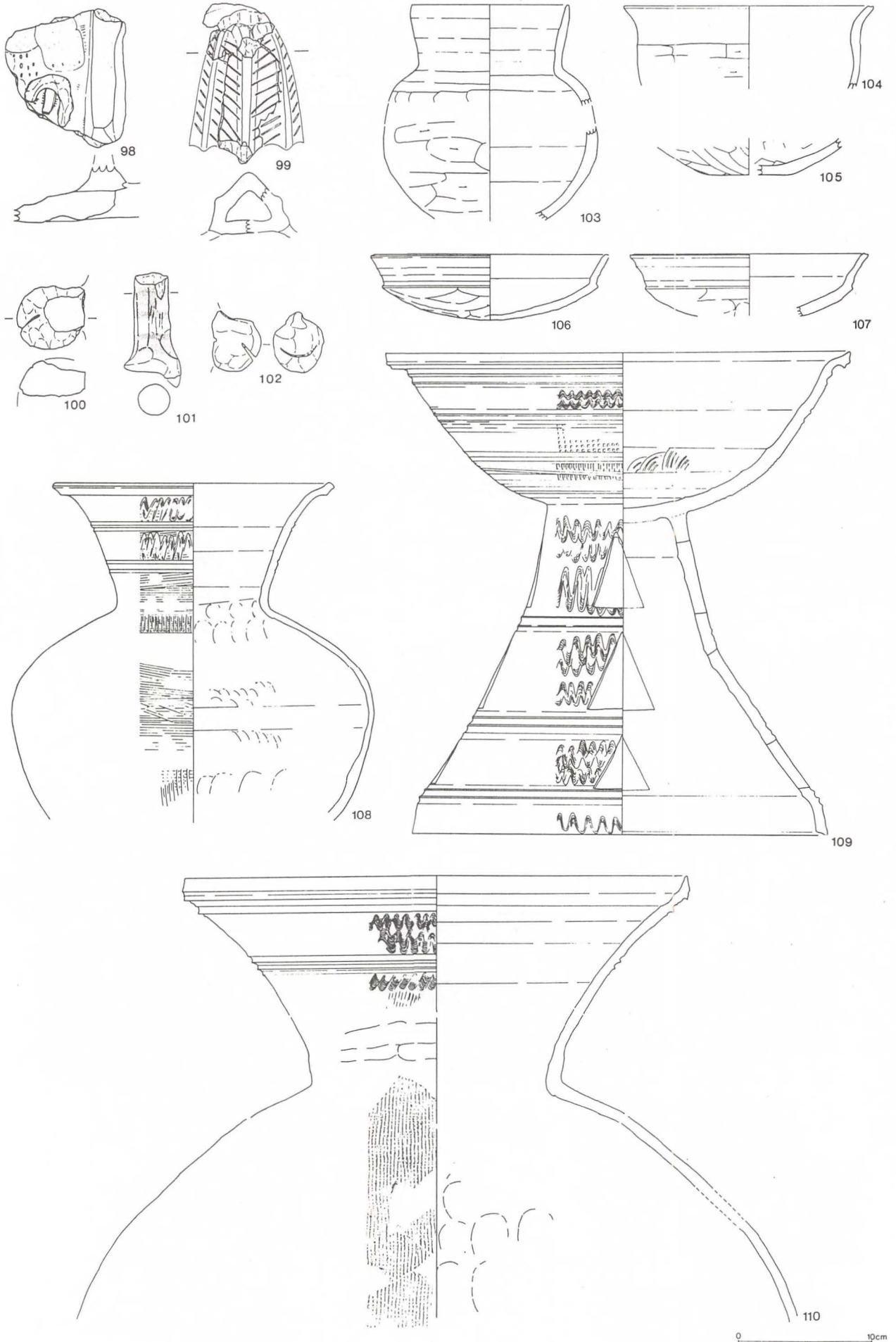


第46图 瓦塚古墳出土遺物10（平成元年度B・C区）拓影图

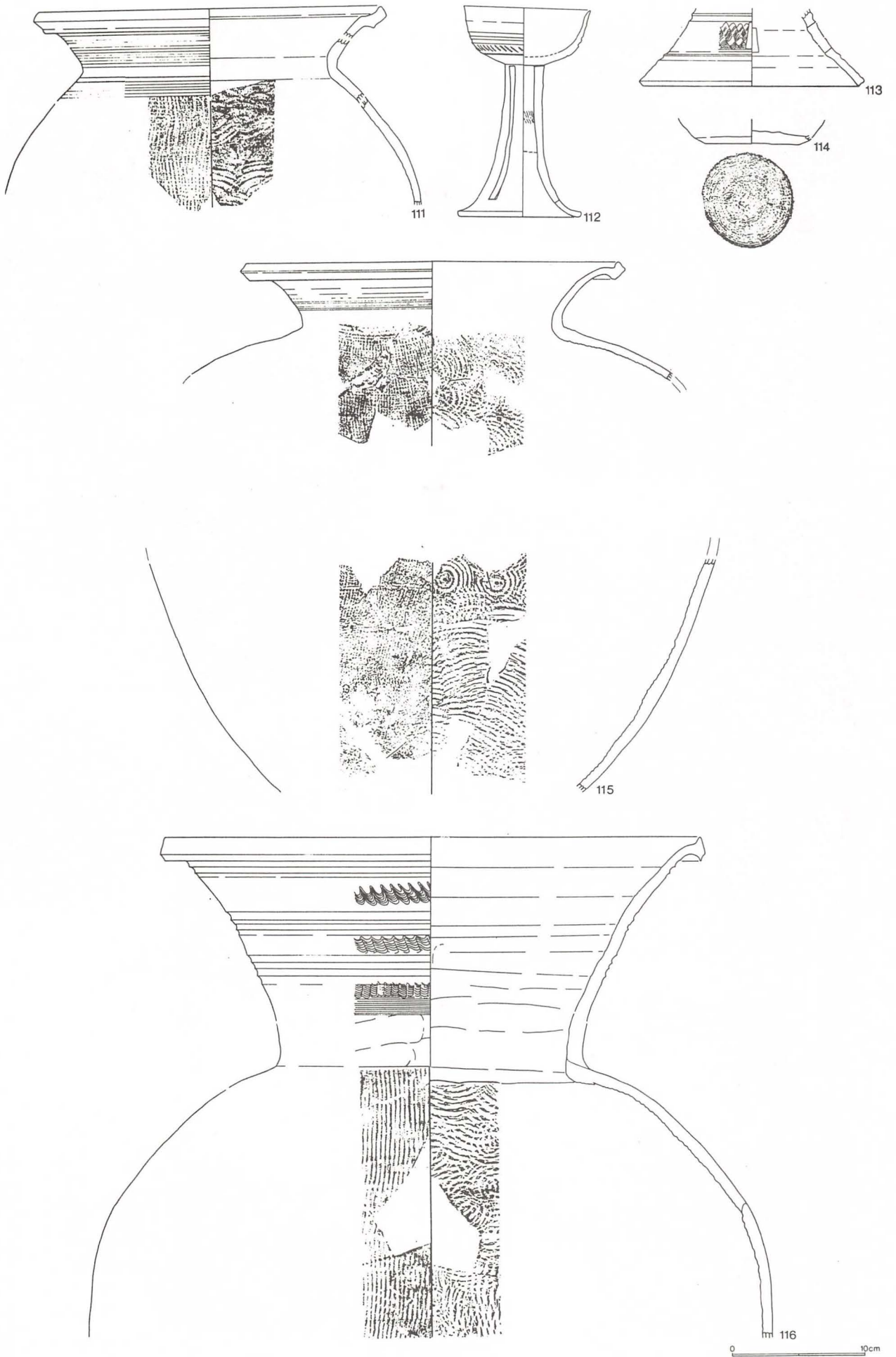


第47图 瓦塚古墳出土遺物11 (平成元年度C区・2~4T) 拓影图

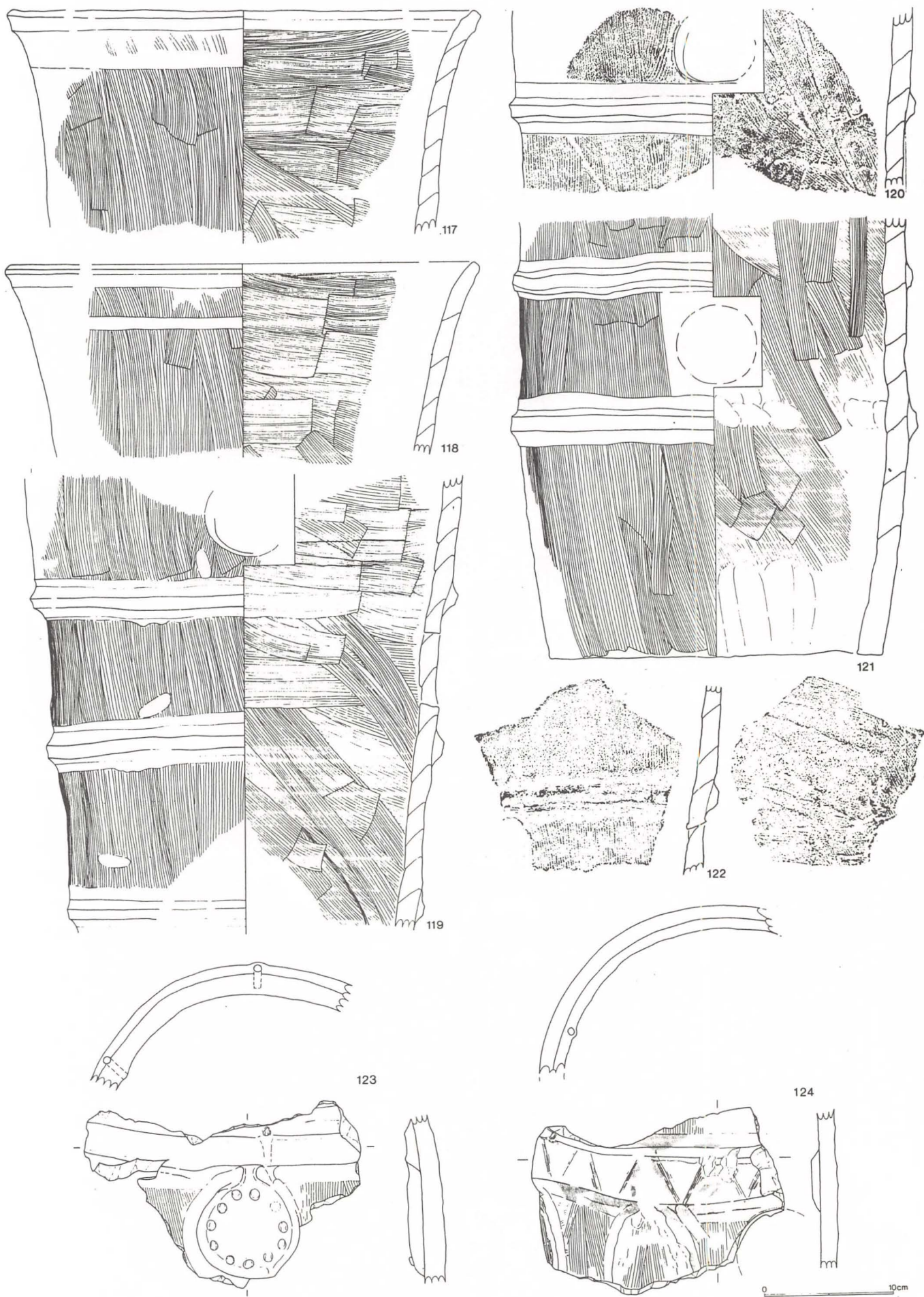




第48図 瓦塚古墳出土遺物12 (平成元年度) 形象埴輪・土師器・須恵器・実測図



第49図 瓦塚古墳出土遺物13（平成元年度）須恵器実測図



第50図 瓦塚古墳出土遺物14 (平成2年度)



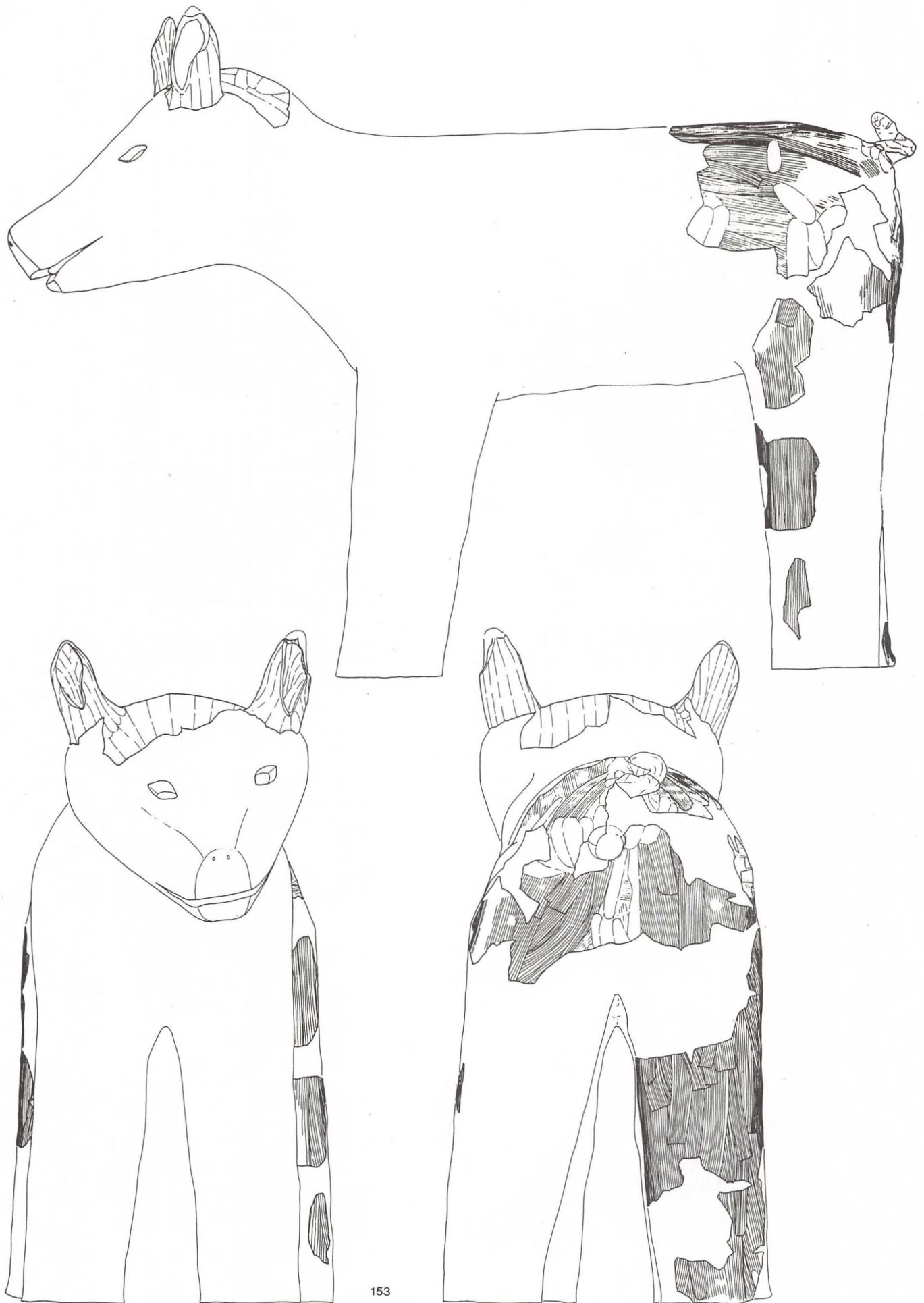
第51図 瓦塚古墳出土遺物15（平成2年度）形象埴輪実測図



152

0 10cm

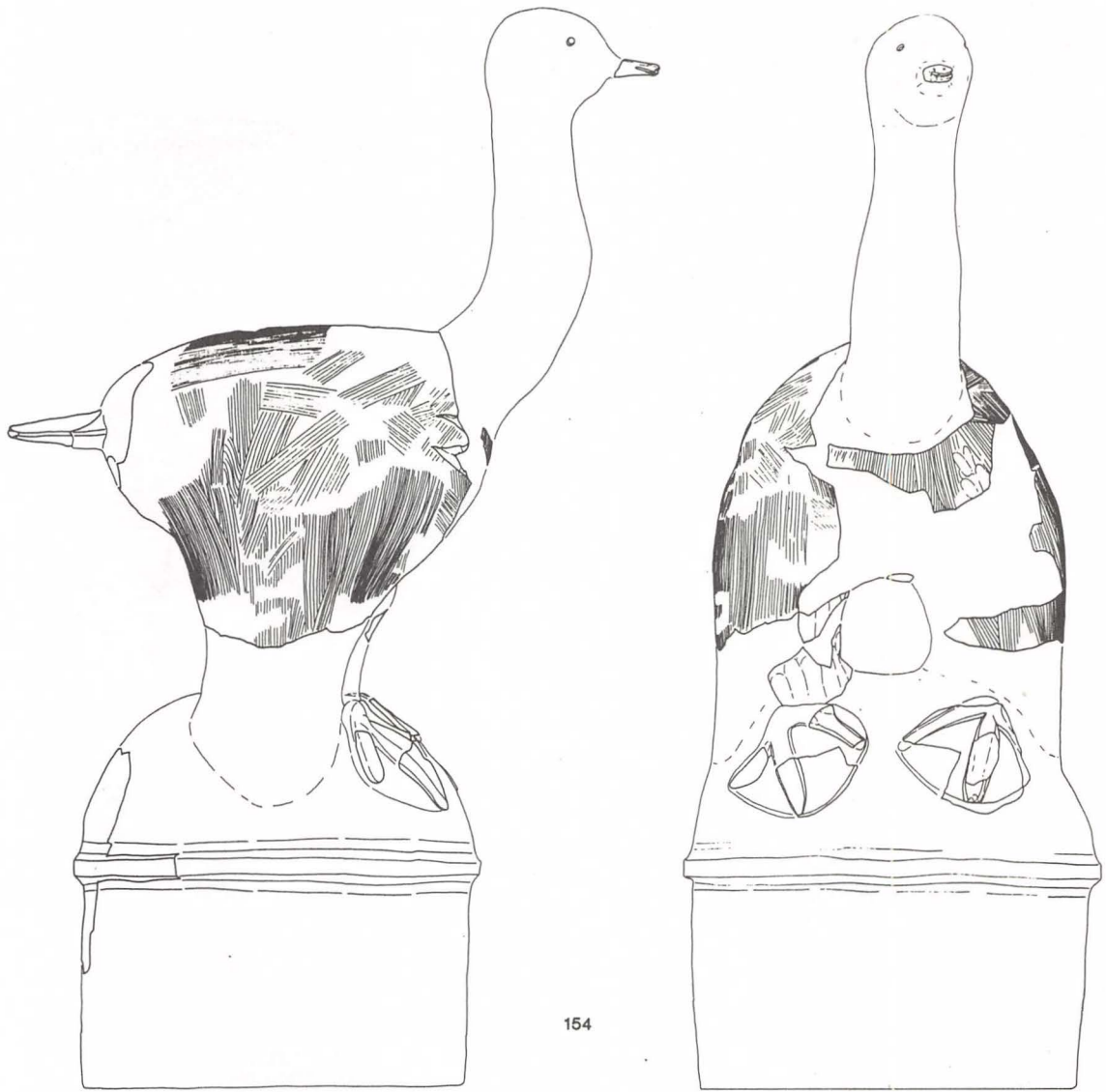
第52図 瓦塚古墳出土遺物16（平成2年度）形象埴輪実測図



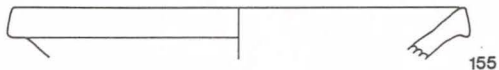
153

0 10cm

第53図 瓦塚古墳出土遺物17（平成2年度）形象埴輪実測図



154



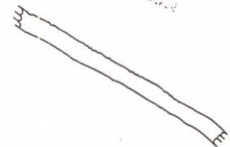
155



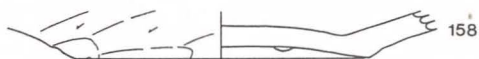
156



157



159

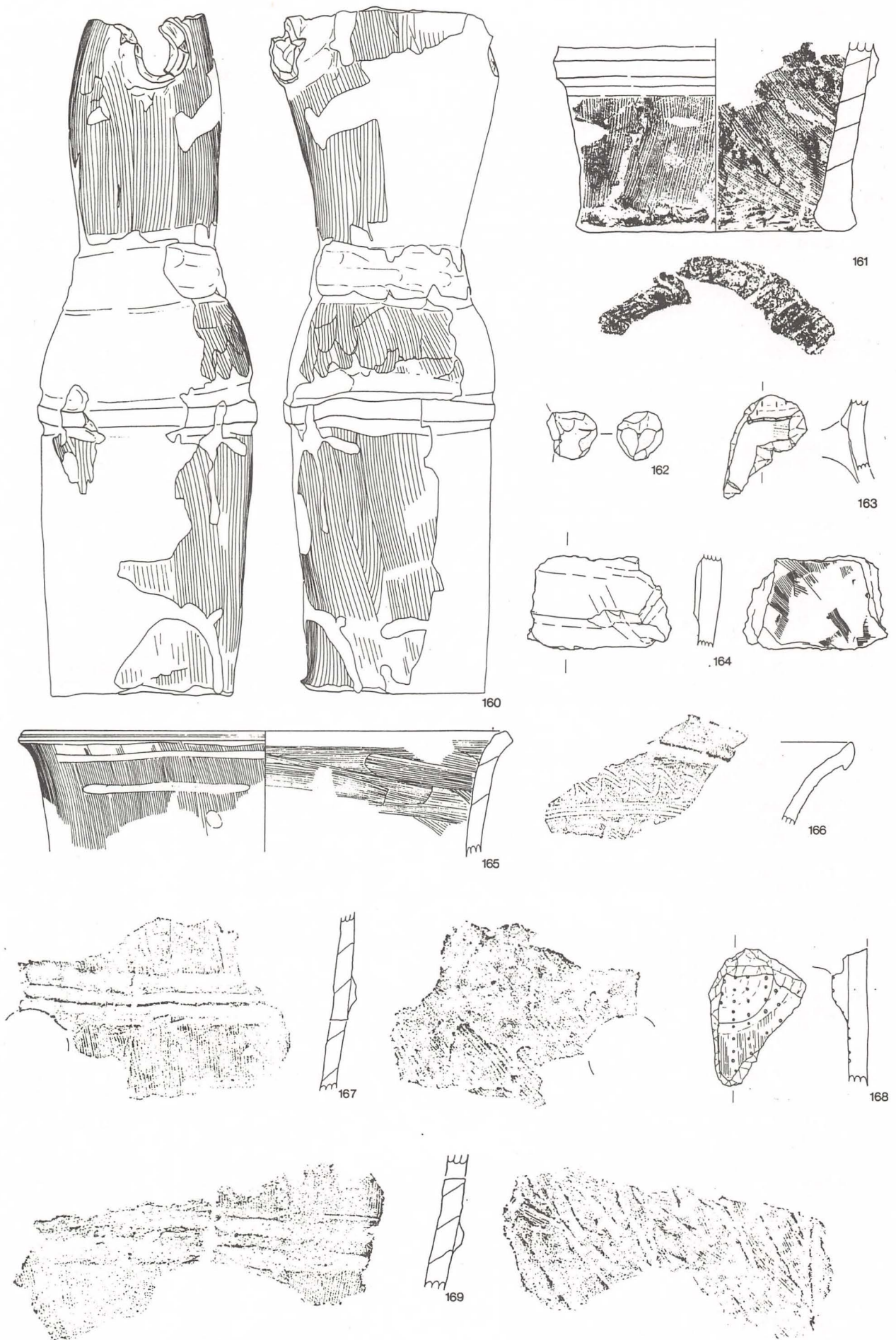


158



0 10cm

第54図 瓦塚古墳出土遺物18 (平成2年度) 形象埴輪・須恵器実測図



第55図 瓦塚古墳出土遺物19 (平成3年度)

0 10cm



# 瓦塚古墳出土遺物観察表

## 凡 例

- 胎土中に含まれる鉱物の名称は次のとおり、略称とした。  
チャート→チ、長石→長、火山ガラス→火、輝石→輝、角閃石→角、雲母→雲、金雲母→金、石英→石、頁岩→頁、凝灰岩→凝、片岩→片、白色軟質粒→白、酸化鉄粒→酸、白色バミヌ→バ、白色針状物質→針、黒色砂粒→黒
- 色調は新版標準土色帖（小山・谷原、二本色研、昭和45年）による。
- ハケメは比較に便利のように、10本あたりの幅（cm）で表示した。
- 平成元年度出土須恵器の一部については、「調査研究報告第3集」に収録したが、本報告書の性格上これを再録した。
- 形象埴輪については、本文中に詳述するので省略した。

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備 考
1	円筒埴輪 B 類	残存高22.0cm。口径37.0cm。外面タテハケ内面口縁部ヨコハケ、他はナナメハケ。口縁端部と凸帯裏部はヨコナデ。凸帯はM字形。透孔は円形で対向して穿たれている。又、透孔とはほぼ直交して内面に×αヘラ記号有り。	チ、石、長、酸、バ、針火 小礫を含む。	普通。 橙 (7.5 YR 6/6)	外1.9 内1.7	昭和63年度 前方部東一括
2	円筒埴輪 A <sub>2</sub> 類	残存高31.0cm。復原体部径30cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯裏面は指オサエの指頭圧痕有り。凸帯は台形が基本形。透孔は現状での3段目に対向して2個穿たれている。	小礫を若干含む。 石、チ、長、バ、酸、火雲	普通。 赤 (10R 5/8) 及び 橙 (5 YR 7/6)	内外 2.0	昭和63年度 前方部南覆土 一括
3	円筒埴輪 B 類	残存高38.0cm。体部径34.0cm。底径26.0cm 外面タテハケ、内面ナナメハケ及び縦位ナデ。透孔は2段目と4段目に対向してそれぞれ2個ずつ穿たれている。凸帯はM字形	石、チ、長、バ、火、酸	普通。浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	内外 1.9	昭和63年度 前方部南東
4	円筒埴輪 A <sub>1</sub> 類	残存高20.0cm。体部径28.5cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ及び凸帯裏面には指頭圧痕有り。凸帯は台形。透孔は現状での3段目に円形に2個対向して穿たれている	石、チ、長、バ、火、雲酸	堅緻。 赤橙 (10R 6/8)	外1.8 内1.5	昭和63年度 前方部南
5	円筒埴輪 A <sub>2</sub> 類	残存高11.5cm。復原底径25.0cm(50%存)。 外面タテハケ、内面斜位ナデ、底端部ヨコナデ。比較的薄い体部である。	小礫を若干含む。 石、チ、長、バ、雲	普通。 橙 (2.5 YR 6/8)	外1.8	昭和63年度 2 T (下)
6	"	残存高22.0cm。復原底径26.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ又はヨコハケ。その後指ナデを凸帯裏面及び底端部に施す。凸帯はM字形。	小礫を多く含む。 石、チ、長、バ、酸、雲火	普通 橙 (2.5 YR 6/8)	外1.6 内2.0	昭和63年度 前方部南
7	"	残存高12.5cm。復原底径23.0cm(60%存)。 外面タテハケ、内面斜位ナデ、一部ナナメハケ。比較的薄い体部である。	石、チ、長、バ、酸	やや軟質。 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.8	昭和63年度 2 T (下)
8	円筒埴輪 A <sub>1</sub> 類	残存高9cm。底径23.3cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ及び底端部は指ナデ。底面籐圧痕有り。	石、チ、長、バ、雲	堅緻。 赤 (7.5 R 4/8)	内外 3.5	"
9	円筒埴輪 B 類	残存高13.5cm。復原体部径27.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯はつぶれたM字形。	小礫を含む。 石、チ、長、酸、火、黒	普通。浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	内外 2.0	昭和63年度 3 T
10	"	残存高15.0cm。復原体部径27.0cm(20%存) 外面タテハケ、内面ナナメハケ及び凸帯裏面ヨコナデ、斜位ナデ。凸帯はつぶれたM字形。透孔は現状での一段目に円形を穿つ	小礫を若干含む。 石、チ、長、火	普通。浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	内外 1.9	"
11	円筒埴輪 A <sub>1</sub> 類	残存高10.0cm。復原底径26.0cm(25%存) 外面タテハケ、内面ナナメハケ及び斜位ナデ。	石、チ、長、バ、黒	堅緻。 赤 (10R 5/8)	内外 1.6	"
12	"	残存高9.0cm。復原底径24.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。	石、チ、長、バ、火、酸	堅緻。 赤 (10R 5/8)	内外 1.6	昭和63年度 後円部東一括
13	円筒埴輪 B 類	残存高16.2cm。復原底径21.0cm。外面タテハケ、内面縦位・斜位ナデ。凸帯は平らなM字形。透孔は2段目に円形を穿つ。	石、チ、長、バ、火、酸	やや軟質。浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	外1.7	昭和63年度 前方部南東
14	円筒埴輪 A <sub>1</sub> 類	残存高12.5cm。復原底径23.0cm(50%存) 外面タテハケ、内面ナナメハケ及び斜位ナデ。	小礫(チャート)を含む 石、チ、長、バ、火、雲黒、酸	普通。 赤 (10R 5/8)	内外 1.7	昭和63年度 3 T
15	"	残存高34.5cm。復原底径33.0cm。外面タテハケ。内面は第1条目凸帯より上はナナメハケ、その他斜位ナデ。底端部ヨコナデ凸帯は台形。透孔は確認できない。	小礫を含む。 石、チ、長、バ、火、雲酸、黒	普通。 赤 (10R 5/8、4/8)	内外 1.8	昭和63年度 前方部南
16	円筒埴輪 口縁部 A <sub>2</sub> 類	残存高13.0cm。復原口径43.0cm。外面タテハケ、内面ヨコハケ及びナナメハケ。内外面ともに口縁端部はヨコナデ。	長、バ、火、酸	普通。 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.7	"

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備 考
17	円筒埴輪 口縁部 B 類	復原口縁部径34.0cm、復原体部径26.0cm。 (25%存)。外面タテハケ、口縁端部はヨコ ナデ。内面ナナメハケ、口縁端部はヨコハ ケ及びヨコナデ。凸帯は台形。	チ、長、石、酸、パ	堅緻 外 橙 (2.5 Y 6/8) 内 橙 (7.5 Y R 7/6)	内外 1.6	平成元年度 A区覆土
18	円筒埴輪 底部 B 類	復原底部径22.0cm、復原体部径22.6cm。 (20%存) 外面タテハケ、内面縦位ナデ及び 一部ナナメハケ。凸帯はM字形。	チ、長、火、石、酸、パ 針	堅緻 外 橙 (2.5 Y R 6/6) 内 橙 (7.5 Y R 7/6)	内外 1.6	平成元年度 A区
19	円筒埴輪 体部B類	復原体部径35.0cm(25%存)。外面タテハケ 内面ナナメハケ。凸帯は台形。	チ、火、酸、パ、黒	堅緻 浅黄橙 (10 Y R 8/3)	内外 1.7	平成元年度 4 T
20	円筒埴輪 口縁部 A <sub>2</sub> 類	復原口縁部径32.0cm。外面タテハケ、内面 ヨコハケ。口縁端部はヨコナデ。	チ、長、火、石、パ	堅緻 橙 (2.5 Y R 6/8)	内外 1.7	平成元年度 1 T A区間ベルト 内堀覆土
21	円筒埴輪 A <sub>2</sub> 類	復原全体高62.0cm、底径21.8cm、復原口縁 径34.5cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ (極めて粗いハケメである。) 透孔は円形 で3段目、4段目に対向して2個ずつあけ られている。底部は粘土圧で厚く、外反し ている。凸帯はややつぶれた台形。	チ、長、火、石、酸、黒	普通(やや軟質) 全体に焼きむらが多い 橙 (5 Y R 7/6)を基調 とし、上方部は赤色 (10 R 5/8)を呈す。	内外 3~3.5	平成元年度 1 T
22	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径26.0cm。外面タテハケ、内面ナ ナメハケ。透孔は現状での2段目、3段目 に対向して90°ずらして穿たれている。凸 帯は台形。	チ、長、火、石、パ、黒	堅緻 赤 (7.5 R 4/8)	外 1.8 内 1.8 3.0	平成元年度 1 T
23	朝顔形 肩部 ~体部 A <sub>1</sub> 類	復原体部径26.0cm。外面タテハケ。内面は ナナメハケの後、縦位ユビナデ(特に肩部 は丁寧)。透孔は現状の2段目、3段目 に対向して2個ずつ穿たれる。凸帯は台形。 ハケ調整、凸帯粘付後タテ方向に生じた亀 裂をユビナデでなおした跡あり。	チ、長、雲、石、パ	堅緻 赤 (10 R 5/8)	内外 1.8	平成元年度 1 T
24	円筒埴輪 体部 B 類	復原体部径22.5cm。外面タテハケ、内面斜 位ユビナデ。透孔は現状の1段目、3段目 に対向して2つずつ穿たれている。凸帯は 平らなM字形。全体に小作りで、極めて直 線的に立ち上がるので朝顔形の可能性あり	チ、長、火、石、酸、パ	普通 橙 (2.5 Y R 7/6)	外 2.0	平成元年度 1 T B区間ベルト
25	円筒埴輪 体部 A <sub>1</sub> 類	復原体部径26.0cm。外面タテハケ、内面ナ ナメハケ。透孔は現状の2段目と3段目に 対向、90°ずらして穿たれている。凸帯は つぶれたM字形。	チ、長、石、雲、パ	極堅緻 赤 (7.5 R 4/8)	外 1.8 内 1.8 3.0	平成元年度 1 T
26	円筒埴輪 体部 B 類	体部径28.5cm。外面タテハケ、内面タテハ ケ及び縦位ユビナデ。透孔は円形。凸帯は 台形。焼けむらが多い。	チ、長、石、酸、パ	やや軟質 浅黄橙 (10 Y R 8/3) 及び一部 赤橙 (10 R 6/8)	内外 1.7	平成元年度 1 T B区間ベルト
27	朝顔形 口縁部 A <sub>2</sub> 類	復原口縁部径41.0cm、復原くびれ部径16cm (33%存)。外面タテハケ、内面ナナメハケ ヨコハケ、ユビナデ。凸帯は台形。	チ、長、石、酸、パ	普通 橙 (2.5 Y R 7/6~6/6)	外 1.8 内 1.8 2.0	平成元年度 1 T B区間ベルト
28	朝顔形 B 類	体部径25cm。外面タテハケ及び肩部ナナメ ハケ。内面はくびれ部より上にナナメハケ 他はユビナデ。透孔は現状の1段・3段目 に対向して円形に穿たれる。凸帯はM字形	チ、長、火、石、酸、パ	普通 浅黄橙 (7.5 Y R 8/6)	内外 2.0	平成元年度 1 T B区間ベルト
29	朝顔形 口縁部 A <sub>2</sub> 類	復原口縁部径56.0cm(20%存)。外面はタテ ハケ、口縁端部はヨコナデ。内面はナナメ ハケ、口縁端部はヨコハケ。凸帯は台形で 裏面に指頭圧痕あり。	チ、長、雲、石、酸、パ	普通 橙 (2.5 Y R 6/8)	内外 1.8	平成元年度 B区内堀 覆土など
30	円筒埴輪 B 類	残存高30.0cm、口径33.8cm。体部径29.0cm 外面タテハケ。内面はほぼ最上凸帯より上 はナナメハケ及び口縁部ヨコナデ。他は縦 位の指ナデ。凸帯はほぼ台形。透孔は現状 での1・2段目にそれぞれ対向して2個穿 たれている。全体的に薄手である。	石、チ、長、パ、火、酸 黒	やや軟質。浅黄橙 (7.5 Y R 8/4)	内外 1.8	平成元年度 1 T B区間 ベルト

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備 考
31	円筒埴輪 A <sub>1</sub> 類	4条凸帯5段構成。全高70.5cm。底径26.5cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。1段目から3段目にかけて、成形途中に一部亀裂が入り、指ナデによって修正している箇所がある。その時亀裂を中心として丁寧に斜位ナデを施しているため、凸帯部は歪んでいる。凸帯はM字形。透孔は3・4段目に若干のずれを伴ってそれぞれ円形に2個対向して穿たれている。	若干の小礫を含む。 石、チ、長、バ、黒	極めて堅緻。 赤 (10R 5/8)	内外 1.7	平成元年度 B区くびれ部
32	朝顔形 頸部 B 類	残存高16.0cm。復原頸部径16.0cm(30%存) 外面タテハケ、内面ナナメハケ、ヨコナデ斜位ナデ。凸帯はつぶれた台形。	石、チ、長、バ、火、酸	やや軟質。 淡橙 (5YR 8/4) 橙 (2.5YR 6/6)	内外 2.0	平成元年度 B区拡張区
33	円筒埴輪 A <sub>2</sub> 類	残存高24.0cm。口径34.0cm。体部径30.8cm(30%存)。外面タテハケ、内面ヨコハケ、ナナメハケ。内外面ともに口縁端部ヨコナデ。又、凸帯裏面には指頭圧痕有り。凸帯はつぶれたM字形。透孔は現状での2段目に円形を穿つ。	石、チ、長、バ、酸、黒	やや軟質。 橙 (2.5YR 6/8)	外 1.2 内 1.6	平成元年度 B区
34	円筒埴輪 B 類	残存高13.0cm。復原体部径26.0cm(30%存) 外面タテハケ、内面ヨコハケ。凸帯は台形透孔は現状の2段目に円形を穿つ。	石、チ、長、酸、黒	やや軟質。にぶい橙 (5YR 7/4)	内外 1.7	平成元年度 B区
35	"	残存高9.5cm。復原低部径34.0cm(50%存) 外面タテハケ、内面斜位ナデ、ヨコナデ。凸帯は台形。	小礫を含む。 石、チ、長、バ、火	普通。浅黄橙 (10YR 8/4)	外 2.4	"
36	"	残存高11.5cm。復原低部径24.0cm(25%存) 外面タテハケ、内面縦位ナデ、一部ナナメハケ。低端部ヨコナデ。	石、チ、長、酸、バ 小礫を若干含む。	やや軟質。浅黄橙 (7.5YR 8/4)	外 1.7 内 2.0	"
37	朝顔形 頸部 A <sub>2</sub> 類	残存高20.0cm(30%存)。復原頸部径17.0cm 外面ナナメハケ、内面ナナメハケ及び斜位ナデ。凸帯はややつぶれた台形。	石、チ、長、バ、火、黒 小礫(チャート)を含む	堅緻。 橙 (5YR 6/8)	内外 1.7	平成元年度 B区内掘覆土
38	円筒埴輪 A <sub>1</sub> 類	残存高8.1cm。復原低部径24.6cm(30%存) 外面タテハケ、内面ナナメハケ、基底部木理圧痕	砂礫を多量に含む。 石、チ、角、バ、長	堅緻。焼けムラ有り。 赤 (10R 4/8)	外 1.8 内 3.3	平成元年度 B区
39	円筒埴輪 A <sub>2</sub> 類	復原体部径35.0cm(25%存)。外面タテハケ 内面ナナメハケの後、部分的にタテハケ。 最上段に円形の透孔が残る。凸帯は水平に貼られておらず、台形。	砂礫をやや多く含む。 長、チ、バ、火、酸	普通。 橙 (7.5YR 7/6)	外 1.5 内 1.4	平成元年度 B区内掘覆土
40	"	残存高16.0cm。復原体部径32.0cm(30%存) 外面タテハケ、内面ヨコ・タテハケ及び斜位ナデ。凸帯は台形。透孔は現状での3段目に円形を穿つ。	小礫(チャート)を含む 石、チ、長、バ、火	普通。 橙 (2.5YR 6/6)	内外 1.6	平成元年度 B区
41	"	残存高11.6cm。復原体部径31.6cm(25%存) 外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形	石、チ、長、酸、角	極めて堅緻。 橙 (5YR 6/8)	外 1.7 内 1.9	"
42	円筒埴輪 B 類	残存高19.0cm。体部径23.5cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形。透孔は現状での2段目に円形を穿つ。	石、チ、バ、長、火、酸	普通。浅黄橙 (10YR 8/4)	内外 2.1	平成元年度 F・Cベルト F区
43	円筒埴輪 A <sub>2</sub> 類	残存高20.0cm。復原体部径29.5cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形。透孔は現状の1段目に円形を穿つ。	石、チ、長、バ、雲、火、酸	堅緻。 橙 (2.5YR 6/8)	内外 1.7	平成元年度 F区
44	円筒埴輪 A <sub>1</sub> 類	残存高15.5cm。復原底部径22.0cm。外面タテハケ、内面斜位ナデ及び一部ナナメハケ 底端部ヨコナデ。凸帯は台形。透孔は2段目に円形を穿つ。	石、チ、長、バ、火、雲	極めて堅緻。 赤 (10R 5/8)	内外 1.8	平成元年度 F区SK-1
45	"	残存高18.5cm。復原底部径25.6cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ及びヨコハケ。凸帯は台形を基本とするが沈線がめぐる。透孔は2段目に円形を穿つ。	石、チ、長、バ、火、雲、酸	極めて堅緻。 赤 (10R 5/8)	外 1.8 内 2.1	平成元年度 F区表土 C区
46	円筒埴輪 底部 A <sub>2</sub> 類	復原底部径21.4cm、復原体部径24.5~30cm 外面タテハケ、内面ナナメハケ後第1段部分はユビナデ。透孔は円形。比較的上方へ外反している。凸帯は台形。	チ、長、火、雲、石、バ	堅緻。 橙 (2.5YR 6/6)	内外 1.8	平成元年度 F区SK-1

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備考
47	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径25.0cm。外面タテハケ（一部ナメハケ）、内面ナメハケ。凸帯は台形（透孔は確認できず）。	チ、長、火、雲、石、パ	堅緻。 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.7	平成元年度 F・Cベルト
48	円筒埴輪 底部 A <sub>1</sub> 類	復原底部径24.0cm。外面タテハケ、内面ナメハケ。低端部に木理圧痕あり。52と近似（同一個体の可能性あり）。凸帯はM字形。	チ、長、火、石、パ	極堅緻（ただし風化がひどい） 赤 (7.5 R 4/8)	内外 1.6	平成元年度 C区
49	円筒埴輪 口縁部 A <sub>1</sub> 類	復原口縁部径39cm、復原体部径34cm。外面タテハケ、内面ヨコハケ及びナメハケ、一部ナデ。凸帯は平らなM字形。	チ、長、火、雲、石、パ	堅緻 赤 (10R 5/8)	内外 1.6	平成元年度 C区SD-1 墳丘覆土
50	円筒埴輪 体部B類	復原体部径32.0cm(16.5%存)。外面タテハケ、内面ナメハケ。凸帯は台形。	全体的に砂粒少。 チ、火、石、酸、パ、黒	普通 浅黄橙 (10 YR 8/3)	内外 1.7	平成元年度 4T外堀中堤
51	円筒埴輪 底部 B類	復原底部径29.0cm、復原体部径30.0cm(16.5%存)。外面タテハケ、内面ナメハケ。凸帯は台形。	全体的に砂粒少。 チ、火、雲、石、パ、黒	普通 浅黄橙 (10YR 8/3)	内外 1.8	平成元年度 4T
52	円筒埴輪 体部 A <sub>1</sub> 類	復原体部径25.0cm(33%存)。外面タテハケ内面ナメハケ。透孔は円形。凸帯はM字形。	チ、長、火、石、パ、黒	普通 赤 (10R 5/8)	内外 1.5	平成元年度 A区覆土
53	円筒埴輪 底部 B類	復原底部径28.0cm、復原体部径31.0cm(33%存)。外面タテハケ、内面ナメハケ。凸帯は台形。	全体的に砂粒少。 チ、火、石、酸、パ、黒	普通 浅黄橙 (10 YR 8/3)	内外 1.7	平成元年度 4T内堀 中堤寄り
54	円筒埴輪 底部 B類	復原底部径32.0cm、復原体部径36.0cm(20%存)。外面タテハケ、内面ナメハケ。底端部に木理圧痕。凸帯は台形。全体的に丁寧な作りである。	砂粒は全体に少ない。 チ、火、雲、石、パ、黒	普通 浅黄橙 (10 YR 8/3)	内外 1.7	平成元年度 4T
55	"	復原底部径30.0cm(25%存)。外面タテハケ内面ナメハケ。凸帯は台形。	砂粒は全体に少ない。 チ、火、石、酸、パ、黒	普通 浅黄橙 (10 YR 8/3)	内外 1.7	平成元年度 4T
56	円筒埴輪 口縁部 A <sub>2</sub> 類	復原口縁部径37.0cm(20%存)。外面タテハケ、内面ヨコハケ。口縁端部はヨコナデ。	チ、長、火、石、酸、パ	普通 橙 (2.5 YR 7/6)	内外 1.8	平成元年度 A区
57	円筒埴輪 体部 A <sub>1</sub> 類	復原体部径32.0cm。外面タテハケ、内面ナメハケ及び斜位ナデ。透孔は円形。凸帯はつぶれたM字形。	小礫を若干含む。 チ、長、石、酸	やや軟質 橙 (5 YR 7/6)	"	"
58	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径24.0cm。外面タテハケ、内面ナメハケ及び縦位ナデ。透孔は方形。凸帯は台形。	チ、長、石、酸、黒	やや軟質 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.6	平成元年度 A区覆土
59	円筒埴輪 底部 A <sub>2</sub> 類	復原底部径22.0cm。外面タテハケ、内面ナメハケ及び斜位ナデ。	チ、長、火、石、酸、パ	堅緻 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.7	平成元年度 1T B区間ベルト
60	円筒埴輪 口縁部 B類	復原口縁部径45.0cm。外面はタテハケ、口縁端部はヨコナデ。内面はヨコハケ後、ヨコナデ。	チ、長、火、雲、石、酸 針、パ	やや軟質 浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	内外 2.6	平成元年度 1T
61	円筒埴輪 体部 A <sub>1</sub> 類	復原体部径24.0cm。外面タテハケ、内面ナメハケ。凸帯はM字形。	チ、長、火、石、パ、黒	極堅緻 赤 (10R 4/8)	内外 3.3	平成元年度 1T 中位表土
62	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径25.0cm。外面タテハケ、内面斜位ナデ、一部ナメハケ。透孔は円形。凸帯は台形。	チ、長、火、雲、石、酸 パ	普通 橙 (2.5 YR 7/6)	内外 1.7	平成元年度 1T
63	円筒埴輪 体部 A <sub>1</sub> 類	残存高14.0cm。復原体部径26.0cm。外面タテハケ、内面ナメハケ。凸帯はM字形。透孔は現状の2段目に円形を穿つ。又、乾燥時の亀裂を直した指ナデ痕有り。	石、長、チ、パ、火、雲	堅緻 赤 (7.5 R 4/8)	外 1.9 内 3.8	平成元年度 1T
64	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	残存高11.0cm。復原体部径30.0cm。外面タテハケ、内面タテハケ。凸帯は台形。透孔は現状での2段目に円形を穿つ。	小礫を若干含む。 石、長、チ、パ、火、酸	普通 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.7	"
65	円筒埴輪 体部 A <sub>1</sub> 類	残存高10.0cm。外面タテハケ、内面ナメハケ。凸帯はM字形。透孔は現状での2段目に円形を穿つ。	石、長、チ、パ、火	堅緻 赤 (10R 5/8)	外 1.7 内 1.7 粗 3.0	平成元年度 1TB区間ベ ルト

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備考
66	〃	残存高10.0cm。復原体部径22.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯はM字形。	石、長、チ、バ、火	極めて堅緻 赤 (7.5 R 4/8)	外 3.5 内 1.8	平成元年度 1 T
67	朝顔形 頸部 A <sub>2</sub> 類	残存高8.0 cm。外面タテハケ、内面ヨコハケ及び指ナデ。凸帯は台形。	石、長、チ、バ、火、酸	普通 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.8	〃
68	円筒埴輪 体部 B 類	残存高10.0cm。復原体部径30.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形。透孔は現状での1段目に円形を穿つ。	石、長、チ、バ、酸、針	普通。にぶい黄橙 (10YR 7/3)	内外 1.7	〃
69	朝顔形 頸部 A <sub>1</sub> 類	残存高7.5 cm。復原頸部径18.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ及びナデ。凸帯は台形。	石、長、チ、バ、火	堅緻 赤 (7.5 R 4/8)	内外 1.7	〃
70	円筒埴輪 底部 A <sub>2</sub> 類	残存高9.0 cm。復原底部径26.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ、底部付近はヨコナデ。	石、長、チ、バ、火	堅緻 橙 (2.5 YR 7/6)	内外 1.8	平成元年度 1 T B区間ベ ルト
71	円筒埴輪 底部 A <sub>1</sub> 類	残存高13.0cm。復原底部径20.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。底端部の内面には木理圧痕らしいものがある。	石、長、チ、バ、火、黒	極めて堅緻 赤 (7.5 R 4/8)	外 1.8 内 3.0	平成元年度 1 T
72	円筒埴輪 底部 B 類	残存高19.0cm。復原底部径26.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ、ナデ。凸帯は台形。	石、長、チ、バ、火	やや軟質。浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	内外 1.7	〃
73	円筒埴輪 口縁部 A <sub>1</sub> 類	残存高9.5 cm。復原口径38.0cm(20%存) 外面タテハケ、内面ヨコハケ。内外面ともに口縁端部はヨコナデ。	石、長、チ、バ、黒	普通 赤 (10R 5/6)	内外 1.7	平成元年度 B区
74	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径42.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形。凸帯下段透孔あり	チ、長、角、石、酸	極堅緻 明赤褐(2.5YR 3/6)	内外 1.7	平成元年度 B区
75	朝顔形 口縁部 A <sub>2</sub> 類	復原口縁部径33.0cm(10%存)。外面タテハケ、内面ナナメハケ。口縁端部はヨコナデ	チ、長、火、石、バ	普通 橙 (2.5 YR 7/6)	内外 1.8	〃
76	朝顔形 肩部 A <sub>2</sub> 類	復原肩部径32.0cm(10%存)。外面タテハケ凸帯上方は2次調整でタテハケ、内面縦位ナデ。凸帯は台形。	チ、長、火、雲、石、黒	普通 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.7	〃
77	円筒埴輪 体部B類	復原体部径26.0cm(14%存)。外面タテハケ内面縦位ナデ。凸帯は台形。	チ、長、石、酸、バ、黒	やや軟質 浅黄橙(10 YR 8/3)	〃	〃
78	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形。	74と共通 (量は多い。)	堅緻 橙 (5 YR 6/8)	内外 1.6	〃
79	〃	外面タテハケ、内面ナナメハケ。透孔は円形。凸帯は台形。	〃	極堅緻 明赤褐 (5 YR 5/8)	外 1.4 内 1.7	〃
80	円筒埴輪 底部 A <sub>1</sub> 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。底面は部厚く、竹管の圧痕が深くつく。	74と共通	極堅緻 赤 (10R 4/6)	外 1.6 内 2.6	平成元年度 B区集石
81	円筒埴輪 体部 A <sub>1</sub> 類	復原体部径24.6cm(20%存)。外面タテハケ内面ナナメハケ。凸帯はM字形。	長、角、輝、石、バ	極堅緻 赤 (10R 4/6)	外 1.7 内 1.6 2.7	平成元年度 B区
82	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径31.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。透孔は円形。凸帯は平らなM字形。	チ、長、火、雲、石、バ	普通 外 橙 (2.5 YR 6/8) 内 浅黄橙 (10 YR 8/4)	内外 1.6	平成元年度 C区
83	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径26.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形。	〃	堅緻 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.7	平成元年度 C区覆土
84	円筒埴輪 底部 A <sub>2</sub> 類	復原底部径23.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯はM字形。	チ、長、火、石、バ、黒	堅緻 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.5	平成元年度 C区

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備考
85	円筒埴輪 体部 A <sub>1</sub> 類	復原体部径24.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。透孔は円形。凸帯は平らなM字形。	チ、長、雲、石、バ	極堅緻 赤 (7.5 R 4/8)	内外 2.6	平成元年度 C区覆土
86	円筒埴輪 底部 A <sub>1</sub> 類	復原低部径20.0cm。外面タテハケ、内面斜位ナデ（一部ナナメハケ）。凸帯は台形。	チ、長、火、石、バ	堅緻 赤 (10R 4/8)	内外 1.6	平成元年度 C区
87	円筒埴輪 口縁部 B 類	復原口縁部径36.0cm (5%存)。外面タテハケ、内面ヨコハケ及びナナメハケ。	火、石、バ、黒	普通 浅黄橙 (10 YR 8/4)	内外 1.7	平成元年度 4 T
88	円筒埴輪 口縁部 A <sub>2</sub> 類	外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。口縁端部ヨコナデ。	小礫を含む。 チ、長、火、雲、石、バ	普通 橙 (2.5 YR 7/6)	内外 1.7	平成元年度 2 T内堀
89	円筒埴輪 口縁部 B 類	外面タテハケ、内面ヨコハケ。口縁端部はヨコナデ。内面にヘラ記号(×印)の一部がある。	チ、長、火、石、酸、バ	普通 浅黄橙 (2.5 YR 8/4)	内外 1.8	平成元年度 3 T表土
90	円筒埴輪 口縁部 A <sub>2</sub> 類	復原口縁部径32.0cm。外面タテハケ、内面ヨコハケ及びヨコナデ。	チ、長、火、石、バ	普通 橙 (2.5 YR 6/6)	内外 1.5	平成元年度 2 T内堀
91	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径25.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ及び縦位ナデ。透孔は円形。凸帯はM字形。	チ、長、火、石、酸、バ	普通 外 橙 (2.5 YR 7/6) 内 浅黄橙 (7.5 YR 8/3)	外 1.6 内 1.8	〃
92	円筒埴輪 体部B類	復原体部径24.0cm。外面タテハケ、内面斜位ナデ。凸帯は台形。	小礫を含む。 チ、長、火、石、酸、バ	普通 浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	外 1.8	平成元年度 3 T内堀
93	円筒埴輪 底部B類	復原低部径16.0cm。外面タテハケ、内面斜位ナデ。	チ、長、火、雲、石、酸 バ	堅緻 橙 (5 YR 7/6)	〃	〃
94	円筒埴輪 底部 B 類	復原体部径23.0cm。外面タテハケ、内面ヨコ及び斜位のナデ。透孔は円形。凸帯は台形。	小礫を含む。 チ、長、火、雲、石、酸 バ	〃	〃	〃
95	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径30.0cm(10%存)。外面タテハケ内面ナナメハケ、ヨコハケ。透孔は円形。凸帯はつぶれたM字形。	チ、長、石、酸、バ、黒	堅緻 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.4	平成元年度 4 T
96	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径28.0cm(10%存)。外面タテハケ内面タテハケ及びナナメハケ。透孔は円形凸帯はつぶれた台形。	チ、長、火、石、バ、黒	堅緻 橙 (2.5 YR 6/8)	内外 1.4	平成元年度 4 T
97	円筒埴輪 底部B類	復原低部径40.0cm。外面ナナメハケ、内面ナナメハケ及びヨコナデ。凸帯は台形。	小礫(石英)を多く含む 長、石、バ	極堅緻(須恵質) 褐灰 (10YR 5/1)	内外 1.9	平成元年度 4 T
103	土師器 形 (精製)	体部は外面横位ヘラケズリ、内面ナデ(乾燥の進んだ状態でナデているためキメが細かい)。頸~口縁部はヨコナデ(皮革使用のためと思われるあらい条線あり)。口縁部は直立気味。口縁端部は尖る。	砂粒は極少量で、精良。 角、石	堅緻 淡黄 (2.5 Y 8/3)		平成元年度 造出し
104	土師器 鉢	復原口縁部径18.8cm(図示上の25%存)。外面は上半ヨコナデ、下半ケズリ後ナデ。内面は上半ヨコナデ、下半ナデ。口縁端部にわずかな凹みあり。口縁部に若干の煤の付着及び外面に指紋あり。	礫を少量含む。 石	堅緻 橙 (5 YR 6/6)		平成元年度 F区
105	土師器 坏低部	復原低径6.0cm(25%存)。外面はケズリ、内面はヘラナデ後ナデ。外面低部に黒斑あり。	礫を微量含む。	堅緻 橙 (5 YR 6/6)		〃
106	土師器 坏 (精製)	体部は外面全面ヘラケズリ(一定方向)。内面ナデ。内面にはブラシ状工具の庄痕あり。外面黒斑あり。口縁端部は平坦面をなし、体部との境に明瞭な段をもつ。	極精良。礫を含まず、微砂粒を少量含む。	極堅緻 乳白色に近い淡褐		平成元年度 造出し屈曲 部下場
107	土師器 坏	口縁部回転ヨコナデ。体部底面ナデ、外面全面ヘラケズリ。口縁端部はわずかに凹む平坦面をもつ。	精良。 細砂を少量含む。	極堅緻 外 淡灰褐 内 淡褐		〃

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備考
108	須恵器 小型甕	体部は外面縦位平行タタキの後カキメ調整 内面には無文当て具痕が残る。口頸部は外 面カキメ調整、内面横位回転ナデ。施文順 位は2条1組の凹線を2段巡し→上・中段 に波状文→ピッチの急な、雑な施文。極め て薄手の作り、端部に段をもつ。	砂粒をほとんど含まず。 精良。長石粒（モンモリ ナイト）をわずかに含む	堅緻 外 緑黒（5 G 2/1） のガラス釉出。一部淺 黄（5 Y 7/3）の灰被り 内、外面と共通。明オ リーブ灰色の灰を駐点 状に被る。 器肉 明赤灰 （5 R 4/1）		平成元年度 造出し
109	須恵器 器台	脚部は回転ヨコナデ、受部は外面カキメ、 内面回転ヨコナデ。受部はタタキ成形、底 部にもタタキ、脚部とは別体製作。脚部は 下端の波状文、調整から倒立して製作した ものと思われる。3条の沈線による相対的 凸帯により区画した文様帯内に揃描き波状 文を施文。口縁部のは丁寧だが、脚部 のものは谷が多くスピードのある雑な施文 透孔は三角形四方透し、直列式配置。	精選。砂礫はほとんど含 まない。	堅緻 伏せ焼きのため受部外 面には黒褐の自然釉出 外 多くは黒 内 暗青灰		平成元年度 造出し
110	須恵器 大甕	体部は外面木目に直交した刻みの平行タタ キ（主に縦位）、内面無文当て具使用後ナ デ、口縁部は外面（頸部）は平行タタキ後 横位回転ナデ、内面横位回転ナデ。口縁部 は外反端部は垂直に鋭くつまみあげる。鋭 い凸線により文様帯を区画。上段はピッチ のゆるい、下段はN字形の波状文を施す。	精良。砂粒を含まない。 白色微粒子、アンモリナ イトを微かに含む。	堅緻 <口縁部> 外 青黒（5 B G 2/1） のガラス釉出。光沢あ り。 内 灰オリーブ（7.5 Y 6/2）の灰被り <体部> 外 明青灰（5 B G 7/1）～暗灰（N3/）の ガラス釉出。光沢面内 灰（N5/） <器肉> 暗紫灰（5 R P 4/1）		平成元年度 C区、F区
111	須恵器 甕	外面木目に直交する刻みの平行タタキ後、 カキメ。内面同心円当て具痕を反スリケン 口内面内面回転ヨコナデ。部分的に暗灰色 ガラス釉出。口縁部内面灰白色（7.5 Y 8/2） の灰被り。口縁部は外反して端部は段をも つ。内側の稜をつまみあげる。	砂粒を含まず精良。 モンモリナイト、白色微 粒子を微かに含む。	堅緻 内外 灰（N 6/） 器肉 赤灰（5 R 6/1） 体部外面 灰褐 （7.5 Y R 4/2）のガラ ス光沢面あり。		平成元年度 C区、F区
112	須恵器 高坏	坏部回転ヨコナデ。脚部は外面カキメ、内 面ヨコナデ調整（シボリ目が部分的に残 る。）これと胎土、焼成の酷似する脚部片 あり、もう1点長脚有段高坏があったと思 われる。	粗砂を少量含む。	堅緻 青灰（断面セピア）		平成元年度 造出し 昭和57年出 土品とも接合
113	須恵器 脚付壺 脚部	2条の沈線により造り出した凸帯の間を文 様帯とし、小型器台が子技壺などの台の可 能性有	精選 砂粒を含まず、白色微粒 子と雲母微粒を少量含む	極堅緻 外 青灰 器肉 灰		平成元年度 C区内堀
114	須恵器 坏底部	底部糸切り放し後、周縁部回転ヘラケズリ 胎土から南比企産と思われる。	モンモリナイトを多量に 含む。石、針	堅緻 灰（N 6/）		平成元年度 B区
115	須恵器 甕	体部は外面格子目状タタキ後部分的にヨコ ナデ、内面同心円当て具痕。口縁部は外面 ヤキメ、内面回転ヨコナデ。装飾はないが 良質。	砂粒はほとんど含まず。 モンモリナイトを少量含 む。	堅緻 内外 青灰 （5 B G 6/1） 器肉 紫灰 （5 R P 5/1）		平成元年度 造出し
116	須恵器 大甕	口縁部回転ヨコナデ。体部は外面木目に直 交する刻みをもつ縦位の平行タタキ、内面 同心円当て具痕。口縁部は端部を上下につ まみだし拡張。頸部は外反。3条1組の凹 線により3段に区画。ピッチ、施文法の異 なる波状文を施す。頸部付近のカキメも、 装飾として用いられている。	砂粒を含まず精良。 モンモリナイトと白色微 粒子を微かに含む。	極堅緻 <口縁部> 外 黒（N 2/）のガラ ス釉出。 内 淡黄（7.5 8/3）の 灰被り。 器肉 灰（N 4/） <体部> 外 青灰（5 B 6/）		昭和57年度 及び 平成元年度 造出し
117	円筒埴輪 口縁部 A <sub>2</sub> 類	復原口縁部径37.0cm(20%存)。外面タテハ ケ、内面ヨコハケ、ナナメハケ。口縁端部 はヨコナデ。	チ、長、火、石、酸、バ 黒	やや軟質 橙（5 Y R 7/6）	内外 1.8	平成2年度 A区内堀

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備考
118	円筒埴輪 口縁部 A <sub>2</sub> 類	復原口縁部径37.0cm(33%存)。外面タテハケ、内面ヨコハケ。口縁端部ヨコナデ。	チ、長、石、酸、バ	普通(外面やや軟質) 橙(5 Y R 7/6)	内外 2.0	平成2年度 A区内堀
119	円筒埴輪 体部 B 類	復原体部径31cm(33%存)。外面タテハケ、内面ナナメハケ。透孔は円形、対向して2つずつ穿つ。凸帯は台形。	長、火、石、酸、バ	やや軟質 浅黄橙(10 Y R 8/3)	内外 1.8	平成2年度 ST001
120	〃	復原体部径31.0cm(17%存)。外面タテハケ、内面ナナメハケ。透孔は円形。凸帯は台形	長、石、酸、バ、黒	堅緻(内面須恵質) 外 浅黄橙 (7.5 Y R 8/6) 内 におい黄橙 (10 Y R 7/2)	内外 1.8	平成2年度 A区内堀
121	円筒埴輪 B 類	復原底部径26.0cm、復原体部径30.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ及び低部付近は縦位ユビナデ。凸帯裏に指頭圧痕あり。透孔は円形。凸帯は台形。	チ、長、石、酸、バ、黒	極堅緻(一部須恵質) 橙(5 Y R 7/6)及び 灰(5 Y 6/1)	内外 1.7	平成2年度 A区外堀
122	円筒埴輪 体部 B 類	復原体部径34.0cm。外面タテハケ、内面ヨコハケ、ナナメハケ及び斜位ナデ。透孔は円形。凸帯は台形。	長、石、酸、バ	普通(内面須恵質) 浅黄橙(7.5 Y R 8/6) 及びにおい黄橙 (10 Y R 7/2)	内外 1.8	平成2年度 A区内堀
151	須恵器 高台付壺 底部	外面回転ヘラケズリ(逆時計回転)。内面回転ヨコナデ。底部は内面より穿孔(直径4.2×3.6cm)。人為的穿孔とみられる。高台は蛇の目状付け高台。長頸壺か?	砂粒をほとんど含まず精良。雲母粒、白色微粒子を少量含む。	極堅緻 外 灰オリーブ (5 Y 6/2) 内 灰白(5 Y 7/2) 器肉 灰白(5 Y 8/2)		平成2年度 外堀掘り残し 部分
155 158	須恵器 大甕	(同一個体各部位) 体部は外面細かな横位平行タタキ、内面無文当て具使用。口縁部は端部を下に拡張。底部付近外面はヘラケズリ。外面は自然釉(アメ釉)を厚く被る(一部ライトブルーの発色あり。) 底部内面も自然釉被り。胎土、色調は他の資料群に近似するが平底、口縁部形、自然釉の多さなどから見て年代を降る可能性あり。	砂粒をほとんど含まず精良。白色微粒子、モンリナイト、雲	堅緻 外 オリーブ灰(10 Y 4/2)~オリーブ黒(7.5 Y 3/1) 内 灰色(7.5 Y 8/1) 底部内面 オリーブ灰(10 Y 4/2) 器肉 赤灰(5 R 6/1)		平成2年度 155~157は A区外堀、 158はB区覆 土より出土。
159	須恵器 大甕 部	外面横位平行タタキ、内面(四角形の面をもつ)無文当て具痕。166と同一個体の可能性あり。	大粒の砂礫を多量に含む石、モンリナイト	堅緻 外 灰白(N 7/) 内 器肉 灰(N 6/)		平成2年度 A区外堀
161	円筒埴輪 底部 A <sub>1</sub> 類	残存高14.0cm。復原底部径21.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ、一部ナデ。底端部内面に木理圧痕有り。突帯はM字形。	チ、石、長、バ、火	極めて堅緻だが風化が著しい。 赤(7.5 R 4/8)	内外 1.7	平成元年度 C区
165	円筒埴輪 口縁部 A <sub>2</sub> 類	復原口縁部径37.0cm。外面タテハケ、内面ヨコハケ。口縁端部ヨコナデ。	チ、長、石、バ	普通 橙(5 Y R 7/6)	内外 1.8	平成3年度 1 T
166	須恵器 大甕 口縁部	全体に粗雑な作り。あらい描き凸線文で画した上下の文様帯に同一工具による波状文を巡す。胎土、作り、文様から他の資料群とは全く異なる窯の産と思われる。	大粗の砂礫を多量に含むチ、石、凝、モンリナイト。	堅緻 外 暗灰(N 3/1) 内 器肉 灰白(N 7/1)		平成3年度 7 T溝 昭和57年度 内堀出土品 (第4集報告 参照)と同一 個体。
167	円筒埴輪 体部 A <sub>1</sub> 類	復原口縁部径28.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ及びヨコナデ。透孔は現状の1段目、2段目に90°よりやや緩い角度をずらして円形を穿つ。凸帯はM字形。	チ、長、石、酸、バ、黒	堅緻 赤(7.5 R 4/8)	外 1.7 内 3.1	平成3年度 2 T
169	円筒埴輪 体部 A <sub>2</sub> 類	復原体部径24.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ。透孔は円形。凸帯は台形。	チ、長、石、バ	普通 橙(2.5 Y R 6/6)	内外 2.0	平成3年度 1 T



### 三 小 結

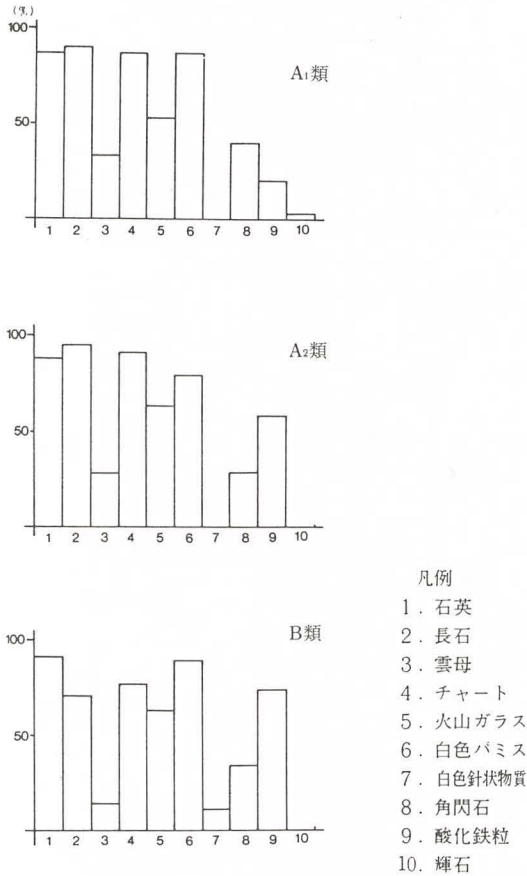
#### 瓦塚古墳の埴輪について

瓦塚古墳からは、円筒埴輪（朝顔形を含む）と各種の形象埴輪が出土している。ここでは前者と後者を分けて述べていく。なお、形象埴輪の構成・配置に関しては、『調査研究報告』で詳述するので、ここでは概略だけにとどめておく。

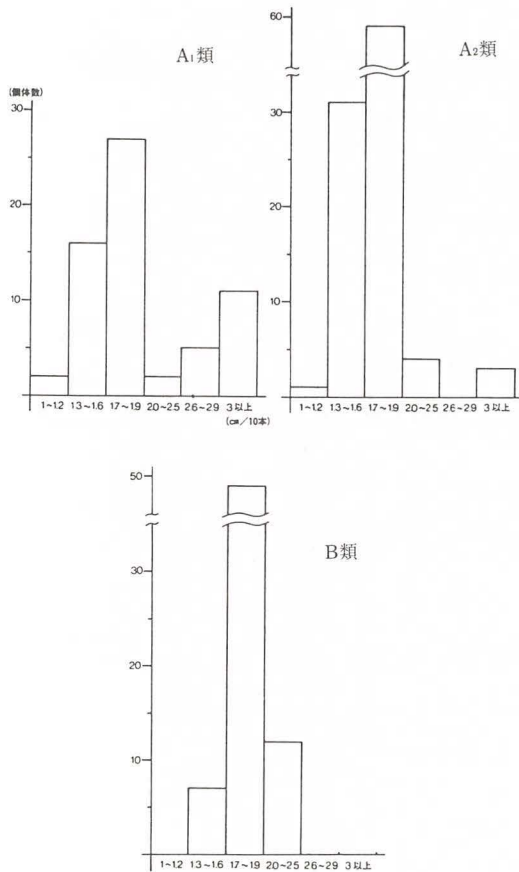
#### (一) 円筒埴輪について

瓦塚古墳の円筒埴輪は諸特徴からA<sub>1</sub>類、A<sub>2</sub>類、B類に分類される。各類の特徴は先述した通りなので、ここでは胎土とハケメの検討を試みたい。

第2表は円筒埴輪（朝顔形を含む）の胎土の観察結果である。縦軸はパー



第2表 円筒埴輪の胎土上の特徴



第3表 円筒埴輪のハケメの特徴

セント、横軸は各要素を表している。1、5、6、8の分布状況は、ほぼ各類とも同様な結果が出ている。しかし、7の白色針状物質はB類にのみ確認されるものであり、9の酸化鉄粒はA<sub>1</sub>類では20%、A<sub>2</sub>類では58%、B類では74%と、各類ごとの含有率に差異が現れている。このことは色調や焼成の違いとともに、各類のもつ特徴の一つといえることができる。

第3表は、円筒埴輪（朝顔形を含む）のハケメの観察結果である。ハケメ一〇本に対する幅を示したものであり、縦軸は個体数、横軸は幅（センチ）を表す。各類ともに、1.7、1.9センチに分布のピークが存在するが、A<sub>1</sub>類はそれ以上のハケメもかなりの数存在することが分かる。逆にB類は、それ以上のハケメがあまり存在しない。A<sub>2</sub>類はそれ以上のハケメも存在するが、A<sub>1</sub>類ほどに目立つものではない。つまり、二子山古墳の分析結果ほどは明瞭ではないものの、瓦塚古墳においても窯（工人）の違いを示唆していると思われる。

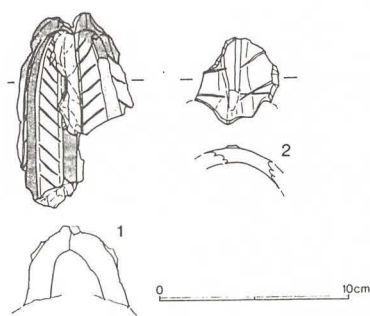
円筒埴輪の編年の位置付けに関してであるが、今回A<sub>1</sub>類とA<sub>2</sub>類に属する完形品が出土した。31はA<sub>1</sub>類に属する埴輪であるが、前回の報告（第七集『奥

の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』を参照) 中の完形品とプロポーションなど似る特徴を持つ。しかし、細かく見てみると内面の調整が前者がナナメハケ主体なのに対して、後者は第二段までは縦・斜位のナデを施しており、種類もA<sub>2</sub>類である。同じA<sub>2</sub>類として21があるが、全体のプロポーション、調整技法などかなりの差異が存在する。21と31は同じ古墳から出土したとは思えないほど違いが大きい。凸帯の断面をみると、21は台形ではあるがかなりつぶれた形状をもち、31に関してはM字形を呈する。ともにやや退化した特徴を持ち、四条凸帯である点で共通する。二子山古墳の円筒埴輪とは全体の特徴から見て、やや新しく位置付けされるであろう。しかし、須恵器にかなり似た特徴を有していることなどから、それほど隔たりを考える必要はないと思われる。

## (二) 形象埴輪について (とくに馬形埴輪の馬鐸に関連して)

今回の報告で、瓦塚古墳の形象埴輪に新たに、人物埴輪(振り分け髪の男、踊る男など) 三体以上、馬形埴輪三体以上、水鳥埴輪二体(うち「白鳥」一)、犬形埴輪二体、鹿形埴輪一体などが加わった。また、今回は取り扱わなかったが、盾持ち人埴輪も一体発見されている。詳しい検討は『調査研究報告』に譲るとして、ここでは馬形埴輪の馬鐸に注目してみたい。

99が馬鐸の破片である。昭和六一年報告では、天冠状埴輪と報告されたものであるが、今回新たに接合した。後述の菖蒲町東浦古墳出土の馬形埴輪の馬鐸に近似することから、馬鐸と判明した。訂正しておきたい。特徴などは、本文に詳述したので省くが、馬形埴輪の胸繫に付けられていたものと考えられる。同様に馬鐸の付くものとして124・133が存在するが、諸特徴から明確に



第56図 菖蒲町東浦古墳出土馬形埴輪(馬鐸)

判別することができる。ほかに同様な特徴を持つ破片が極端に少ないので、はっきりしたことは言えないが、馬形埴輪がもう一体存在していた可能性が極めて強い。

第56図が菖蒲町東浦古墳出土の馬形埴輪(註1)の馬鐸である。若干表現の違いはあるものの、おおむね同形の馬鐸である。東浦古墳は全長約五五呎の東西に軸をもつ前方後円墳であり、馬鐸は周堀から発掘されたもの

である。鮮やかな赤色を呈し、焼成は良好である。1の上部および粘土を貼り付けた三本凸帯には赤彩が施されている。下端は開口していたようであり、その点も瓦塚古墳例とも共通する。ヘラ工具による線刻の方向が、若干異なるところはあるものの、大きさなどかなり近似した資料と言えよう。2の資料は、1とは凸帯の形、全体の湾曲など差異が存在するが、馬鐸と思われる。

場所の異なる二古墳から、同じような表現をもつ埴輪が存在する。(註2)とは、同じ窯あるいは工人からの供給品である可能性が極めて強い。円筒埴輪のA類とほぼ同じ諸特徴をもつこの馬鐸は、生田塚窯からの供給と考えられるが、同様な馬形埴輪は出土していないので、可能性だけにとどめておく。

さて、もう一つ問題にしなければならぬ埴輪に152の水鳥がある。白泥を塗布しているという点から、白い鳥を表現したことは間違いない。顔から嘴にかけてが欠損しており残念であるが、かつて出土した梶指定文化財の水鳥埴輪と同じく双脚で立ち上がる、埼玉古墳群特有の埴輪である。断定はできないが、まっすぐに立ち上がる首といい、「白鳥」とみて大過ないと考える。

(日高 慎)

(註)

1、今回東浦古墳出土の馬形埴輪の実見・実測と、本報告書への掲載を許していただいた菖蒲町教育委員会の三ツ木貞夫氏に感謝いたします。

2、騎西町小沼耕地遺跡第一号古墳出土の馬形埴輪と大宮市井刈古墳出土の馬形埴輪、さらに鴻巣市生出塚窯跡出土の馬形埴輪に共通の杏葉表現があったことが分かっている。

田中正夫『小沼耕地遺跡』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第100集）財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 一九九一

## V 結 語

### 一 二子山古墳

#### 周堀形態の特異性について

二子山古墳は長方形の二重周堀をもつ古墳とみられてきた。しかし、今回の調査によって、前方部前面の内堀の外側立ち上がりラインは前方部先端の墳裾ラインと平行するものでなく、斜行することが確認された。墳丘主軸とは約八三度をなす。

このことは、整然とした長方形の二重周堀をもつ稲荷山古墳と比較すると、大きな差異として認識されるばかりでなく、それが何に起因するのかという問題が新たに提起される。

昭和五五年度の調査では、後円部背後の外堀の外側立ち上がりラインが、やはり主軸と直交せずに、約八六度をなすことが確認されている。その理由としては、地籍図上に、將軍山古墳と二子山古墳の間に二基の円墳が記載されており、そのうち南側の一基が二子山古墳築造時にすでに所在しており、これを避けたためではないかという推定がなされている。<sup>(註1)</sup>

前方部前面についても、二子山古墳と瓦塚古墳の間に削平された古墳があって、これを避けるために、周堀の変形を余儀なくされた可能性もありうる。しかし、地籍図上には古墳は記載されておらず、現状が住宅地のため、古墳の痕跡を確認することも困難である。

ところで、昭和五九年度の調査では前方部前面の東寄りの外堀内側立ち上がりラインが、わずかな段として確認されている。これを西側に延長すると、平成二年度B区での推定ラインと接続するが、その位置は、ちょうど墳丘主軸線の延長線上にあたる。主軸より左側の立ち上がりラインと右側の立ち上がりラインのなす角度は約一七四・五度である。

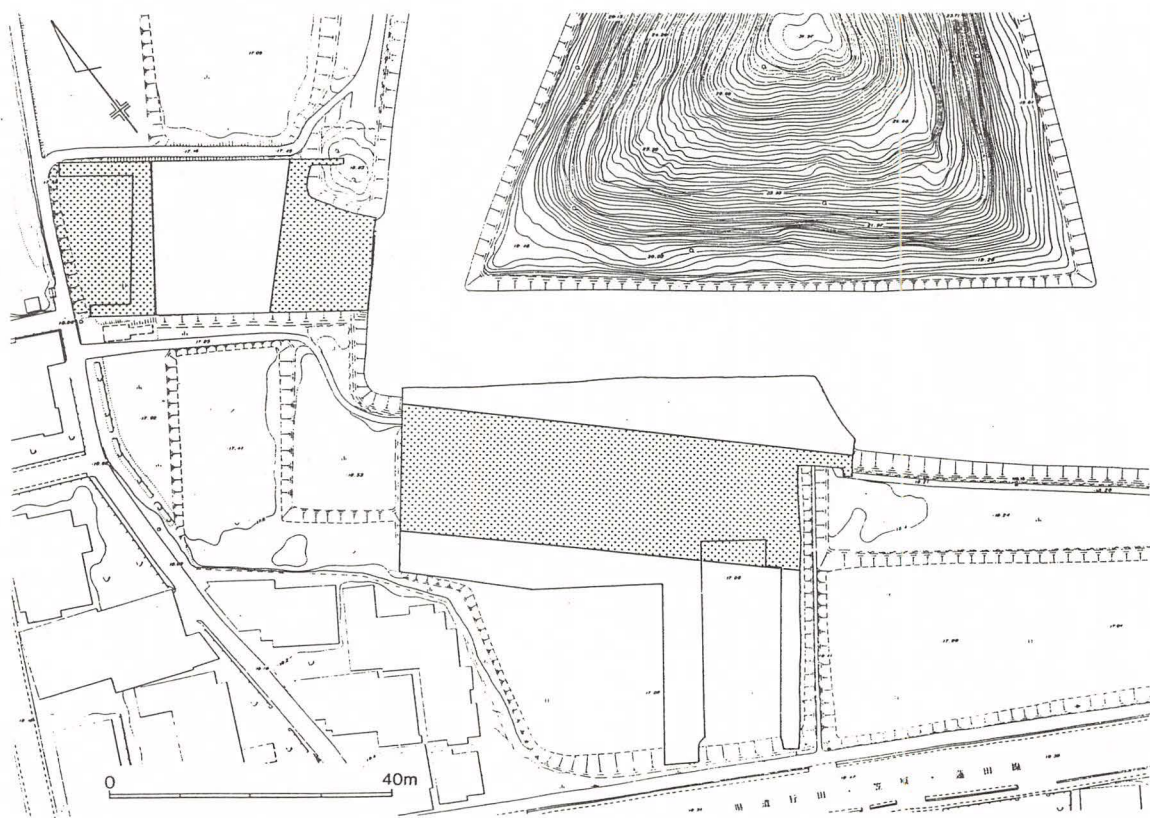
このように、周堀が前方部前面の主軸線上で屈曲する例は、埼玉古墳群では瓦塚古墳に認められる。瓦塚古墳の場合、後述するように、周堀の屈曲は前方部の墳丘形態(剣菱形)に起因するものである。二子山古墳の場合、前方部先端は直線的に復原されており、墳丘の形態に対応して、周堀が屈曲したのかどうかは明らかでない。しかし、瓦塚古墳より築造時期の遡る二子山古墳に既に、このような周堀の設計が用いられたとみてよいならば、剣菱形周堀の採用時期を知る上で重要な知見ということができよう。

なお、外堀の外堤側立ち上がりラインは、B区の第1トレンチでわずかに確認しえたのみであった。かつて水田の営まれた場所では、ほとんど削平されているが、西側の民家の密集する部分や県道の敷地下に良好な状態で遺存している可能性がある。

#### 中堤の構造について

前方部の西側には、盛土を伴う中堤が一箇所保存されている。埼玉古墳群の他の古墳では、土地利用などの関係で中堤はローム面以下でしか遺存していないため、この部分の保存状態の調査は中堤の構造を知るうえで、大きな知見を提供した。

確認調査の結果、中堤は旧表土層の上に十分に叩きしめられた盛土が行われていた。旧表土層の上面の標高が一七・六m、盛土上面の標高が十八・六



第57図 二子山古墳の保存修理（スクリーントーンは盛土復原）

崩であり、盛土は若干削られている可能性があるもので、一層強の高さがあつたものとみられよう。盛土は水平に積まれており、全部で六層に分層された。中堤の基底部はローム基盤層を削り出して成形されており、周堀の立ち上がり部と一体をなしている。ただし、中堤は周堀からただちに立ち上がるのではなく、周堀との間に高さ〇・二層、幅〇・八層のテラス状の部分を介している。これと同様のテラス部は外堀の外堤側立ち上がり部にもあり、両者の関係が注意されるところである。中堤斜面の勾配は、遺存する盛土上端とテラス部外側の立ち上がり部とを結んだ場合、約二八度となる。

ところで、外堀の底面は最も低い部分で標高一六・四層前後を測る。中堤上面との比高差は、実に二・二層を測ることとなり、そこに高さ一層程の円筒埴輪が林立している状況を想定すると、中堤には、余人の立入りを拒む十分な機能があつたものと思われる。

なお、旧表土上面の標高が今回の調査で確認され、かつ、中堤の盛土規模が把握されたことにより、墳丘の盛土量と周堀の掘削土量との比較研究が可能となった。精密な試算を含め、今後の課題とならう。

#### 中堤の保存修理について

調査終了後、ただちに、その成果をもとにした中堤の盛土復原工事を実施した（第57図参照）。中堤の斜面下場は、遺構保護の必要上、実際の推定ラインより一層外側に出して復原を行った。グラウンドレベルは一七・一層、天端は一八・四層とし、斜面部は一割五分の安全勾配で設計、施工した。

なお、前方部南側のB区では、外堀の中堤側立ち上がり部が部分的に確認されていたが、この部分は保存状態が良好でなく、東側の隣接地で昭和五九年度に確認された立ち上がりラインとの連絡が困難であった。

このため、この部分は、中堤が損壊しているものと判断して、推定線を設定したことを付け加えておきたい。

### 円筒埴輪について

二子山古墳の円筒埴輪は、胎土、色調、形態の特徴から明瞭に三類に分類された。A<sub>1</sub>類は鮮やかな赤色を呈する厚手の大型品である。胎土や色調から鴻巣市生出塚窯からの供給が考えられた。口縁部内面に格子状の特殊な窯印を線刻する資料があり、生出塚窯の特定窯から全く同様の窯印を刻んだものが多数出土しているの<sup>(註2)</sup>で、生出塚窯からの供給は決定的になったといってい

だらう。  
A<sub>2</sub>類はA<sub>1</sub>類より薄手で中型品かと推定された。橙色を呈するものが多いが、鉄分の含有量の少ないことを示しており、生出塚窯から供給の可能性もあるが、全体を知り得る資料がないので、今のところ不明確である。

B類は白っぽい色調(浅黄橙色が基調)からA類とは簡単に区別できる。また、細かいハケメを用いる点でもA類と異っており、工人の相違が考えられた。しかし、B類にのみ白色針状物質(ウニの骨針)を胎土に含むものが見出せる点からすれば、南比企丘陵の製品の可能性が高い。B類には方形透孔をもつ個体が知られ、昭和四二年度出土品からは六条凸帯の高さ一拵ほどの個体に復原される<sup>(註3)</sup>。南比企丘陵に位置する東松山市桜山窯跡には方形透孔をもつ大型の個体が知られているので、有力な供給源の候補地といえることができる。桜山窯跡の操業年代はMT15型式の新しい段階からTK10型式の古い段階の須恵器窯に引き続いて埴輪窯が築窯された<sup>(註4)</sup>とみられている。

ところで、円筒埴輪の方形透孔は川西宏幸氏の編年によれば第V期(五世紀末以降)では異例とされている。しかし、関東地方では群馬県藤岡市七輿



- |          |           |
|----------|-----------|
| 1. 宇佐久保  | 8. 姥ヶ沢    |
| 2. 八幡山   | 9. 桜山     |
| 3. 蛭川    | 10. 和名    |
| 4. 宥勝寺北裏 | 11. 馬室    |
| 5. 赤坂    | 12. 生出塚   |
| 6. 割山    | 13. 群馬・本郷 |
| 7. 権現坂   |           |

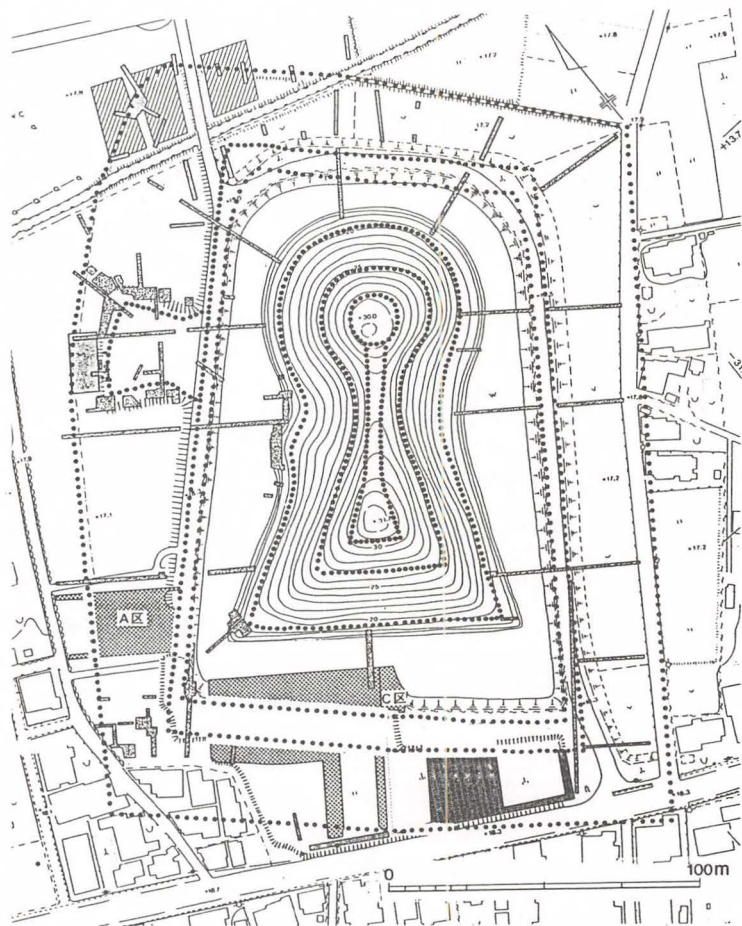
埼玉古墳群と生出塚埴輪窯・桜山埴輪窯の位置(三県シンポジウム『埴輪の変遷』掲載図を改作)

山古墳、埼玉県東松山市諏訪山1号墳、栃木県宇都宮市塚山古墳群、茨城県玉造町三味塚古墳などにV期の早い段階の資料が知られ、京都府福知山市稲葉山10号墳(註6)など近畿地方にも、この期の資料が確認されている。五世紀末から六世紀前葉に限定される一種の復古様式と推定するが、二子山古墳の築造年代を考える上では、重要なポイントとなる。

二子山古墳の円筒埴輪は、このように、少なくとも、生出塚窯と桜山窯の二つの生産地からの供給を受けていたと推定される。このうち生出塚窯は直線距離にしてわずか八詰みであり、元荒川水系づたいの舟運によれば製品の運搬は比較的容易である。ところが、桜山窯は直線距離でも一七詰みと遠く、仮に舟運を利用したとしても、都幾川か越辺川を流下して入間川に出て、和田吉野川(現荒川)を遡上するか、横見川などの小河川を経由するしかなく、蛇行のため遠距離となり、運搬には相当の困難を伴ったものと考えざるをえない。このような舟運についても、現在よりも、運河などが整備され、各河川との連絡のとれていたことが前提条件となる。

このような遠隔地からの埴輪の供給は何を物語っているのだろうか。そこで、まず墳丘主軸長一三五拵ぶせを測る武蔵最大の前方後円墳である二子山古墳には、どれほどの円筒埴輪が立てられていたのか試算してみることにしよう。発掘調査の所見によれば、円筒埴輪列は外堀外側の外堤上に一列、中堤上には内堀側と外堀側の二列の存在が推定されている。これらは、全て周堀内に崩落していて、原位置を留めるものがなかったため、設置された円筒埴輪の間隔は不明である。しかし、出土量からみて、外堤では間隔が疎で、中堤では密であったとして間違いはないだろう。

一方、墳丘には調査が及んでいないが、円筒埴輪を樹立するために作られ



二子山古墳円筒埴輪配列推定図

たと推定されるテラス状の部分が、墳丘裾部と中堤を巡っており、このほか、墳頂部にも円筒埴輪が巡るのが通列であり、都合、三重の円筒埴輪列が推定可能である。

そこで、円筒埴輪列の推定ラインの延長距離を求めてみることにしよう。外堤は一部未調査なので、やや不確実な数値とならざるをえないが延長八〇拵ぶせとなる。同様にして、各延長を求めた上で、円筒埴輪の一拵あたり個数で除して一を足せば、総個体数を試算することができる。間隔については、完形資料などの法量から口径四〇拵ぶせの個体を想定し、外堤では一拵あたり二本、その他では一拵あたり三本、つまり器壁間で一〇拵ぶせと仮定した。その結果は表に示す通りであるが、合計は五〇九二本にのぼった。

円筒埴輪列の位置	延長距離	(一間あたり)	本数
外堤内縁	八一〇呎	一本	八一一本
中堤外縁	六三〇呎	二本	一二六一本
中堤内縁	五七〇呎	二本	一一四一本
中堤造出し	九〇呎	二本	一八一本
墳丘裾部	三八二・五呎	二本	七六六本
墳丘中段	二七〇呎	二本	五四一本
墳頂部	一九五呎	二本	三九一本
円筒埴輪列の総個体数			五〇九二本

概数ではあっても、およそ五〇〇本の大型の円筒埴輪の製作、供給、据え付けとなると、その労働量の大きさが、あらためて認識されることとなる。さらに、各種の形象埴輪の配置も推定されるので、二子山古墳への埴輪の供給は、莫大な労力を要したことになる。

生出塚窯と桜山窯の二窯から埴輪が供給されたのは一定期間内にそれを達成するために欠くべからざる措置であったとの見方も可能であろう。

さて、生出塚窯は、その立地や供給規模の大きさから、基本的には埼玉古墳群直属の埴輪生産窯との性格付けが可能であろう。しかし、一方の桜山埴輪窯の場合はどうかであろうか。比企地方は埼玉古墳群の出現以前から独自の政治的小地域圏を形成し、窯業の上でも、諏訪山33号墳の円筒埴輪が示すよ

うに、五世紀の中葉に近い時期から 窯を築いて須恵質の製品を焼成してきた先進地として位置付けられる。<sup>(註7)</sup>

これに対して、埼玉古墳群周辺は新開地の感が強く、稻荷山古墳は五世紀後半のある時期に突然出現した。その墳丘の巨大さと、金錯銘鉄剣の内容から、埼玉の首長は比企地方の首長よりも、はるかに大きな権力と異なった出自をもっていたように思われる。

このような政治背景を踏まえると、比企地方からの埴輪の供給は、埴輪生産が地域の首長権の下で管理・運営されていたとみた場合、より大きな政治的勢力への貢納的意味合いを帯びたものであったろう。<sup>(註8)</sup>

ところで、二子山古墳に供給された円筒埴輪群の製作時期は同一なのであろうか。桜山窯から供給されたとみたB類は方形透孔や凸帯の特徴から、生出塚窯産のA類より形式学的に古い特徴をもっている。

筆者は、かつて、稻荷山古墳などの同様の事象から、一古墳における埴輪の複数回樹立を考えたことがある。それは、形式差を時間差に置きかえ、埴輪が損壊した段階での補植や、追葬時の追加樹立を想定したものであった。ところが、円筒埴輪の形式差が窯の差によることが判明した現在では、前述したように、同時供給の可能性も検討せざるをえなくなった。

一古墳における円筒埴輪の形式差の問題については、一瀬和夫氏のように、大型古墳が寿陵であり、築造に相当年数を必要とした結果、円筒埴輪にも時間差が生じるとの意見があり、傾聴に値する。埼玉古墳群では、稻荷山古墳、二子山古墳だけでなく、瓦塚古墳や奥の山古墳においても、明瞭な形式差を示す円筒埴輪が共存している。そして、二子山古墳、奥の山古墳、瓦塚古墳については、それが生出塚窯産と桜山窯産に弁別されるものとみられる。こ



のことから、生出塚窯と桜山窯は一定期間、併存していた可能性が高く、両者は相互補完的に機能していたとも考えられる。しかし、同時供給なのか、時期が異なるかは容易に決定することはできないだろう。今のところ出土状況に恵まれないが、埴輪の据え付け用の溝やピットなどを精査して、切り合の有無を確認するなど、遺構の細心の調査によって結論をまつしかないと考えている。

## 二 瓦塚古墳

瓦塚古墳については、平成三年度末をもって、保存修理工事が完成するので、その詳細については保存修理報告書に譲ることとし、遺構的な記載は、いくつかの特徴的な事項のみに限定したい。また、形象埴輪群についても、その詳細な分析や全体の配置復原案などは、検討時間を要するので、『調査研究報告』で果たそうと思う。

### 墳丘と周堀の平面プランについて

瓦塚古墳は計測点を墳丘裾部（周堀の立ち上がり部下場と一致）にとると、主軸長七三拵の前方後円墳に復原することができる。後円部の直径は三六・五拵で、墳丘主軸長のちょうど二分の一にあたる。このことから墳丘の設計型は、基本的には仁徳陵古墳型を採用したものとみられる。埼玉古墳群内で仁徳陵型をとるものに、先行する二子山古墳があり、その設計型を踏襲したとみてよいだろう。ただし、前方部前面が主軸上で尖る剣菱形を呈しているのは新たな設計法が付加されたものと評価すべきであろう。

前方部が剣菱形となる代表的な古墳に、大阪府今城塚古墳や奈良県見瀬丸山古墳があり、前者は継体天皇陵、後者は欽明天皇陵の有力な候補である。

瓦塚古墳の前方部が剣菱形となるのは、おそらく、近畿地方の大王陵の影響を受けたものだろう。

一方、周堀は大局的には二重の方形周堀といえるが、後円部側で狭く、台形に近い形態となる。また、前方部前面では主軸線上に屈曲部が認められた。これは剣菱形前方部に対応するものであろう。ただし、この部分の周堀は主軸に対して左右対象形でなく、内堀は東側で幅を減じている。このような設計の原因は明確ではない。しかし、前方後円墳の正面観が側面にあると仮定した場合、剣菱形前方部は、少ない労力で墳丘を壮大に見せる効果をもって、西側面からの眺望に限れば、周堀の屈曲と、その幅の減少は、奥行きを強調する効果がある。

### 墳丘の立面構造と円筒埴輪列について

墳丘の保存状態の良好な造出し部からくびれ部の調査結果によって、瓦塚古墳は旧表土層上面に盛土がなされていて、墳丘裾部にはテラス状の施設のないことが知られた。また、墳丘の段築は明瞭でなく、中段に幅の狭い犬走り状の平場が設けられていて、そこに円筒埴輪列が巡ることが確認された。

埼玉古墳群では、二子山古墳や丸墓山古墳には明瞭な段築の痕跡が残るが、平成三年度に調査した將軍山古墳の前方部西側墳丘では瓦塚古墳と同様に犬走り状の狭い平場が確認されただけで、段築は明瞭でなかった。石を全く用いないこととあわせて、埼玉古墳群の中でも新しい墳丘造営法とみてよいのか、今後の課題となろう。

円筒埴輪列については、昭和六三年度の第2トレンチの墳丘中段において、七本分が原位置で検出された。平均の芯々間は約三八拵であった。瓦塚古墳の円筒埴輪は口径三〇拵を超えているので、ほとんど口縁部が接する状

況で据え置かれたものとみられる。墳丘中段の総延長は約一七六メートルと推定されるので、試算すると四六四個の円筒埴輪が巡っていたこととなる。円筒埴輪列は、破片の出土状況から、埴頂部にも巡っていたと判断された。

#### 造出しと出土土器について

瓦塚古墳の造出しは西側くびれ部より少し前方部に寄った部分に付設されている。平面形は幅八メートル、奥行六・五メートルの方形である。

造出しは一般に祭祀の場と考えられているが、瓦塚古墳の場合、造出し部は多数の人が集まるには狭小である。そればかりでなく、造出しは約一二度の緩斜面をなしていて、上端は埴頂部につながっていると推定された。

造出し周辺から出土した土器群は、本来、すべて造出し上に据え置かれたものとみてよいだろう。その主要な組成についてみると、土師器杯<sup>2</sup>、土師器鉢<sup>2</sup>、須恵器高坏<sup>3</sup>、須恵器堤瓶<sup>1</sup>、須恵器器台<sup>1</sup>、須恵器壺<sup>1</sup>、須恵器甕<sup>5</sup>となる。

土器類の年代や生産地については既に報告している<sup>(註8)</sup>ので、詳述しないが、大容量の甕が多数据え置かれたことに特に注目してみたい。近年、首長権継承儀礼との関連で聖水を用いた祭祀を復原する研究者があるが、筆者は、これらの容器が聖水で満たされていたとは考えていない。

造出し上に据え置かれた土器類は、西側中堤上に集中して配置された人物埴輪群と一体的に把握することが必要である。その内容は歌舞音曲の表示を中心としていたことから、殯りの様子を示したものと理解される。造出し上の土器類は殯りの場で挙行された神人共食の段階で用いられた容器と食器であったとみる事が可能であり、甕類は大量の酒が消費されたことを物語っている。殯りは、もとより狭い造出し上で執行されたのではなく、豪族居

館か、その付近の殯宮で執行されたはずである。その際に用いられた土器類が運ばれて造出しに据え置かれたのであろう。

造出しは柩の通り道としての機能を備えているが、恐らく、これらの土器類は、柩の通過した直後に、その道を閉塞する目的で据え置かれたのだろう。こうすることによって、古墳を礼拝する者にも、葬祭の完了を明示することができたのではないだろうか。

#### 動物埴輪について

墳丘西側の中堤の南端には、各種の動物埴輪が立てられていた。出土状況は中堤から外堀へ崩壊して流れ込んだものだが、恐らく直近の中堤上が原位置とみてよいだろう。残念ながら、この付近の外堀は水田に改作された際に、大規模な土取りが行われていて、遺構、遺物とも保存状態が良好とはいえなかった。このため、完形に近いものは二体の水鳥形埴輪くらいで、鹿のように角部しか遺存していないものもあった。

動物埴輪の内訳は、犬<sup>2</sup>個体、水鳥<sup>2</sup>個体、鹿<sup>1</sup>個体、飾馬<sup>3</sup>個体以上であった。この内、水鳥形埴輪は全体像を復原でき、貴重な資料となった。共に脚部が造形されていて、台部の上に二本足で立ち上がる姿が表現されている。このような表現法は、今のところ埼玉古墳群とその周辺にしか知られておらず、独自の造形といえる。共に水かきの付いた足が示されており水鳥であることが確かである。小型品の方は、脚部が逆三角形に作られ、全体に簡略な作りであるが、東京国立博物館寄託の埼玉古墳群出土品と共通する点が多い。大型品の方は、体部や羽が写實的に造形されている。長い首からみても白鳥を表現したことは容易にわかるが、白土が全面に塗布されていたことは、白鳥であることを決定的にした。水鳥形埴輪といえ、近畿地方では、

白鳥が代表的で写実的な作品が多く製作された。一方、関東地方では、白鳥や鴨のほかには鶴などもあり、バラエティーに富むが、正確に白鳥を模したものは極めて稀であった。瓦塚古墳の水鳥形埴輪は近畿地方の作風に近いが、双脚で立ち上がるという独自性が示されており、貴重な存在といえる。

犬形埴輪については、猪と組み合わせられて卷狩の様子が再現されることが一般的である。<sup>(註10)</sup> 前述したように、土取りの際に、猪形埴輪が失われた可能性が十分考えられる。ただし、鹿形埴輪が獲物として犬と組み合わせられていた可能性もない訳ではない。

昭和五七年度の調査によって、瓦塚古墳の人物埴輪群像の中核部分が明らかとなったが、今回、その隣接地から、狩猟場面を示す犬と鹿、そして、これとは恐らく異なった意味で置かれた水鳥形埴輪が出土したことは、これらが総体として何を意味しているのかという根源的な問題を解明する上で、極めて重要な課題を提供したものとえよう。

(若松 良一)

註

- 1 杉崎茂樹『埼玉古墳群発掘調査報告書第五集 二子山古墳』埼玉県教育委員会 一九八七
- 2 山崎武『鴻巣市遺跡群Ⅲ 生出塚遺跡D・E地点』鴻巣市教育委員会 一九八七
- 3 註1文献第22図
- 4 水村孝之他『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 一九八二
- 5 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 一九七八
- 6 山城考古学研究会『丹波の古墳Ⅰ』一九八三
- 7 若松良一他『諏訪山33号墳の研究』私家版 一九八七

8 若松良一「造り出し出土の供献土器について」『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館 一九九〇

9 辰巳和弘『高殿の古代学』白水社 一九九一

10 若松良一「埴輪の種類と編年——人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』第9巻 雄山閣 一九九二